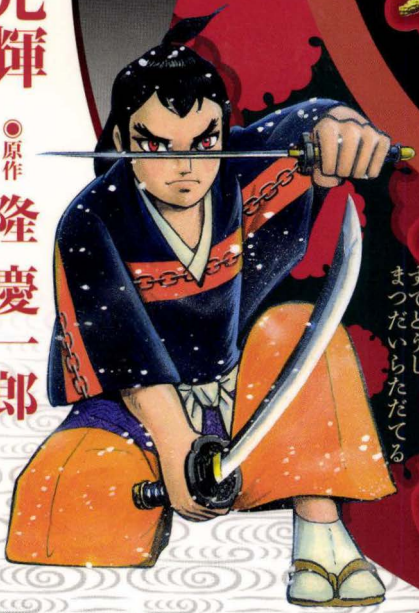
横山光輝

◉原作 隆慶一郎

捨て童子 松平忠輝 上

すてどうじ まつだいらただてる



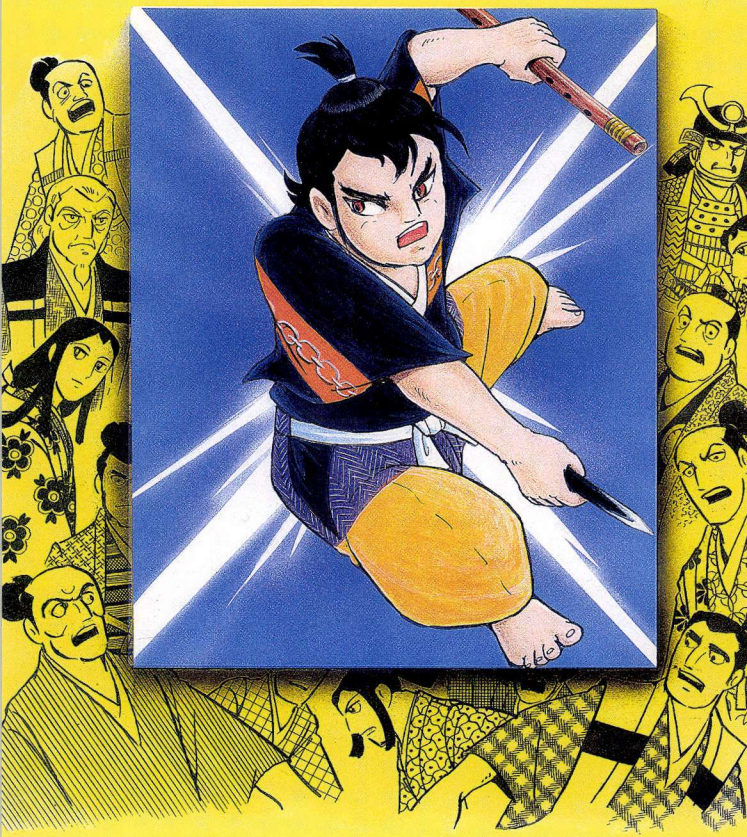
秋田文庫



上

横山光輝
◉原作
隆慶一郎
（講談社文庫）

Akita Bunko



捨て童子 松平忠輝 上

横山光輝
◉原作 隆慶一郎

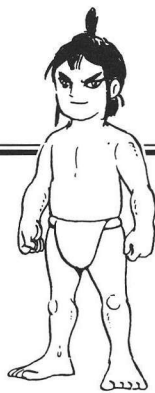
（講談社文庫）
Akita Bunko

目次

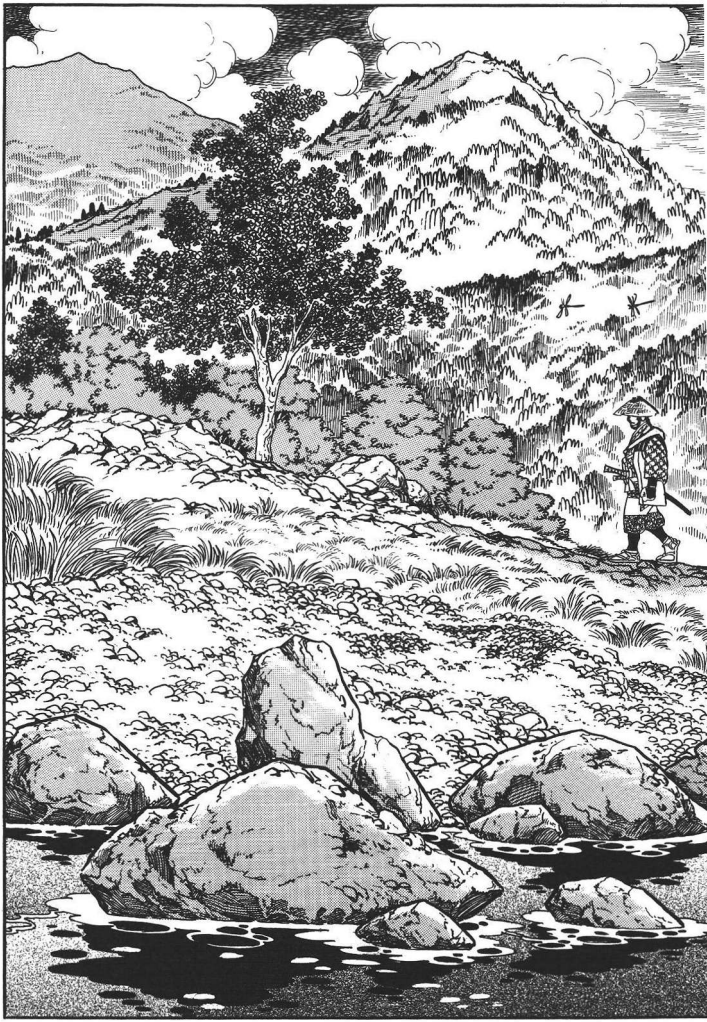
鬼っ子 5
別式女 63
武芸指南役 125
秀忠の屈辱 155
忠輝と千姫 221
柳生宗矩 259
暗殺団 291
木の上の初恋 327
道々の者 347
柳生領潜入 371
怒りの剣 409
新将軍 439
若き名代 467

●この作品は一部フィクションであり、実在の個人・団体等にはいっさい関係ありません。

鬼(おに)っ子(こ)




慶長三年九月
（一五九八）
太閤秀吉が死んで
まだ半月……
鬼怒川沿いの道を
ゆく主従があった




主の若者は
雨宮次郎右衛門忠長
当時　関東十八代官の
一人として頭角を現し
てきた大久保長安の
手代衆であった


供の者は武田忍者の
流れをくむ才兵衛


若！
天下分け目の
戦は起り
まするか
次に天下を治めるのは
誰の目にも家康公だと
わかっている
だが　政権交代が
無血で行われるとは
思えぬ


天下分け目の決戦となれば　家康公は全軍を西に集結せねばならず　関東は空になる
万一　関東の諸大名が西に味方して徳川軍団の背後を衝けば　合戦は無残な敗北に終る
それゆえ　大久保長安さまは　手代を探索のため　関東各地に一斉に放ったのじゃ
そうでもなければ我等がこんな田舎にくるわけがなかろう
代官の手代とは領内をくわしく調査し領民の話に耳を傾けその国の経済状態を調べ代官に報告するのが仕事であった
だが　ひそかに隠密の役目もしていた


それにしても暑いのう
まだ残暑がきびしゅうございますから
いかがです川べりで休み汗をお拭きなされ
そういたすか




ザッ






ふーっ
冷たくて
いい気持だ










子供がいたが
目のまよいか





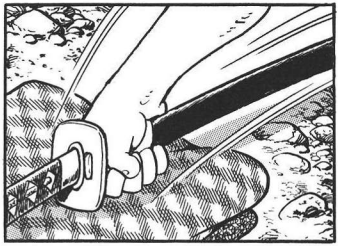







わぁ

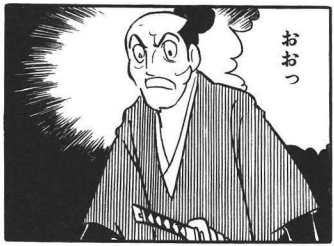





若
どうなされました？
水の中に子供がいた

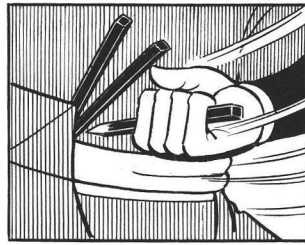

そんな馬鹿な！
私達がここにきてから　誰一人見かけませぬ
それ以前から潜っていられるわけはなくなにかの見間違いでございましょう




おおっ

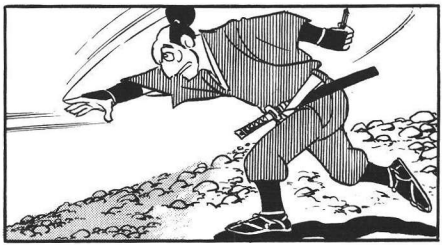

ニヤッ


こいつ
どこから
きた

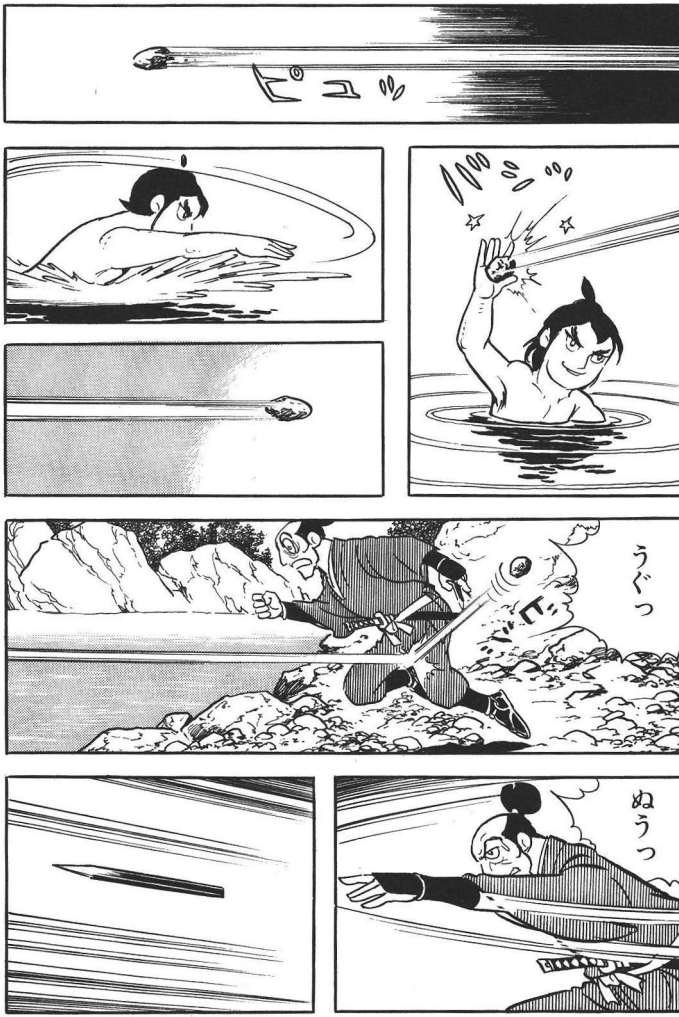





才兵衛
よせっ
子供だ



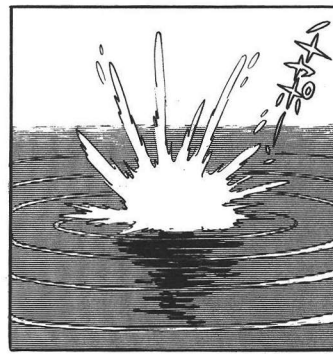


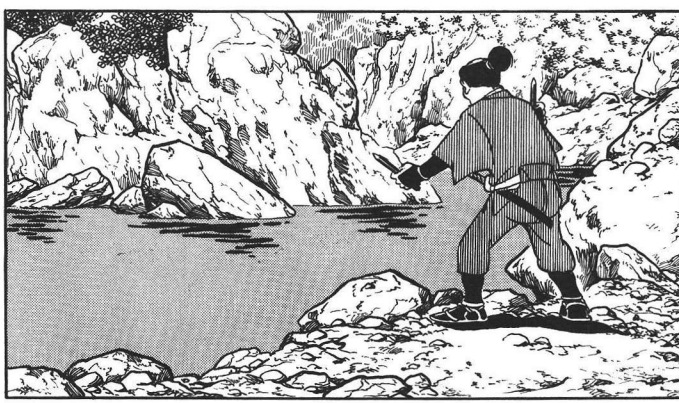

ヒュ
ハッ
うぐっ
ぬうっ


ばーか

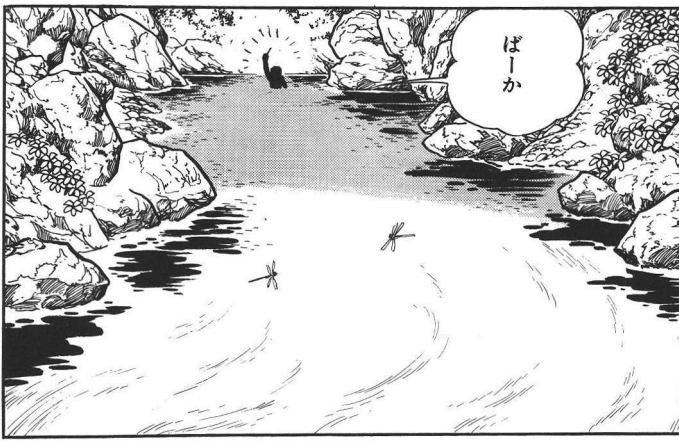

ビシッ


わしの棒手裏剣(ぼうしゅりけん)をかわすとは……信(しん)じられん


スタッ




若人間がこんなに長い間 潜っていられませぬ水の中にどこか抜け穴があるんですな
そうかもしれんな


ばーか


チャポ!


おおっ


あっ


おどろいた子供だなあんな上流に泳いでいっている
あれが子供なものですか
では　何だ河童か
あれは背の低い忍び者が子供に化けていたのですただの子供にあんな真似はできませぬ
そうか忍び者か
そうですそれも　よほどの手練にござりましょう


下野長沼三万五千石
皆川広照の栃木城


いやあ
雨宮どの
この暑いのに
お役目大変で
ございますな
お役目ゆえ
暑い寒いと
不平は申せ
ませぬ

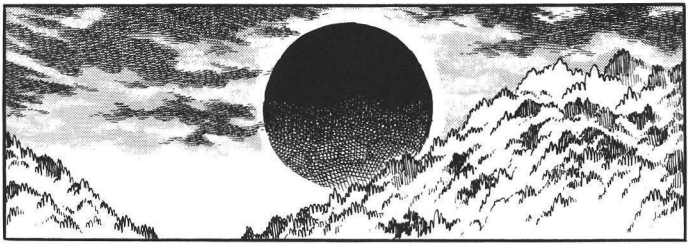






雨宮次郎右衛門は
徳川家の一介の手代に
すぎない　領主や重職の
面々に会える身分ではない
会うのは各藩の裏方　年貢収納を
役目とする手付
手代たちである

＊地方巧者（地方行政のベテラン）



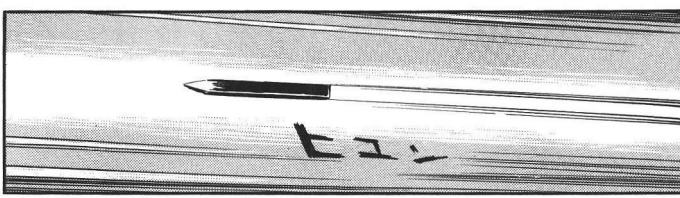

さあさあ
雨宮どの
もう一献……
おお


それにしても
同じ武士でも
我等の仕事は
損な仕事でございますなァ

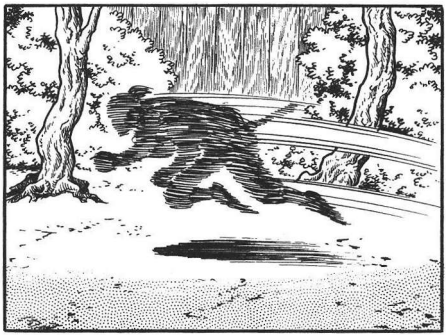

そうだ　戦場に出て
手柄を立てれば出世も
できようが　我等は
兵糧集めとその輸送だ
出世できる機会がない
そうよ
腹がへっては戦は
できぬというのに
その功績は認めて
もらえぬ


これは　不公平と
思うのだが
雨宮どのは
どう思われる

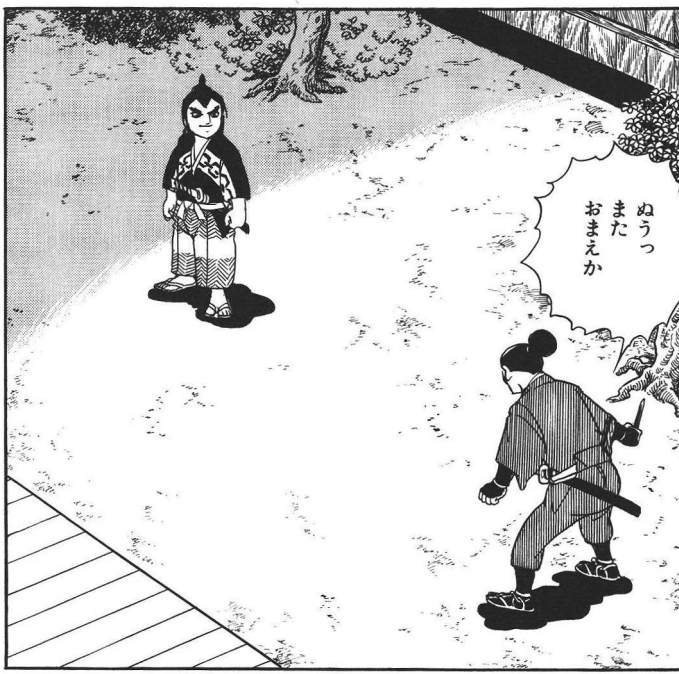

まったく
同感でござる


ヒュン


ズバッ
おおっ
おーっ
ばーか




才兵衛(さいべえ)！


ぬうっ
また
おまえか


才兵衛の得意業は
棒手裏剣を投げると
見せかけ
左手で刀を抜くなり
相手の頭上高く跳び
左手の刀で唐竹割りに
斬りおろす
相手がそれをかわせば
間髪をいれず右手の
棒手裏剣を投げおろす
さらに着地すると同時
に二本目の棒手裏剣が
水平に相手を襲うので
ある

次郎右衛門は今まで
才兵衛がこの三段攻撃で
多くの敵を倒すのを見て
きた　この得体の知れぬ
化け者も最期だろうと
哀れをおぼえた

ところが奇蹟が起った

その化け者は
才兵衛よりも高く
跳躍して　最初の
一撃をかるく
かわしてしまった

そして
眉間に
蹴りを
いれた
のである

才兵衛は　右手で
その蹴りをブロック
しようとして
棒手裏剣をとり落して
しまったのだった

ミチ ミチ

トッ

お おのれ!!
武田忍者の
誇りにかけても
許せぬ!

お待ち下され
お待ち下され


ええい 放せ！
このままでは
わしの面子が
立たぬ


若ー
おいたが過ぎ
まするぞ


長沼藩の若君と
いえば 鬼っ子の
……


若……？


なんですと


才兵衛 ひかえろ！
そのお方は御主君
家康公の若君だ
辰千代君に無礼は
ならぬ


そ そんな
馬鹿な……


若様はおいくつに
なられますか？
おん齢七歳に
おなりで……

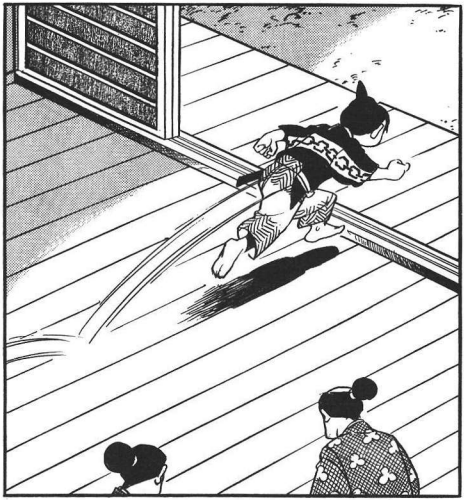



ニンッニンッ


ゴゴ…

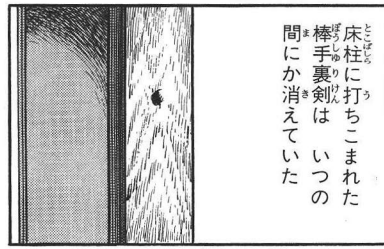

うん
おれのめしより
うまいな


お前の家来は
強いな
剣術指南より
槍の指南より
強い


ああ
うまかった


あれが捨て童子の
鬼っ子か……


うん


床柱に打ちこまれた
棒手裏剣は いつの
間にか消えていた


いつの間に


いやあ
とんだおさわがせ
をいたした
もう一度
飲み直しを
いたしましょう
そうですな

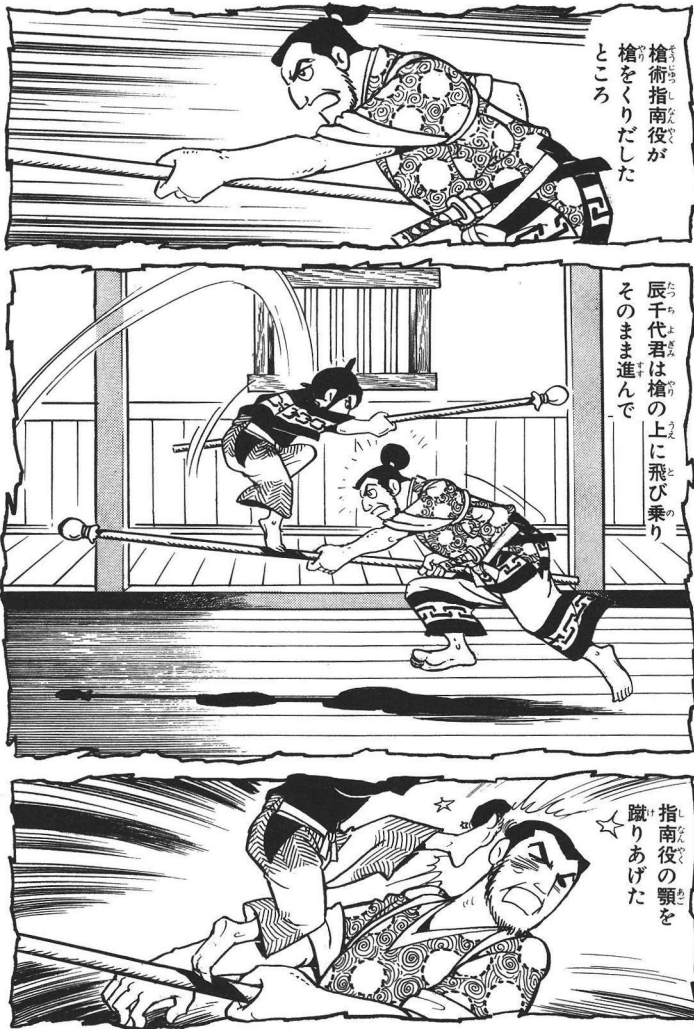

それにしても
あの若君の
いたずらには
手を焼きます
わい
ご活発で
あらせられ
ますな

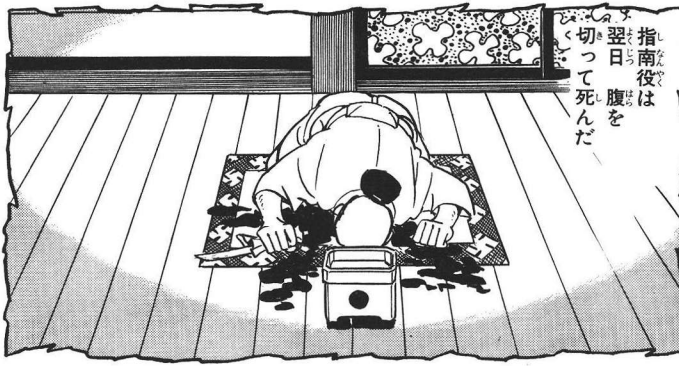

ところで　さきほど
才兵衛のことを
剣術指南より
槍の指南より強いと
いわれたが　どういう
ことでござるか？
それはのう


藩の剣術指南役は
下城の途中……


不意に辰千代君に
襲われ


木刀で肩を砕かれた
その剣術指南役は
それを恥じて
夜逃げいたした
へえ それで
槍術指南役は
……？
槍術指南役は
道場で立合い
ました


槍術指南役が
槍をくりだした
ところ
辰千代君は槍の上に飛び乗り
そのまま進んで
指南役の顎を
蹴りあげた


指南役は
翌日 腹を
切って死んだ

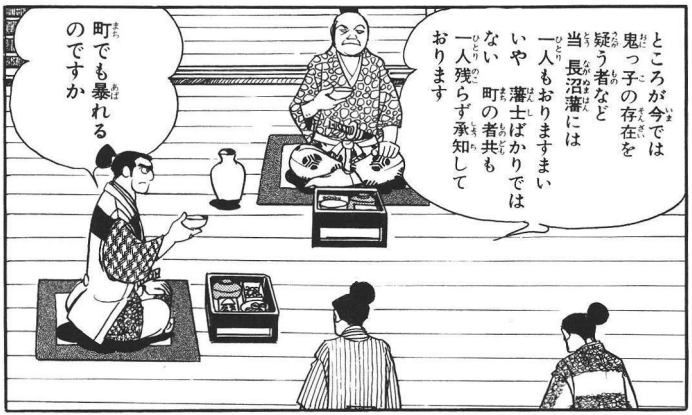

なにも切腹することは
ないと思いますが……
弟子が自分を超えた
ことは 師は誇るべき
ではないでしょうか


それが 若は
槍も剣も
学んだことが
ないんですよ




あのお方は
正真正銘の
鬼っ子でござる
七歳にして体力抜群
習いもせぬ刀槍の術
にすぐれ 荒れ馬に
乗り 水に入っては
魚同然……

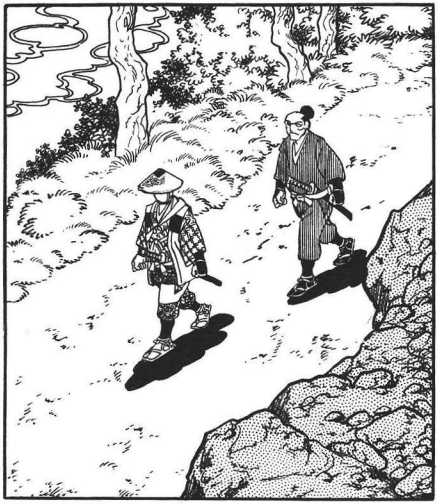

いやあ　実に面白い
鬼っ子というのは
伝説のものかと
思っていましたが
真実いるもの
なんですなァ
わしらも辰千代君が
長沼藩に養子に来ら
れた時　鬼っ子と
聞かされましたが
半信半疑でござった


ところが今では
鬼っ子の存在を
疑う者など
当　長沼藩には
一人もおりますまい
いや　藩士ばかりでは
ない　町の者共も
一人残らず承知して
おります
町でも暴れる
のですか


暴れるというのは
ちょっと違います
まったく邪気のない
おいたなのですが
それが少し　型破り
なだけで……


型破りと
申されますと


馬のかわりに牛に乗って走ってみたり……
牛をさし上げて運んだこともあったな
あれは子牛でしかも病気でした
牛方を殴ったではないか
それは病気の子牛に車をひかせていたからです
牛方は顎の骨を折り一カ月も働けなかったお陰で藩は一カ月分の日当を払ったのだぞ
ふむ
若い者達は鬼っ子に好意を持ち年寄り達は嫌がっている辰千代君のために藩が老若二派に分かれかけている




才兵衛
辰千代君を
どう思う


あれが七歳とは
信じられませぬ
鬼っ子って本当に
いたんですね

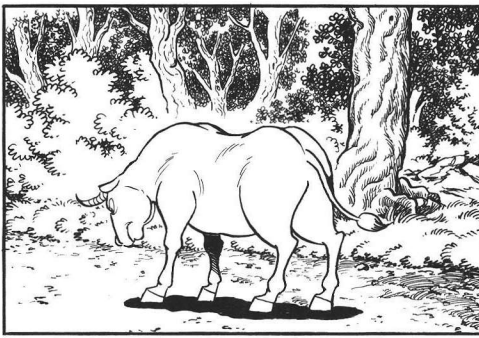
昔から鬼っ子は　家にたたるといわれているだから　直ちに捨てられるのだ　家康公が辰千代君を捨てられたのも　そのためだ

では　あの様子では辰千代君は　また捨てられるやもしれぬのう

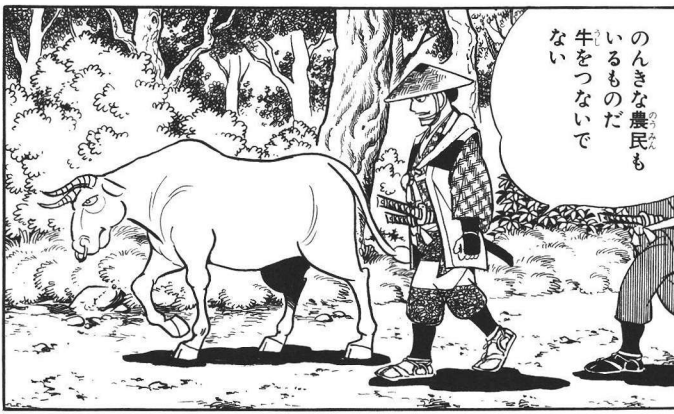
どうしてでございます

辰千代君は早くも長沼藩に　たたりをおよぼしかけている若侍達は辰千代君の型破りに好意を示し老人は苦々しく思っている　藩が老若二派に分かれはじめている

いわれてみればさようでございますな藩が分裂するということは重大事でございますからな




うん

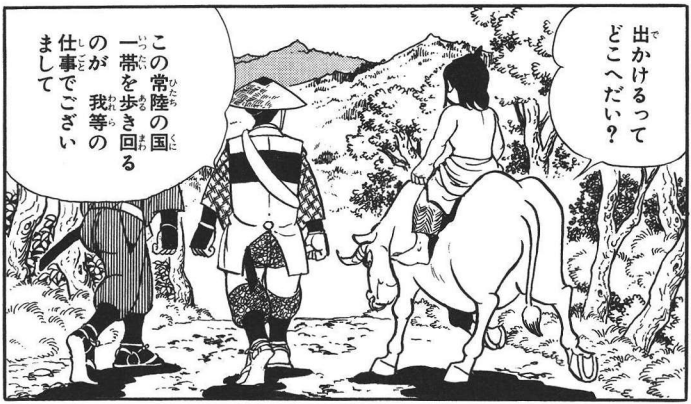

のんきな農民(のうみん)もいるものだ牛(うし)をつないでない


おい


あっ
もう帰るのか
うっ
辰千代君帰るのではなく出かけるのです
そうか






出かけるってどこへだい？
この常陸の国一帯を歩き回るのが我等の仕事でございまして


わしも行って見たいなァいかんか？


面白そうだなァ

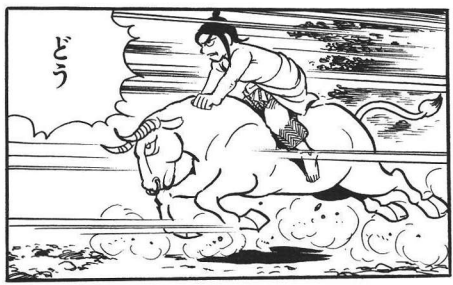

もっと大きく
なられましたら
どこへでも
お出かけに
なられます


遠い国へ
行ってみたいよ


今では
駄目なの
？


ええ
今はまだ
駄目です




どう




ばーか




……


……

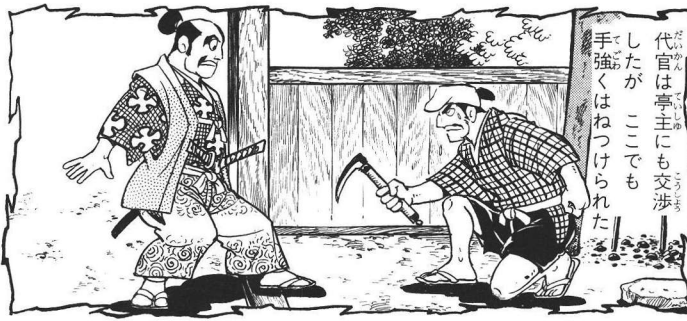

二人はそれが
鬼っ子らしい
悲しみの表現だと
気づくのに少し
時間がかかった。

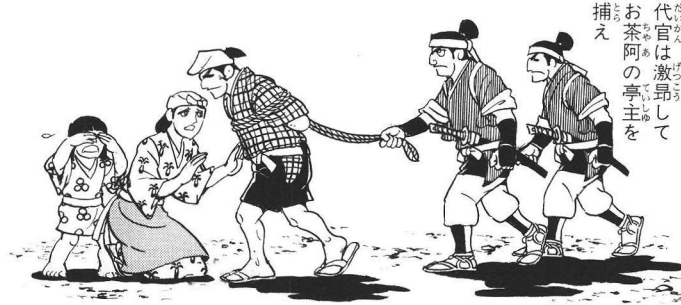
ここで鬼っ子と
呼ばれる辰千代に
ついて　少し
記してみよう

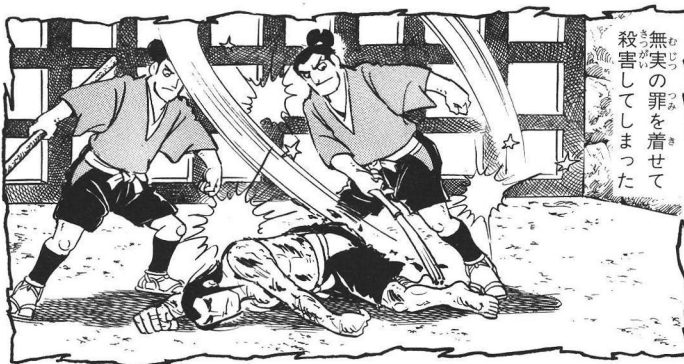


辰千代は徳川家康の
六男として生れた
産んだのは家康の
側室お茶阿の局で
ある


徳川家康が浜松城主の頃
お茶阿の局は鍛冶屋の
女房であり すでに
三歳の娘がいた
ところが
このお茶阿の美貌に ぞっこん
惚れこんでしまった
徳川家の代官が
代官は足繁く通って
お茶阿を口説いたが
お茶阿は はねつけた

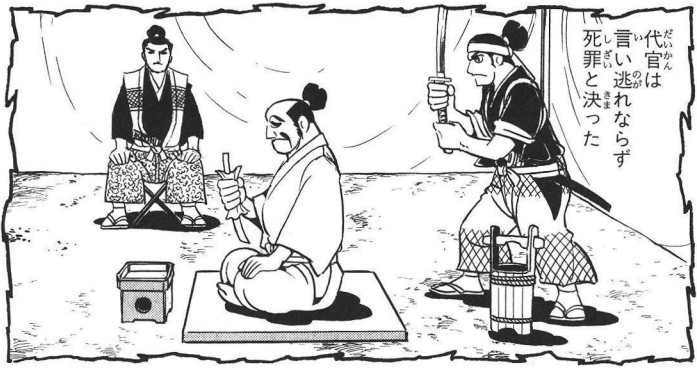

代官は亭主にも交渉したが ここでも手強くはねつけられた


代官は激昂してお茶阿の亭主を捕え

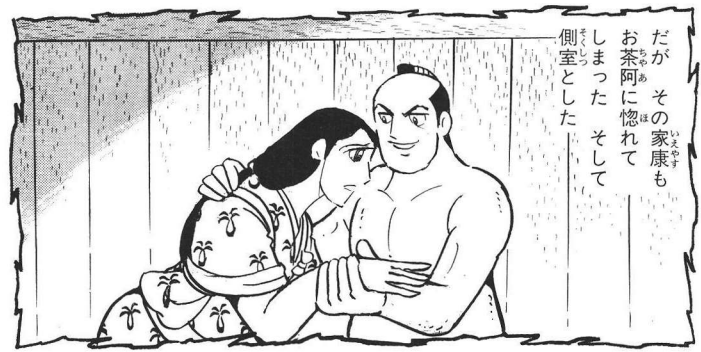

無実の罪を着せて殺害してしまった

お茶阿は家康の
鷹狩り帰途を
待ちうけて
このことを直訴
した

家康はこの母娘を
浜松城へ連れ帰り
くわしく問いただした
すえ　裁判を開いた


代官は
言い逃れならず
死罪と決った


家康は母娘を
あわれに思い
湯番として
城に置いた


だが その家康も
お茶阿に惚れて
しまった そして
側室とした

その後 家康は未開の関東へ国替えとなり 江戸城へ移った
当時の江戸城とは名ばかりの城で雑草が生い繁り建物は雨漏りがするという荒れはてたものであった

ここにきて二年目にお茶阿は子供を産んだこれが家康の六男 辰千代である



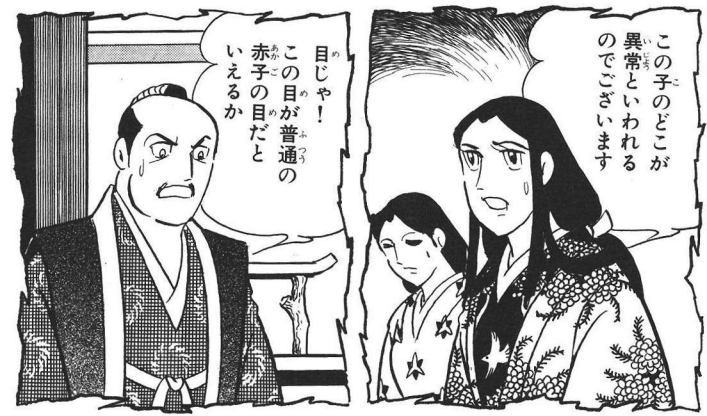

おうおう
これへ


お子にございます


どれどれ


これは鬼っ子じゃ捨てい！
えっ
この子のどこが鬼っ子にございまする
鬼っ子の語り伝えはわたしも知っておりまする
伊吹童子（酒呑童子）は母の胎内に宿ること三十三カ月にして生れたといい　すでに歯が生え揃い生れるとすぐに　人語を話したといいます


武蔵坊弁慶も
三年三カ月 母の胎内に
あり 歯は生え揃い
生れるとすぐ立上がり
「あら あかや(やあ明るい)」
と笑ったとのこと
また 修験道の開祖
役行者は一枚の花片を
握って生れてきたと
いいます そのような
異常な生れ方をした子を
鬼っ子というので
ございます


この子のどこが
異常といわれる
のでございます
目じゃ!
この目が普通の
赤子の目だと
いえるか


捨てるなんて
いやでございます
この子は殿のお子に
ございます
だめじゃ
鬼っ子は家に
禍をなす
その子を二度と
わしの前に
出してはならぬ！
殿！
お考えなおして
くださりませ

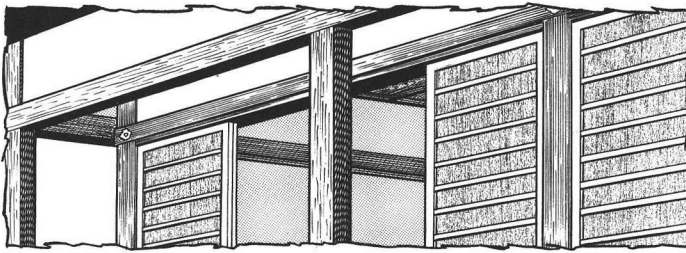








捨てるといっても本当に捨てるわけではなく
拾い手も決って　そこの養子になるということである
我が国には赤子を無事に育てるために
わざと一度路傍に捨て　通りすがった者に
拾わせるといった風習があった
太閤秀吉が最初の子　鶴松を捨てさせ
名も「棄丸」と名づけ　さらに次子の秀頼も
同様にして「お拾い」と呼ばせたことは有名である

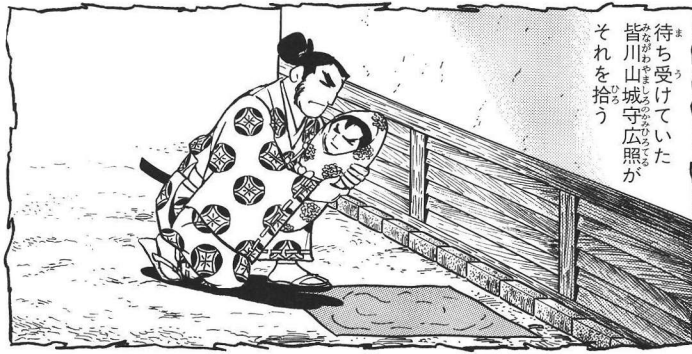



どうじゃ
辰千代の拾い先は
決ったか
それが
殿が
鬼っ子などと
申されましたので
みな
迷信を
恐れましてな


なぜ
鬼っ子などと
申されました
あの顔を見た
とたん
わしは
信康が生れ変って
きたのかと驚いた
あの顔
信康の
赤子の時と
そっくりだった


ご長男の信康さまと……
織田信長公から信康が武田家と内通しているといわれた時わしは無実を承知で切腹させた
あれは信康の母築山御前が起した事件信康は関わりなかった だがそんな言訳は通らなかった
あれ以来信康のことはずっと心の重荷になっていた
わしはあの顔を見ると 信康を思いだしてつらいのじゃ
わかりましたできるだけ早く拾い先を決めましょう


こうして強引に拾い先が
決められた　下野長沼の
三万五千石の領主
皆川山城守広照であった
定められた日時の
定められた場所に
辰千代はそっと
置かれた

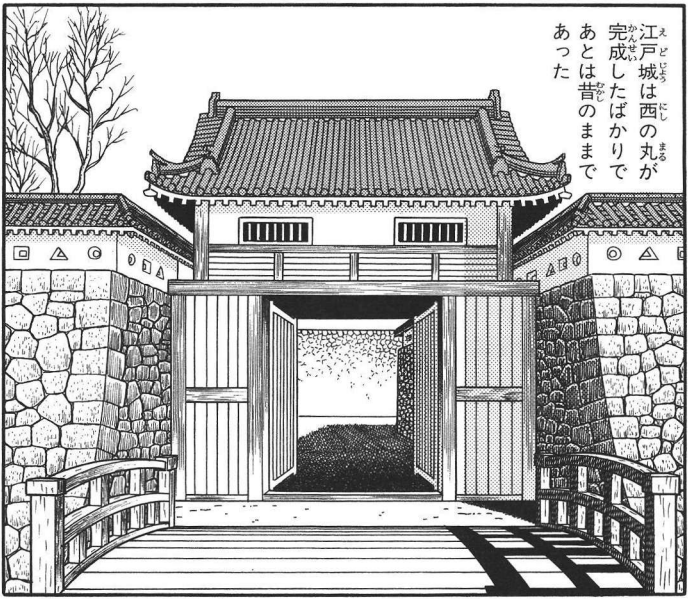

待ち受けていた
皆川山城守広照が
それを拾う


こうして
辰千代は栃木城へ
つれていかれたの
であった

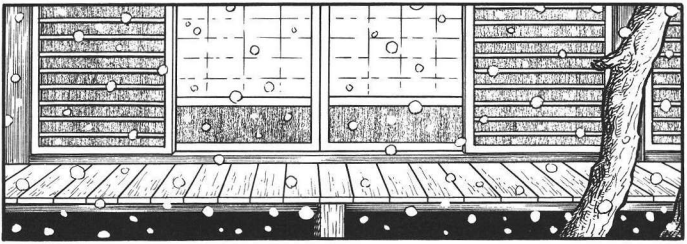
別式女（べっしきめ）




慶長四年一月
（一五九九）
突然
辰千代は
江戸へ呼びもど
された
辰千代
八歳だった


江戸城は西の丸が
完成したばかりで
あとは昔のままで
あった


江戸城をあずかって
ているのは
二十一歳の三男
秀忠であった



おうおう
辰千代
大きうなったのう
八歳とは思えぬぞ

そうかい
何歳にみえる

そうよのう
十三 四に
みえるのう

ふーん


……


お前に知らせがある
一つ目は良い知らせとも
悪い知らせともいえぬが
二つ目は良い知らせじゃ

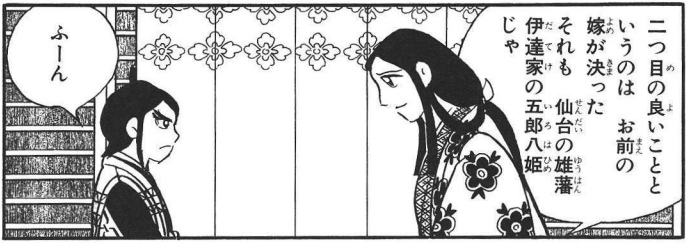

お前の弟の
松千代（七男）が
突然亡くなってのう


おれの弟……


お前が
下野長沼へ
行ったあと
わたしが
産んだ子じゃ


お父上は
その松千代に
武州深谷一万石
長沢松平を与え
られたのじゃが
その後継として
お前を
お認めになった







当時　大名同士の結婚は政略結婚で
年齢は関係なかった


ところで　辰千代は
栃木城ではずいぶん
いたずらをした
そうですね
そうかなァ
でも　これからは
人を困らせるような
いたずらは
してはなりませぬ
学問や礼儀　茶の湯
など　学びなされ
退屈そうだなァ
大名になるため
には　必要な
ことなのです
母上がそうしろ
というなら……


ピィ
ヒョロ


また あの笛の音じゃ
朝から夜まで
耳ざわりでならぬ
止めさせて
おいで
はい


たしかにその笛の音は
ここ十日
時間かまわず聞えた


この女性は秀忠の
妻於江の方である
織田信長の姪にあたる

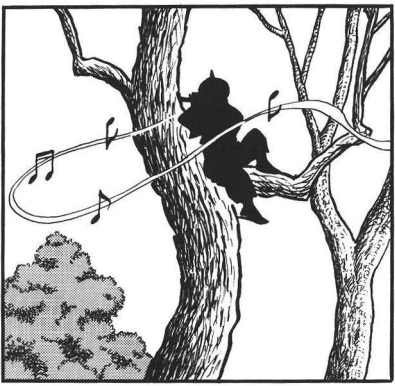

織田信長の妹 お市は
浅井長政に嫁いで
三人の娘を産んだ
茶々 初 於江で
ある


そして 長女の茶々は
秀吉の側室となり
秀頼を産んだ淀君
である


次女の初は
大津六万石
京極高次の
妻となり


於江も二度の結婚をへて
太閤秀吉の命令で
秀忠の妻となった
歳は六つ歳上であった
天下の覇者織田信長の
姪という名門で気位も
高かった

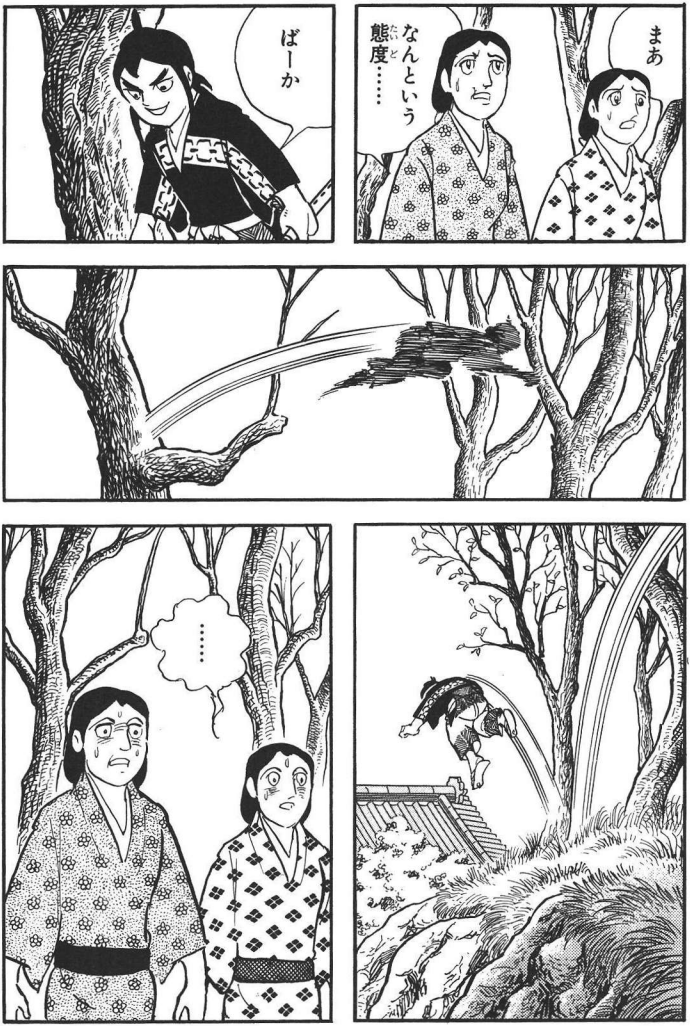

いったい
どこで吹いて
いるのかしら

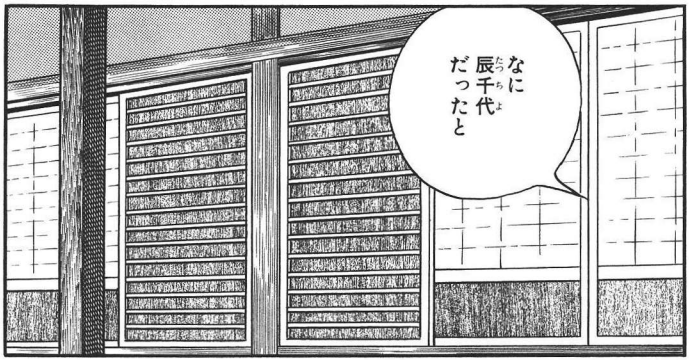


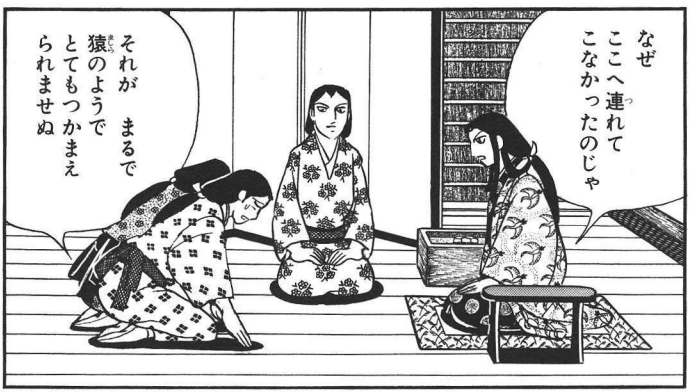

あっ
あんな所よ

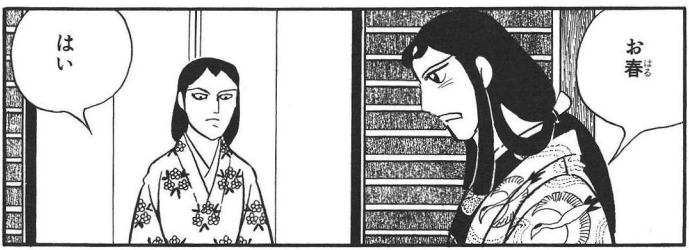

ピィィ
ヒョロロ


鬼っ子
辰千代さま
笛を止めて
くださりませ
於江の方さまの
ご命令です
止めて下さい！
ピッピッ
ピィヒャラ
ピィヒャラ


まあ
なんという態度……
ばーか
……

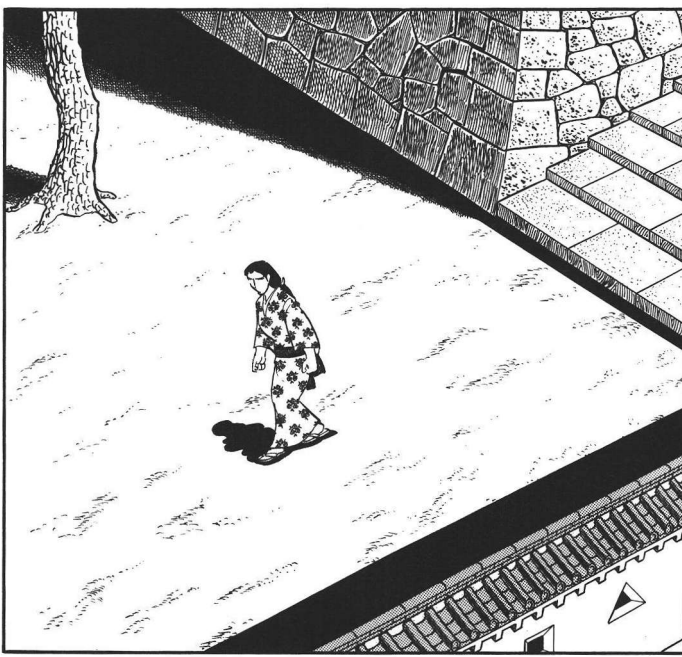

なに
辰千代
だったと

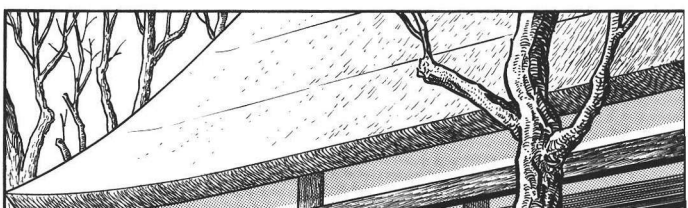

なぜ
ここへ連れて
こなかったのじゃ
それが　まるで
猿のようで
とてもつかまえ
られませぬ


お春
はい


はい


そなた
お茶阿の局に会って
辰千代君に笛を吹か
せるなと　きびしく
申し入れておくれ

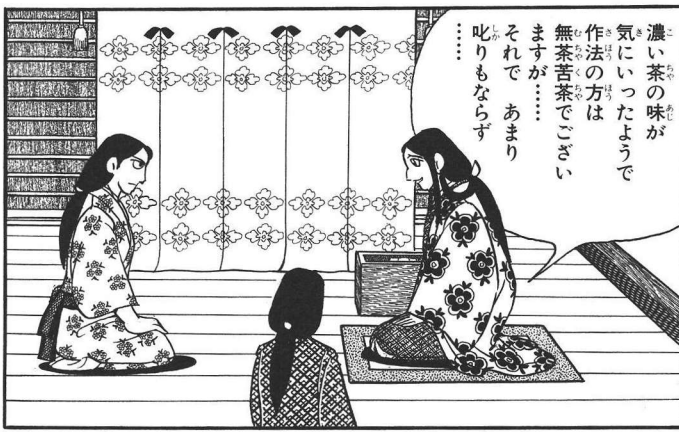


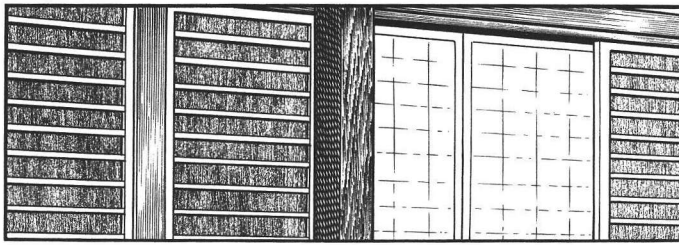



さようで
ございますか
辰千代の笛が
耳ざわりだと
はい
於江の方さまは
あの音を聞くと
イライラ
なされるのです


それは申しわけございません
じつは
わたしどもも
ほとほと
手を焼いているのですが
どうにも止めることが
できないのです
叱ってもどこ吹く風
笛をとり上げても
すぐ又
どこからか
手に入れてくる始末
その上どこで笛を吹いて
いるのか
場所さえ
つきとめられませぬ


もともと　この笛を
教えたのは栃木城に
いた時　あまり粗暴な
振舞いが多かったと
聞きましたので　何か
心落着くものをと思い
習わせたのでございます
もちろん笛だけでなく
学問　礼儀作法　茶の湯
なども教えました
でも　辰千代が気に
入ったのは笛と茶の湯
だけでございました
茶の湯？


濃い茶の味が
気にいったようで
作法の方は
無茶苦茶でございます
ますが……
それで　あまり
叱りもならず
……

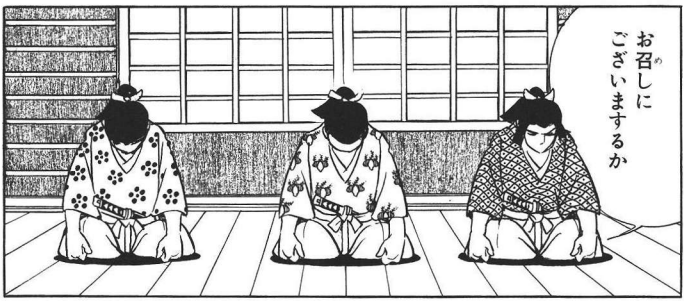



なんですと
わらわがじきじきに
あの子を捕え
お仕置してくれと
申したのか
はい
いかようなご折檻を
受けても 決して
不服を申しませぬと


これは お茶阿の
わらわに対する
挑戦じゃ
やれるものなら
やってみよと
いってるのじゃ


辰千代は家康公の子であり 秀忠どのの弟……わらわが折檻などできるわけがないとたかをくくっているのじゃ！
いかような折檻も決して不服は申さぬといったのじゃな!!
はい
それならば思いきって折檻を加えて お茶阿の方を後悔させてやりましょう
腕のたつ別式女を三人お呼び
はい

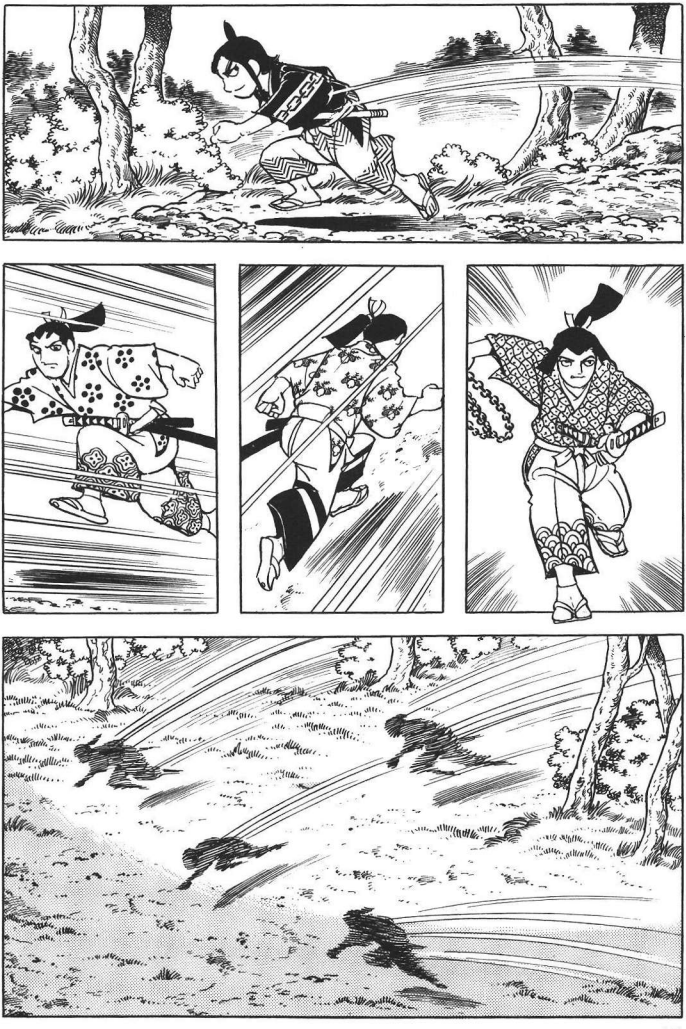

別式女とは
女ながら男装し
御台所の護衛役である
と同時に腰元たちの
武芸指南役でもあり
武芸の達人であった

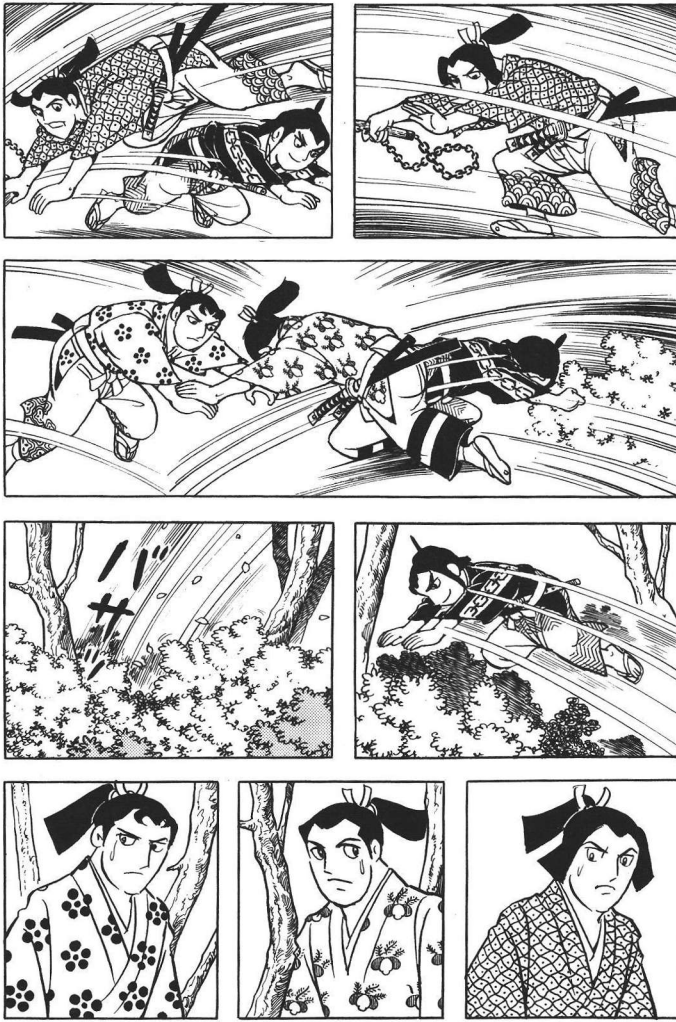

お召しに
ございまするか

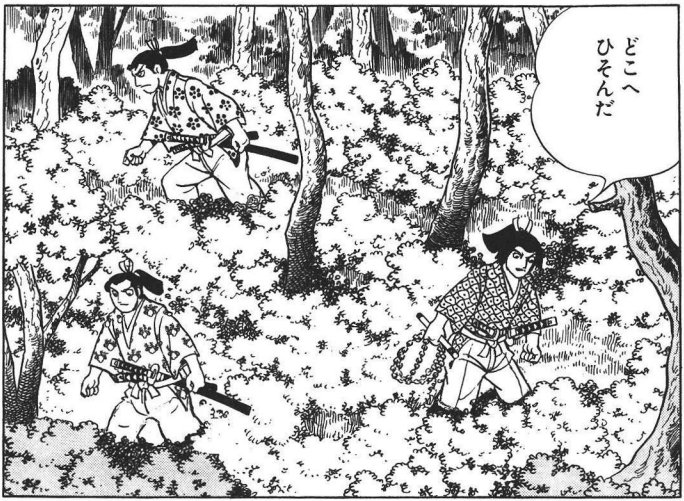

おう
そなた達で
辰千代君を捕え
ここに連れて
おいで


少々 手荒なことをしてもよいお茶阿どのが手を焼いてわらわに頼んだのじゃ
ははっ
三人の別式女は辰千代の姿を求めて城中を探した


ピョロロ‥
いた




ハッ!


どこへ
ひそんだ

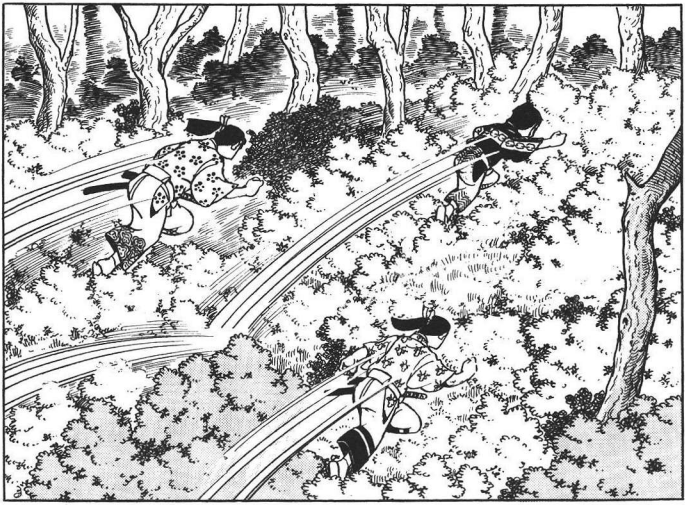



いない

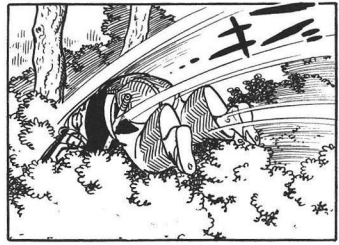

まるで獣(けもの)のようだわ




あそこよ




ニーン


キン


また
消えたわ
まったく
手を焼かせる
お子よねえ
シャシャシャ
シャシャシャ
いつのまに
あんな所に
……


辰千代は　その
追いかけっこを
楽しんでいる
ようであった
へへへ
こんなことが
一日中くり返され
別式女はへとへとに
なってしまった


♫ ピィーヒョロ





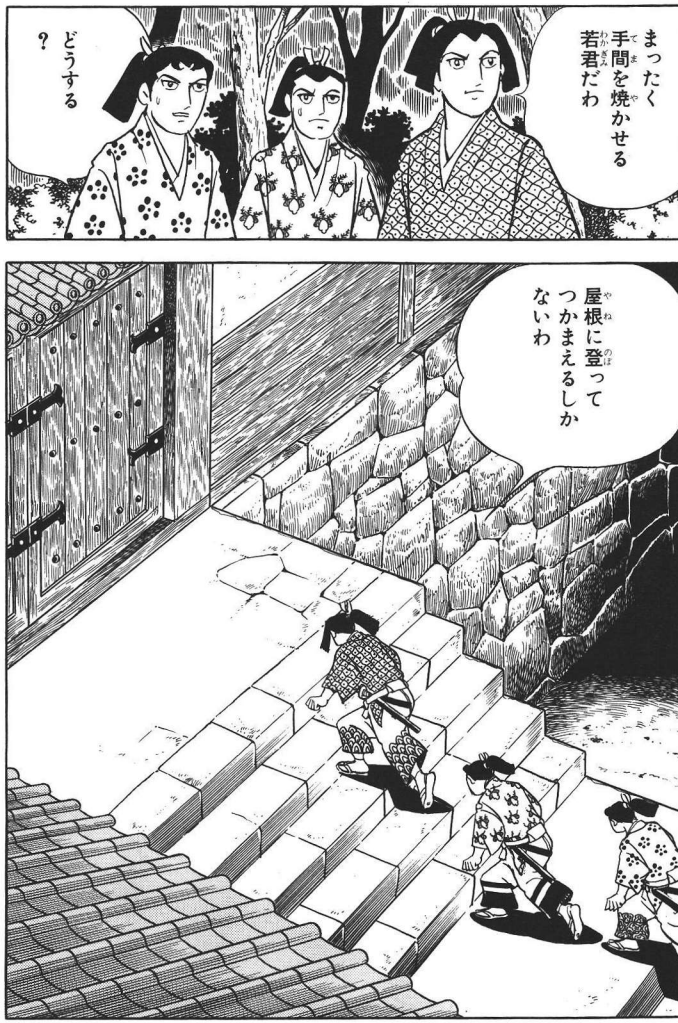

また 吹き はじめたわ
こんどは どこ？




あんな
ところで


あっ


それは 完成(かんせい)した
ばかりの西(にし)の丸(まる)
であった


まったく
手間を焼かせる
若君だわ
どうする
？
屋根に登って
つかまえるしか
ないわ



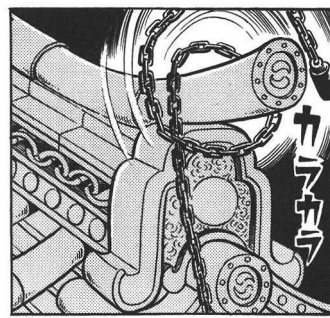


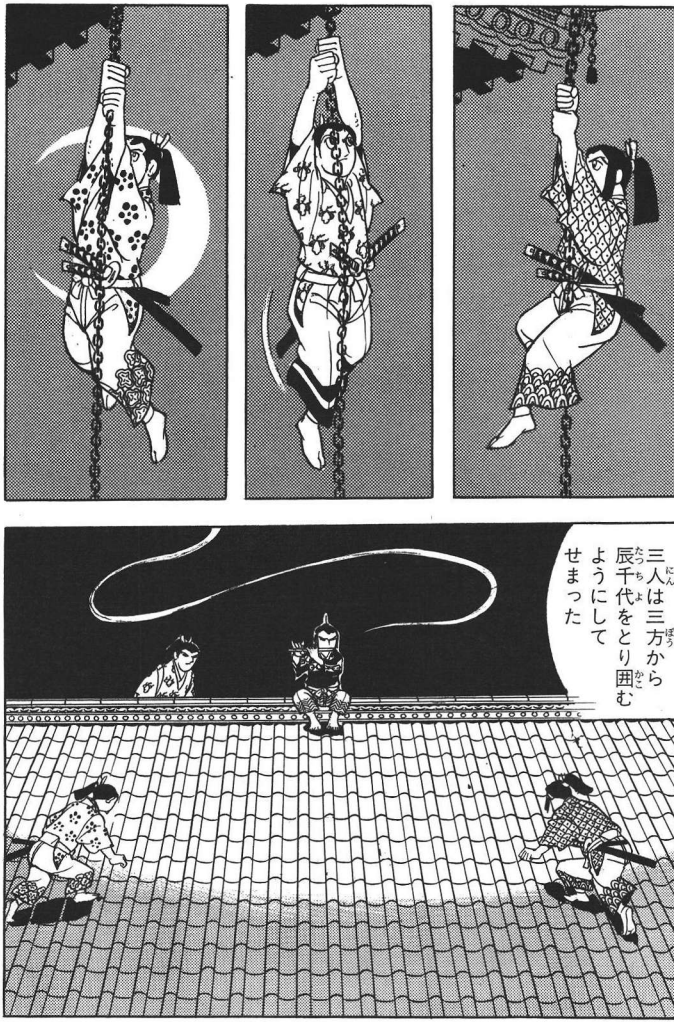



さて
あとは
どうするの


これを伝って
上にあがるのよ

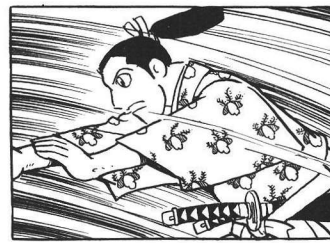

ヒュ


カラカラ


三人は三方から
辰千代をとり囲む
ようにして
せまった

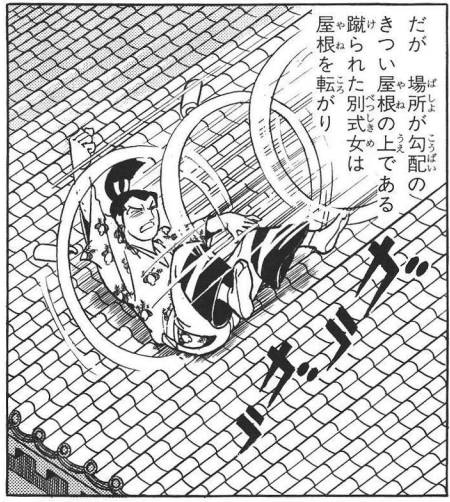

辰千代君
一緒に来て
いただきます！





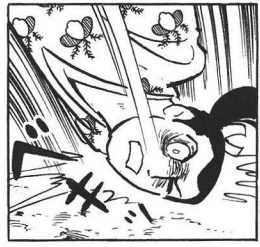

包囲の外に
立った


その瞬間　辰千代は
跳びあがり　一人の
別式女を蹴り……


だが 場所が勾配の
きつい屋根の上である
蹴られた別式女は
屋根を転がり
ゴロゴロ


キャッ




ゴロゴロ
キャッ


ああっ


なんという
ことを……


チャン

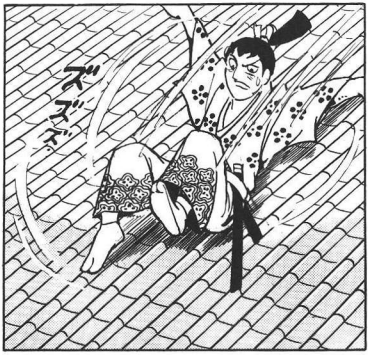




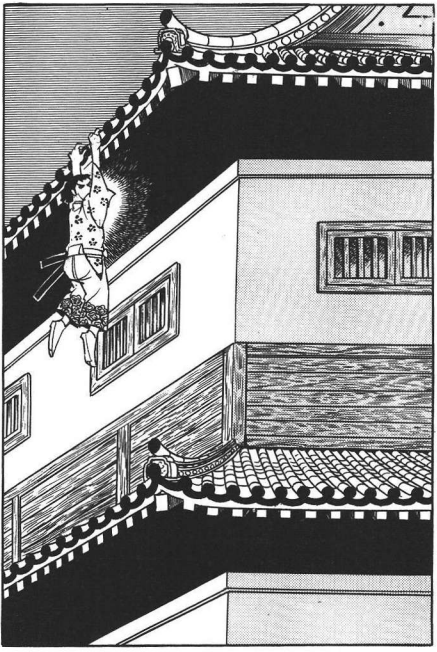

もちろん
殺す気はなく
峰打にする気
である


笛の音はさきほどの
静かな調子から 激しい
怒りの音色に変っていた
口のかわりに笛で文句を
いっているようだった

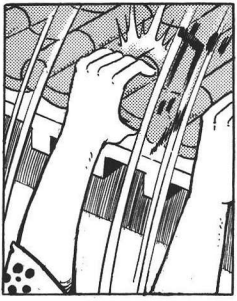

二人は同時に攻撃をした
だが辰千代は今度は跳ばなかった

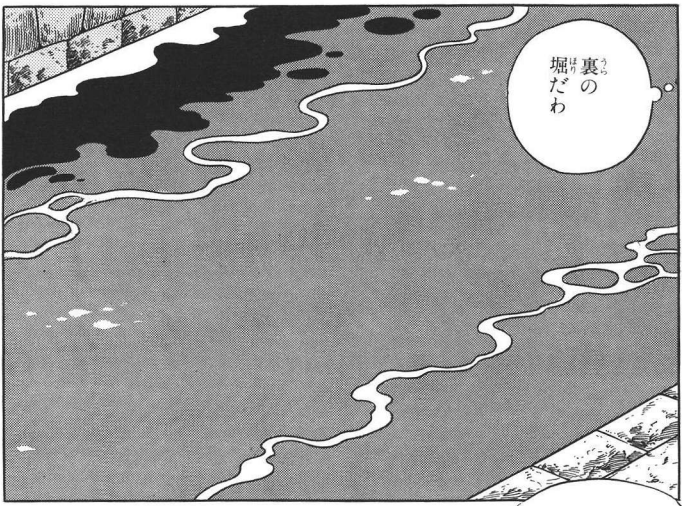

ズズズ…


ああっ








裏の堀だわ

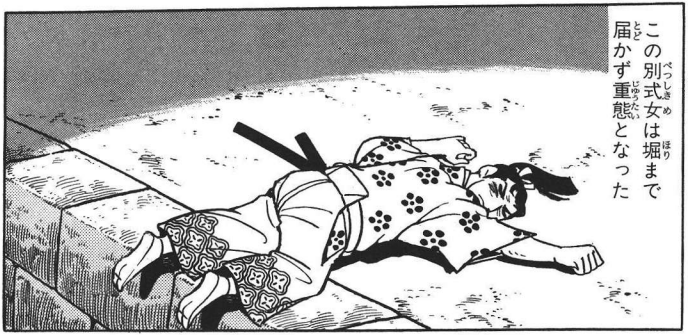

下の屋根に飛び下りても幅はぎりぎり……体勢をくずせば下に落ちる……

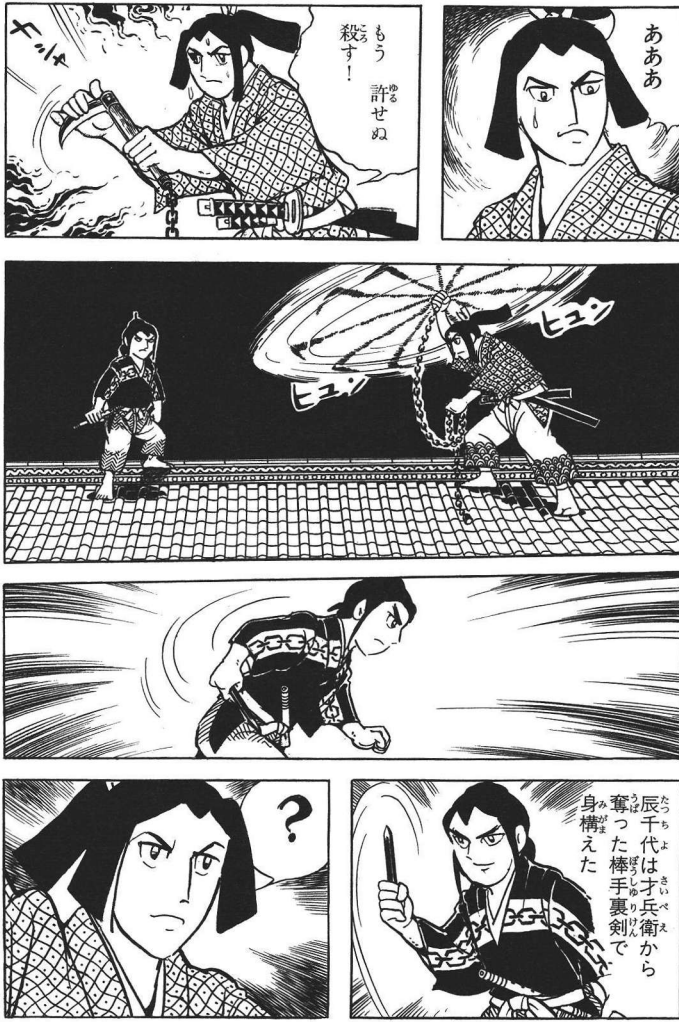

堀まで飛べば助かる……一か八か……

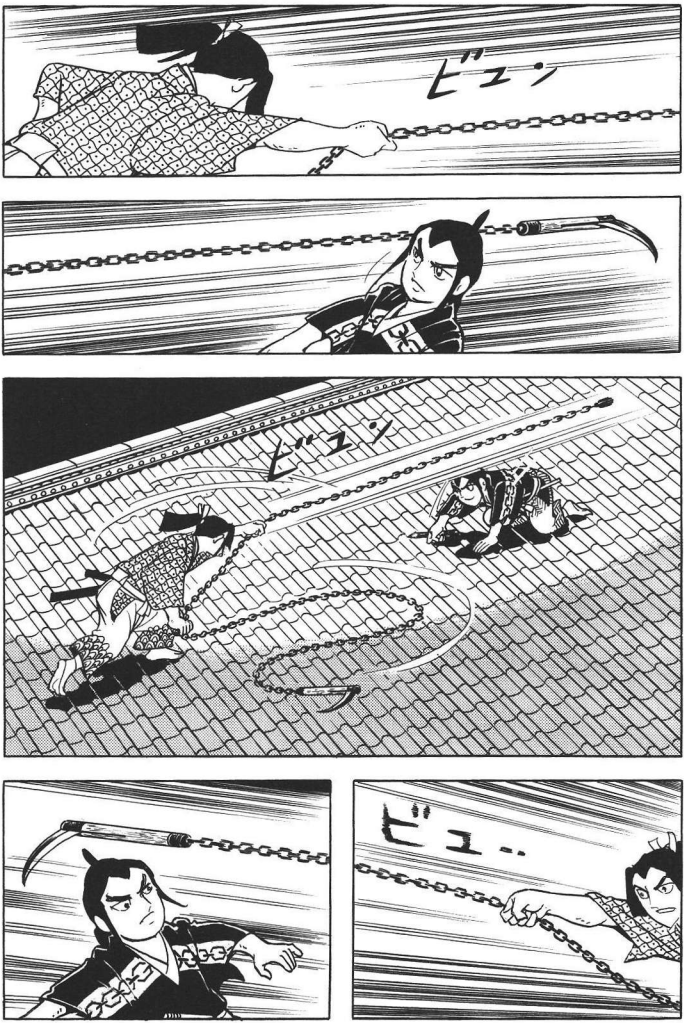

はあっ

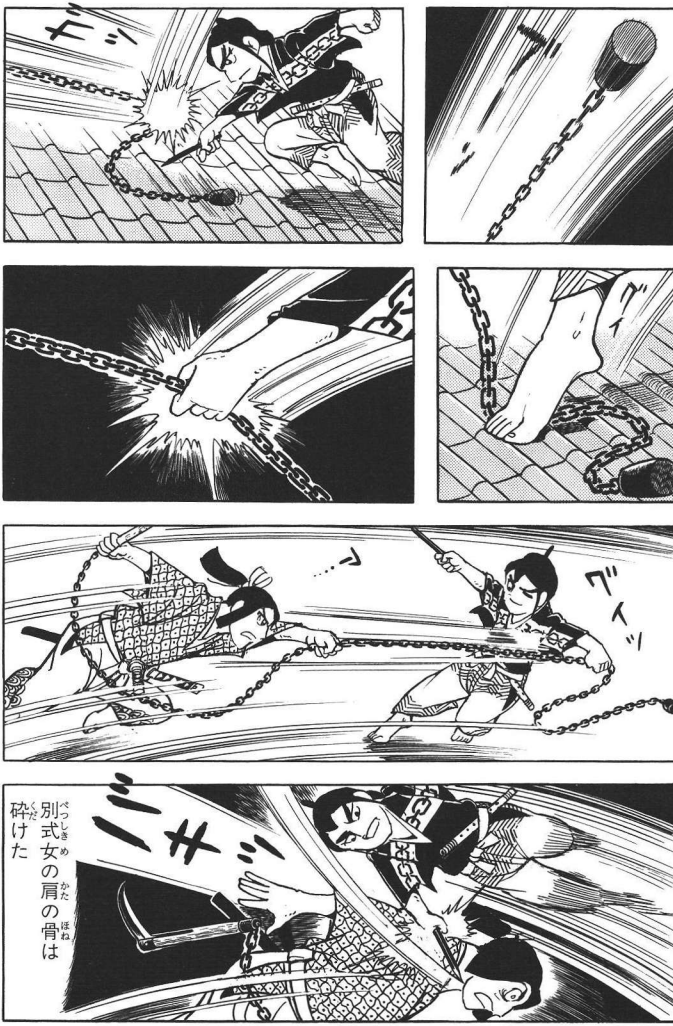


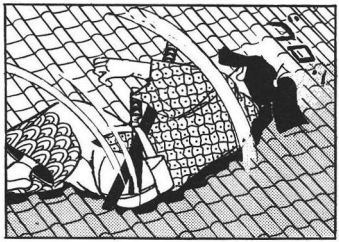



この別式女は堀まで
とど
届かず重態となった

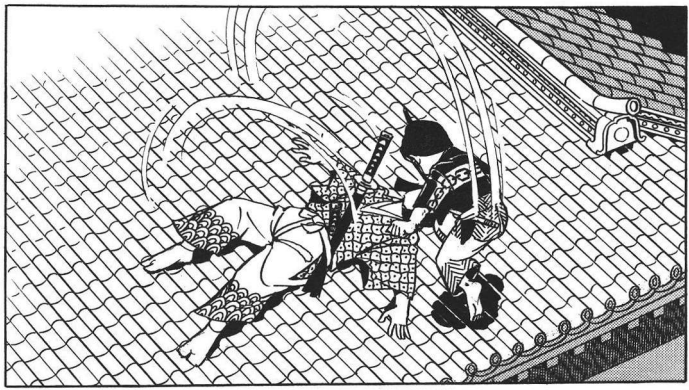

ああ
もう 許せぬ 殺す！
チャキ
ヒュン
ヒュン
辰千代は才兵衛から奪った棒手裏剣で身構えた
？


ビュン
ビュン
ビュ..

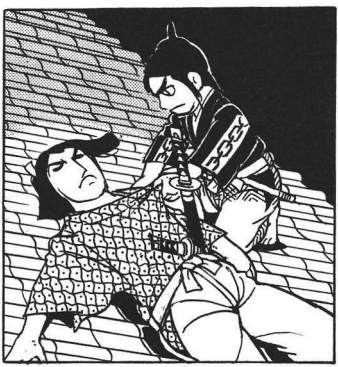

ブン
ブイ
ブイ
ブイッ
ブン
別式女の肩の骨は砕けた

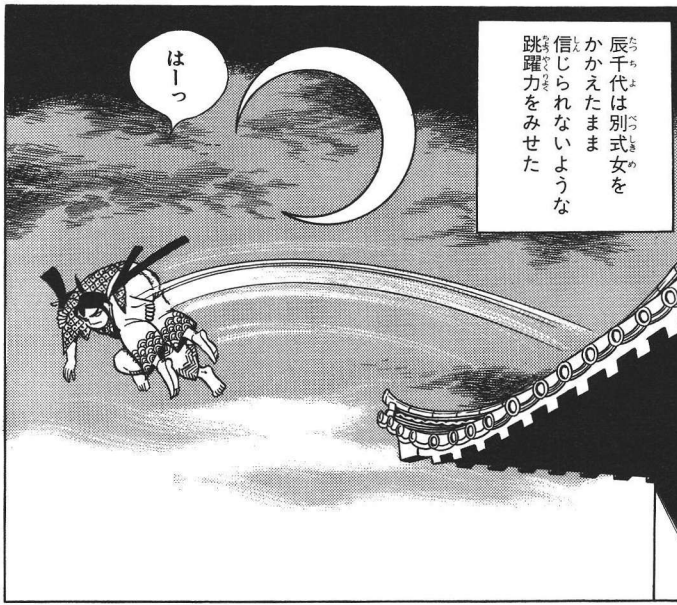



別式女はあまりの
激痛で失心した

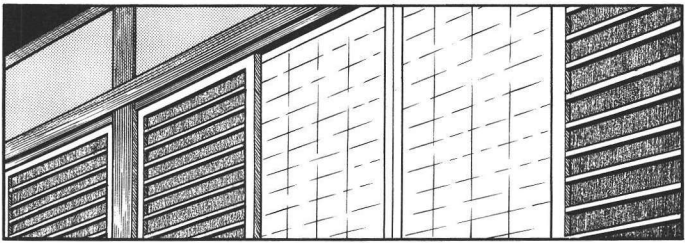




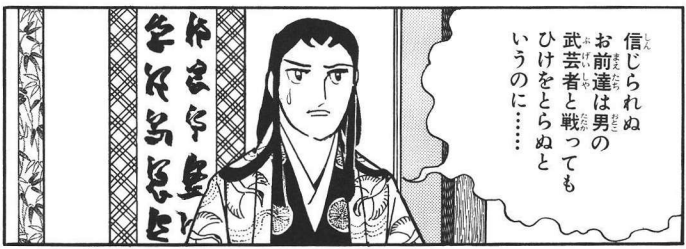



辰千代は別式女を
かかえたまま
信じられないような
跳躍力をみせた
はーっ






なんですと！
一人は死に
一人は重態
そしてお前は
肩の骨を砕かれたと！
はい


信じられぬ
お前達は男の
武芸者と戦っても
ひけをとらぬと
いうのに……

だが　このままではすまされぬ
お茶阿が「だから叱りもならず……」と申したでしょうと笑っているようじゃ　たかが八歳の子に我等が適当にあしらわれるとなれば　面子にもかかわる

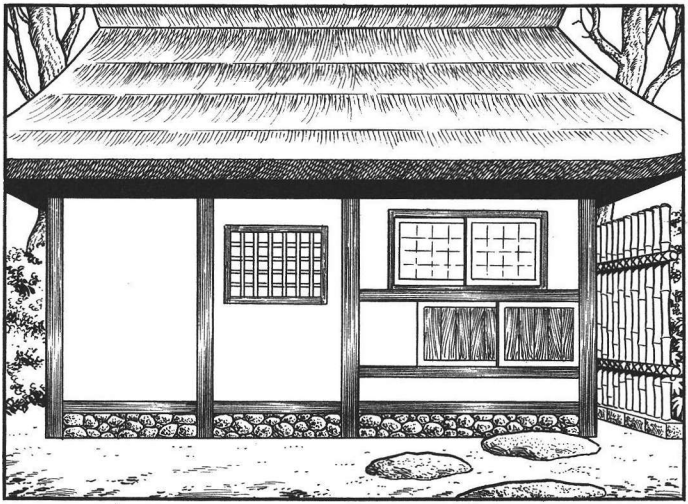
といって　そのような鬼っ子なれば　尋常の手段ではかなわぬし……

辰千代君は　お茶が好きだと聞きました茶に痺れ薬を入れて捕えましては……

おう　それは良い案じゃお方さまが正式に茶会に招いたとあらばお茶阿の方も辰千代君も断れませぬ


こちらに捕えてしまえば
どのように折檻をされよ
うとも　苦情は申さぬと
申しましたゆえ
命さえ奪わなければ
廃人にされようとも
苦情は申しますまい
それは面白い


よろしい
茶会を開くゆえ
辰千代に参るよう
伝えなさい
はい




辰千代君
よう参られた
そなたは茶が
好きなそうじゃな
うん




では わらわが
茶を点てましょう


最初の茶には
毒は盛られて
いなかった


どうぞ


うん


けっこうな
お点前に
ございます

於江の方は
茶碗を変えた



その茶碗には
最初から痺れ薬
が底に厚く塗っ
てあり湯を
さして茶筅で
かきまわせば
薬が溶けて茶に
まじる仕掛けだった







だが 鬼っ子の鋭い嗅覚が
何かをかぎわけた







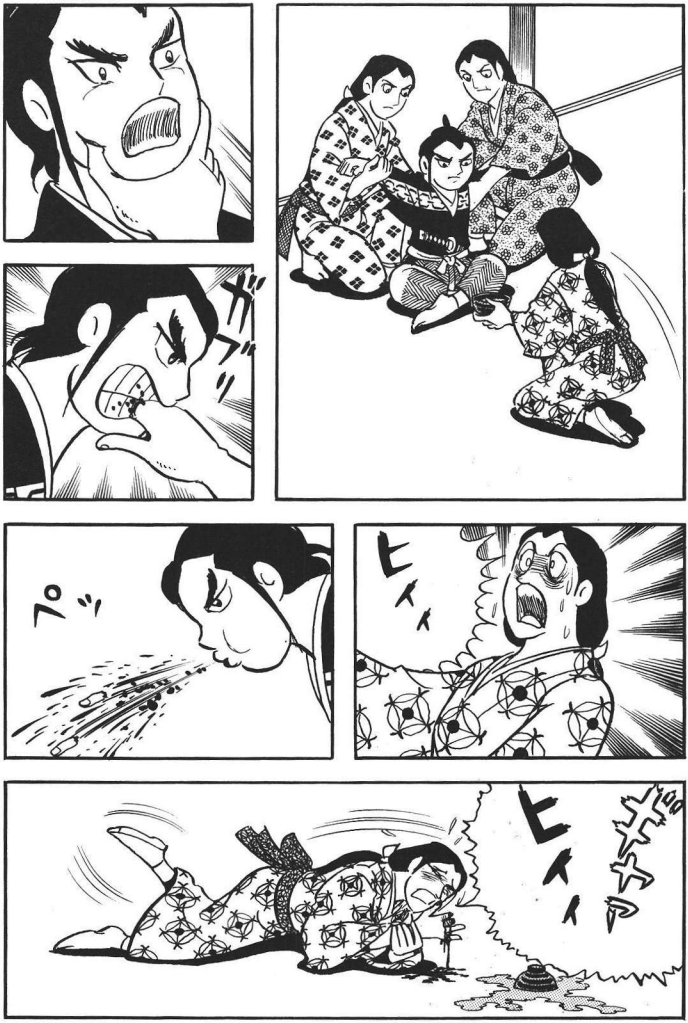

くさい

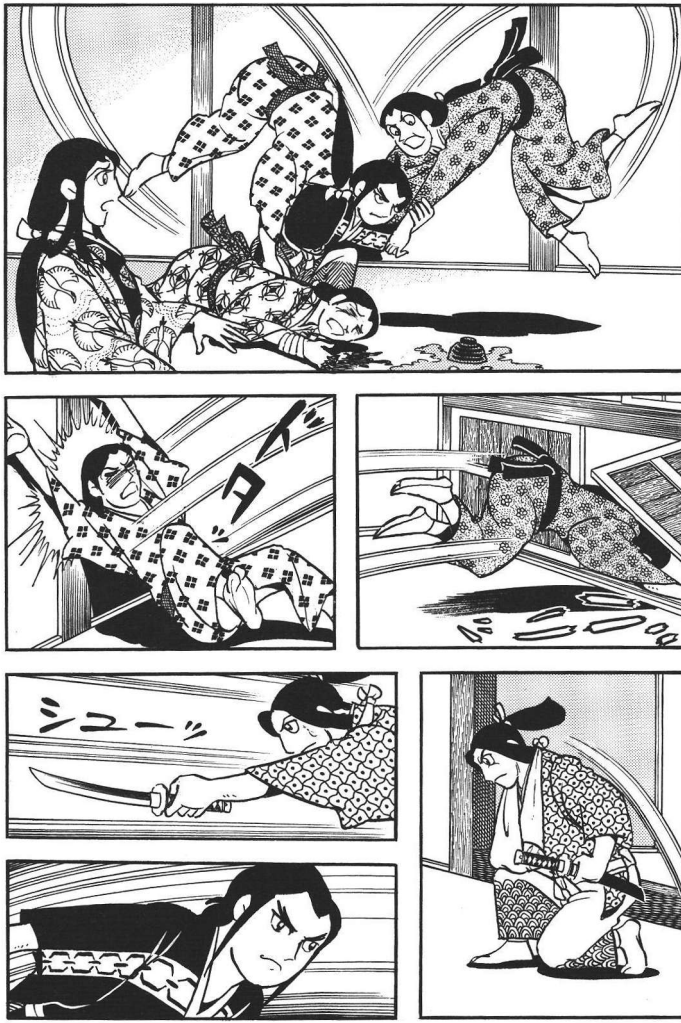

なぜ
のみませぬ
？


のみなさい
茶の香りです



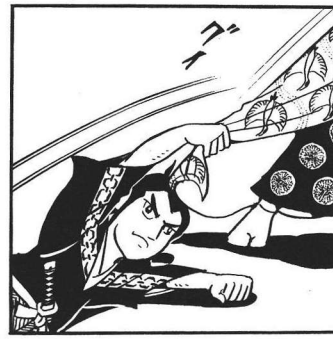



ヒィィ
ヒィィ
ズサッ


ズッ
シュー


無礼者(ぶれいもの)！

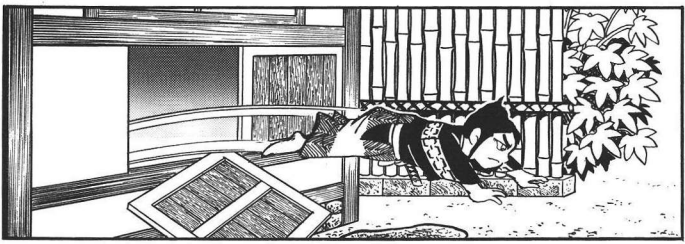


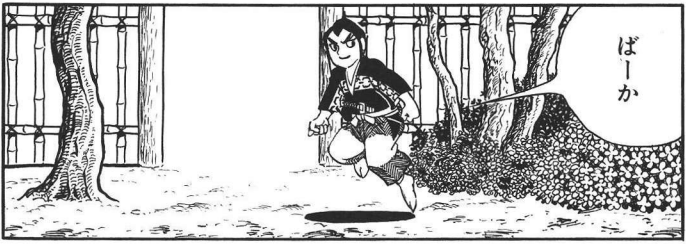

ゴ


ズ
ウ




わあ
母上のより
真っ黒けだァ




ばーか


ぬうう
許せぬ
殺してやる！




なにっ
母上より黒いと
申したのか
あんな鍛冶屋の
女と わらわを
くらべるとは……


殿 何が
おかしいのです


プーッ


いや……
べつに


大奥でこわいものなし
の於江が　八歳の子に
手を焼くとはのう


ともかく　あの笛は
やめさせてくださりませ
あの音を聞くと
イライラして気がふれ
そうです
わかった
辰千代に
会ってみよう


クックッ




事のなりゆきの
一部始終を聞いて
秀忠は辰千代に
興味をもった

武芸指南役（ぶげいしなんやく）

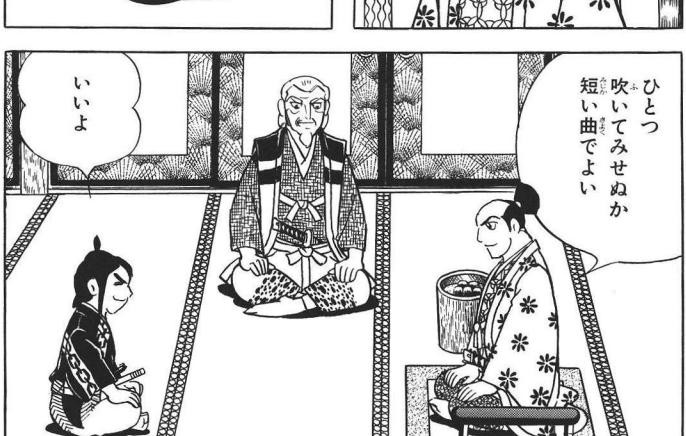



秀忠は三人の別式女を
倒したやり方を聞くと
よほどの兵法者が師と
なっているのではと考え
奥山休賀斎を同席させて
辰千代と会った


奥山休賀斎は上泉秀綱に
新陰流を学び 後に自ら
奥山流を開き 家康に仕え
たが今は隠居の身であった



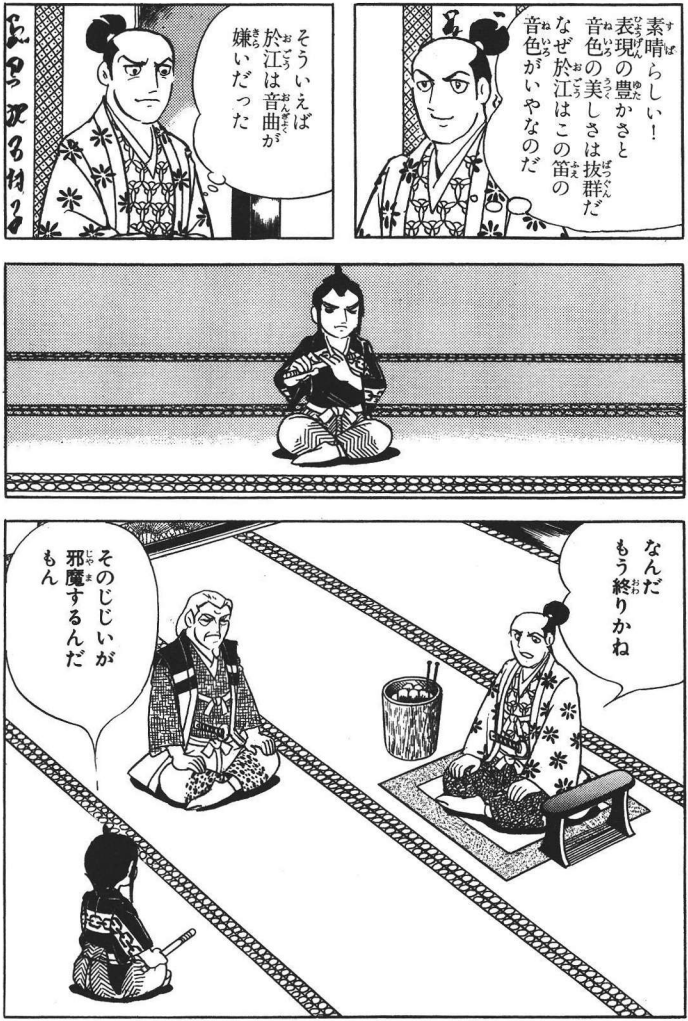






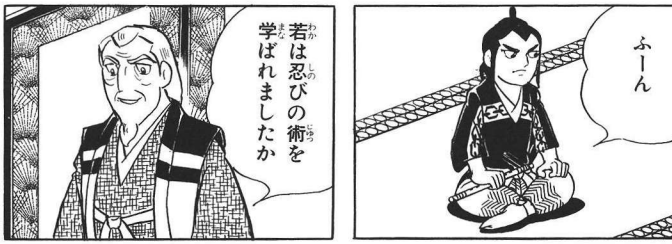
辰千代はすぐに吹き始めた それは爆発するような歓喜の曲だった

初めて兄に当る人物に会い 思いもかけぬ優しい言葉をかけられたその喜びを 即興曲にしたのである

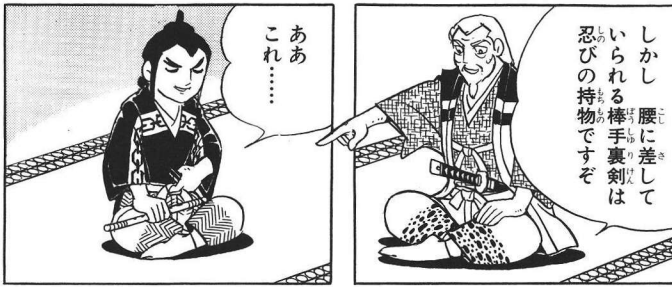

素晴らしい！
表現の豊かさと
音色の美しさは抜群だ
なぜ於江はこの笛の
音色がいやなのだ
そういえば
於江は音曲が
嫌いだった
なんだ
もう終りかね
そのじじいが
邪魔するんだ
もん


邪魔……？
申しわけないことを……
確かに手前が邪魔を
いたしました
どんな邪魔を
した？
実は無言の気合を
かけ申した　いや
お子と思えぬほどの
あまりに見事な隙の
ないお姿に……
つい　ためしたく
なりまして
無言の気合
？
三度もだよ
確かに三度です
秀忠はなんとなく不愉快
になった　休賀斎と
辰千代は　秀忠の全く
気づかぬうちに三度も
闘っていたことになる
それを気づかなかった
ということは　それだけ
兵法は未熟だと
いうことになる


辰千代　じじいなどといってはならん　この仁は　奥山休賀斎殿だ父上の兵法指南役だったお方だ
奥山流という一流を創始された剣の達人でいらせられる


ふーん
若は忍びの術を学ばれましたか


忍びってなに？
？
忍びをご存知ない？


しかし　腰に差していられる棒手裏剣は忍びの持物ですぞ
ああこれ……


これ 猿から 取り上げたの
猿？
才兵衛っていうの 次郎右衛門の供だって
才兵衛？ 次郎右衛門？
おお 武田の忍びに 猿の才兵衛と申す 達者がおりましたな 確か雨宮次郎右衛門どのの手の者になっているとか聞きました
ああ それ

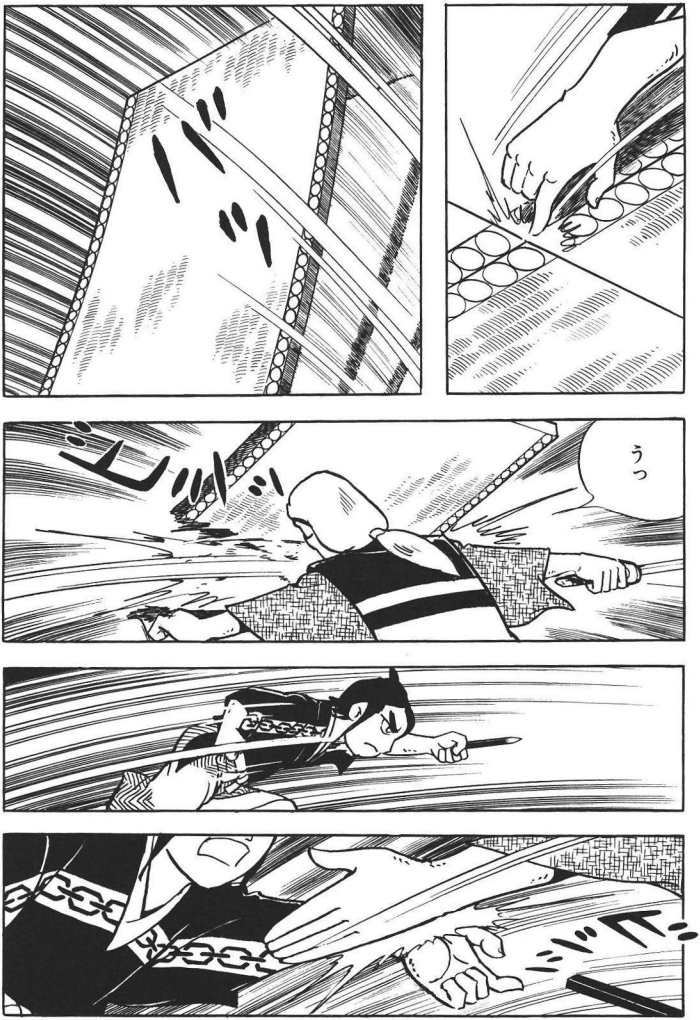

才兵衛は
面白かった
強いから
それは
そうでしょう
ごめん
こうむります
これは行動に移る
という挨拶であった
ビュッ

第二撃も　目にも
とまらぬ早さだった

第三撃も

第四撃も頭上すれすれに閃光が走った　この剣は上に跳ぶことを禁じている　跳べば胴か脚を切られる　だから辰千代は転ってさけるしかなかった

休賀斎は第五撃を振った　もちろん休賀斎は辰千代を斬る気はない


うっ


ヴィー

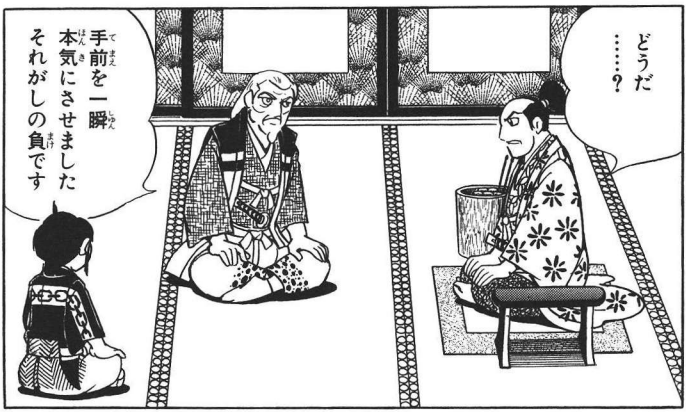



とたんに
奇妙なことに
辰千代は全く
動けなくなった

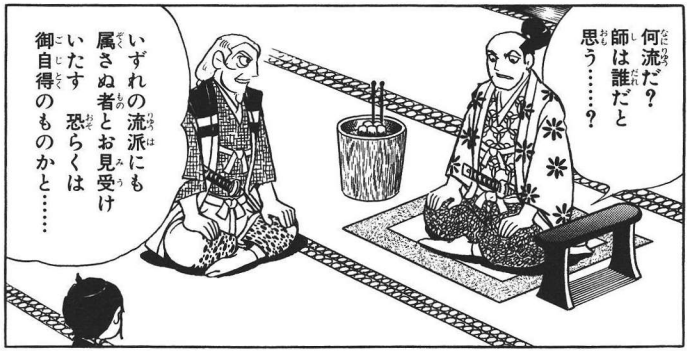

ふーん
そこが急所
なの？


一瞬　本気になった
休賀斎も　その
言葉に恥じた


御無礼を働きました お許しのほどを
今の術を教えてよ


どうだ……？
手前を一瞬本気にさせました それがしの負です


ま まさか……
真実でござるまことに恐るべきお腕前……


何流だ？
師は誰だと
思う……？
いずれの流派にも
属さぬ者とお見受け
いたす　恐らくは
御自得のものかと……


そ　そんな
馬鹿な！


人が苦労に苦労を重ねても　なお生涯到達することのできぬ高みに生れつき何の苦労もなくいける男がいるなんて不公平だ


凡才の典型のような秀忠にとって天才ほど憎いものはない


兵法にあってはよくあることでござるさきほどの笛も恐らくご自得のものかと拝されます
それは違う
笛はここにきてから乱暴をなおすために習わせたと母に当る者が申しておる
若は笛をどれほどの期間習われました?
三日
三日!? たった三日であれほどの思いをこめた曲を即席に作ることができるというのか


おまえは将来
何になりたい
大人
だから
大人になったら
何になりたい
なにも
今のところ　何の
野心もないようだ
だがあと五年たったら
この子なりの野心を
持とう　その気はなく
とも　この能力をみれば
側近がほうって
おかぬ


父上は老齢で
ありながら まだ
世継を決めておられぬ
兄の秀康は
太閤秀吉の養子となり
今は名門 結城家の
養子となっているから
問題はない
だが一つ歳下の弟
忠吉がいるし
今 こんな天才児が
現れたら 父上の
判断次第で誰が
世継になるか
わからぬ……

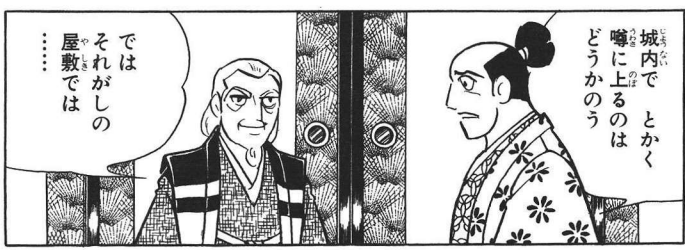

この子は
五年の間に
殺さねばならぬ


秀忠さま
うーん？


それがし
しばらく御城内に
とどまりましても
差しつかえござり
ませぬか

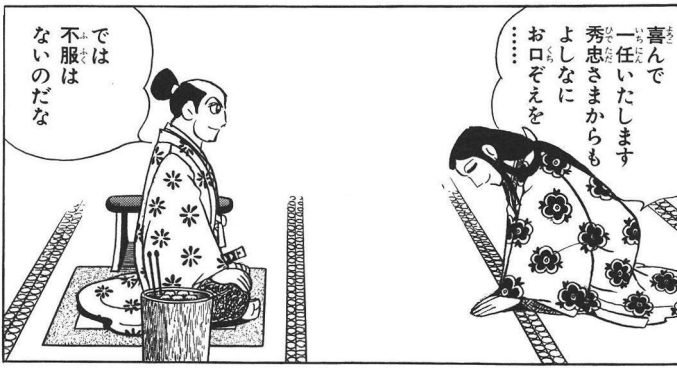

辰千代に
剣を教える
つもりか

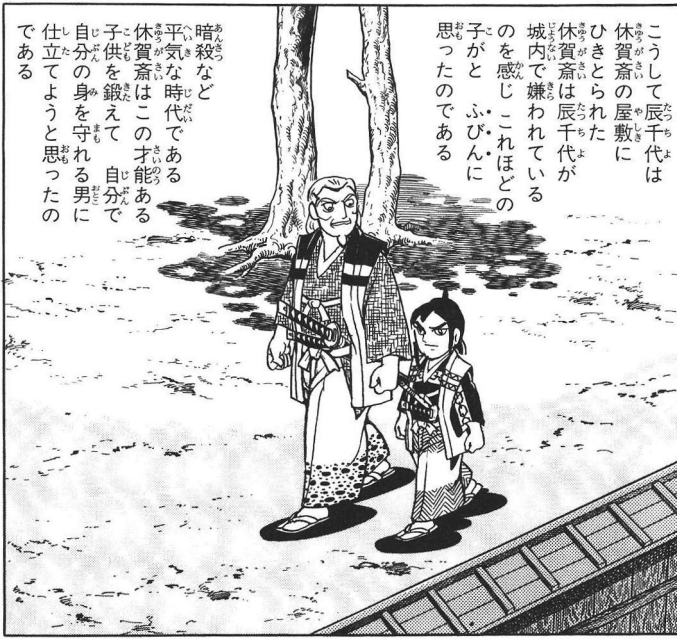

いやいや それがし
この若にお伝えする
ような技は持って
おりませぬ
お遊びの相手を
してみたくて……

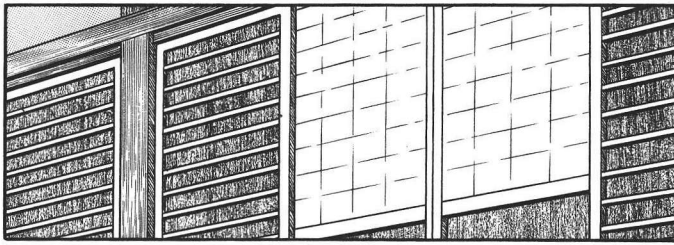

城内で とかく
噂に上るのは
どうかのう
ではそれがしの屋敷では……


そうじゃのう……
辰千代がいなくなれば
於江に対しても
わしの顔も立つ……
だが お茶阿の方が
許すかのう……
では
秀忠さまより
お口ぞえを……
よし では
わしがお茶阿の方に
話してみよう
よろしく
お願い
いたします


のう お茶阿どの
奥山休賀斎が
辰千代をしばらく
あずかりたいと
申すのじゃが……
えっ
休賀斎どのが
辰千代を……


喜んで
一任いたします
秀忠さまからも
よしなに
お口ぞえを
……
では
不服は
ないのだな

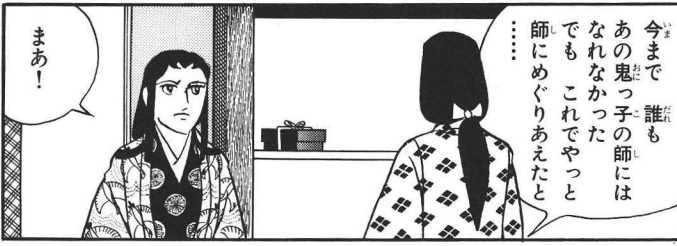

こうして辰千代は
休賀斎の屋敷に
ひきとられた
休賀斎は辰千代が
城内で嫌われている
のを感じ これほどの
子がと ふびんに
思ったのである
暗殺など
平気な時代である
休賀斎はこの才能ある
子供を鍛えて 自分で
自分の身を守れる男に
仕立てようと思ったの
である



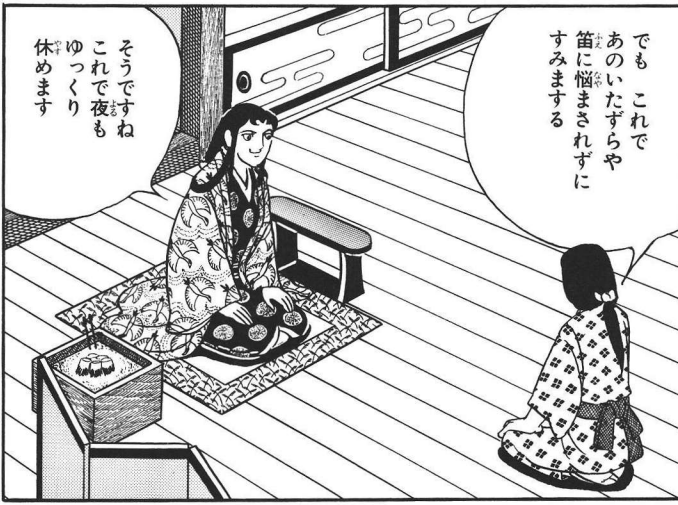

於江の方さま
辰千代君は
奥山休賀斎の
屋敷に引取られ
ました
おお
殿がうまく
追い払って
くれたのですね

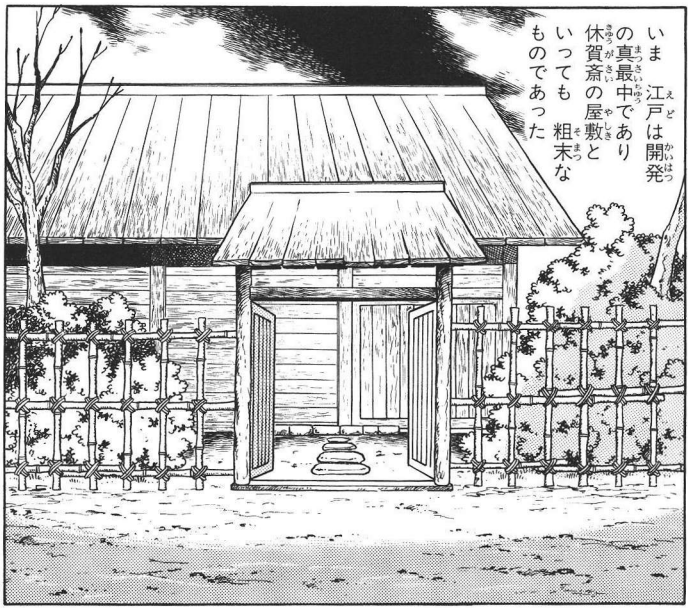

えっ
？


それが
お茶阿の方さまは
大喜び……


今まで 誰も
あの鬼っ子の師には
なれなかった
でも これでやっと
師にめぐりあえたと
……
まあ！


育ちの悪い女が
弱みをみせまいと
負け惜しみを
いってるのです
いやな女だこと


でも これで
あのいたずらや
笛に悩まされずに
すみまする
そうですね
これで夜も
ゆっくり
休めます

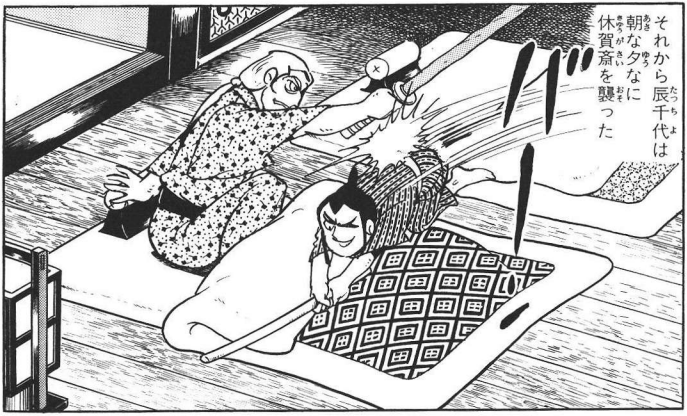

いま 江戸は開発
の真最中であり
休賀斎の屋敷と
いっても 粗末な
ものであった

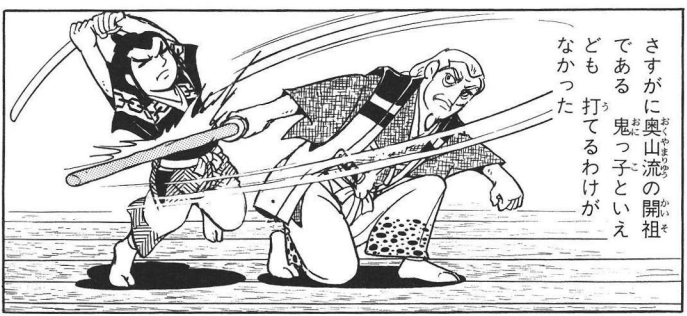

辰千代君
この屋敷に下男
召使いはいるが
一切いないと
思いなされ

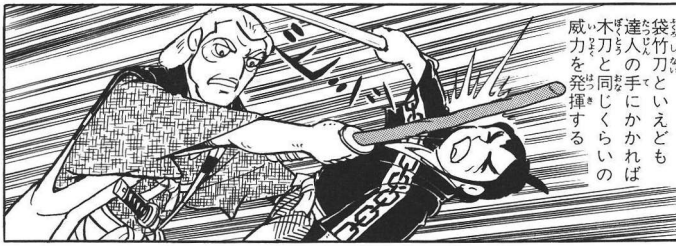

このじいと
辰千代君だけで
暮らしていると
思うのじゃ
ふーん
この屋敷にいる間
真剣を使おうと
棒手裏剣を使おうと
かまわぬ いつでも
どこでも わしを
襲うてよい
へぇ
だが わしも同じように
する 辰千代君が隙を
見せたら この袋竹刀で
容赦なく打つ
承知かな
へえ
面白い
遊びだね

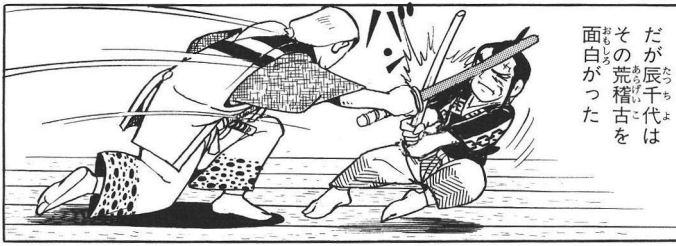

おっ
もう始まってるの
敵は待ってはくれぬ
わかった
隙を見つけたらいつでもいいんだね
うむ


辰千代はすっかり
喜んでしまった
辰千代にとっては
それは遊びであった


それから辰千代は
朝な夕なに
休賀斎を襲った


さすがに奥山流の開祖
である　鬼っ子といえ
ども　打てるわけが
なかった


袋竹刀といえども
達人の手にかかれば
木刀と同じくらいの
威力を発揮する
ビシッ

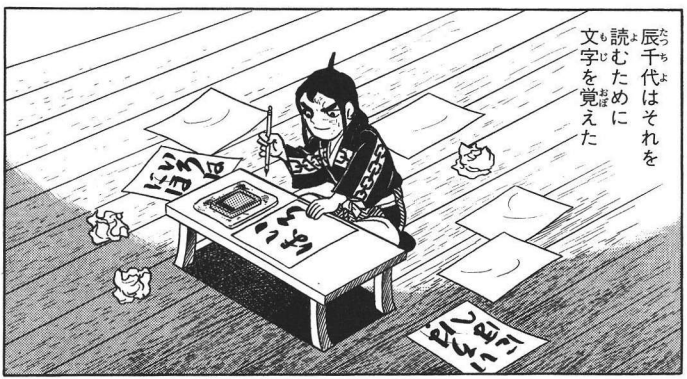

だが辰千代は
その荒稽古を
面白がった
バシッ


食事を
するのも
同じものを
一緒に食い

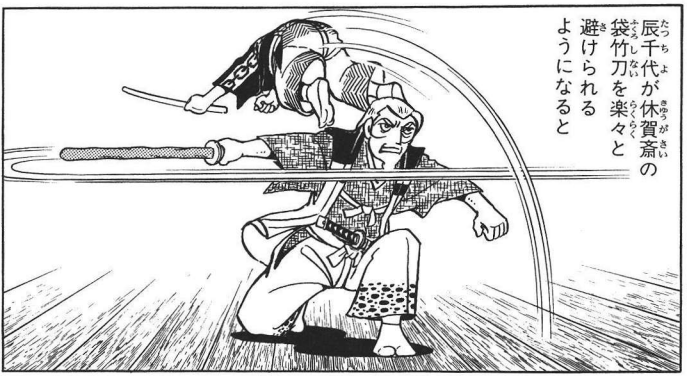

寝るのも一緒で
あった辰千代は
その生活が
楽しかった

休賀斎は武芸だけではなく合戦の記録の軍書を与えた

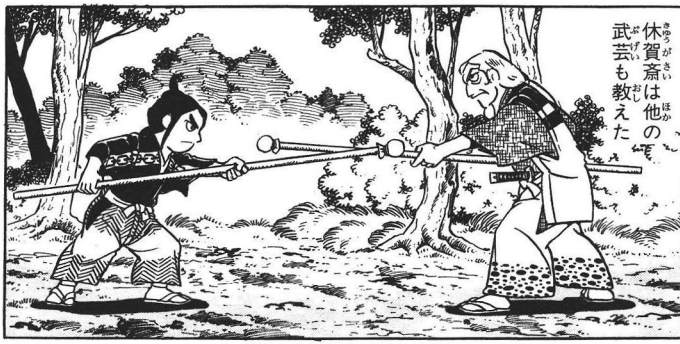
辰千代が興味を示したからである

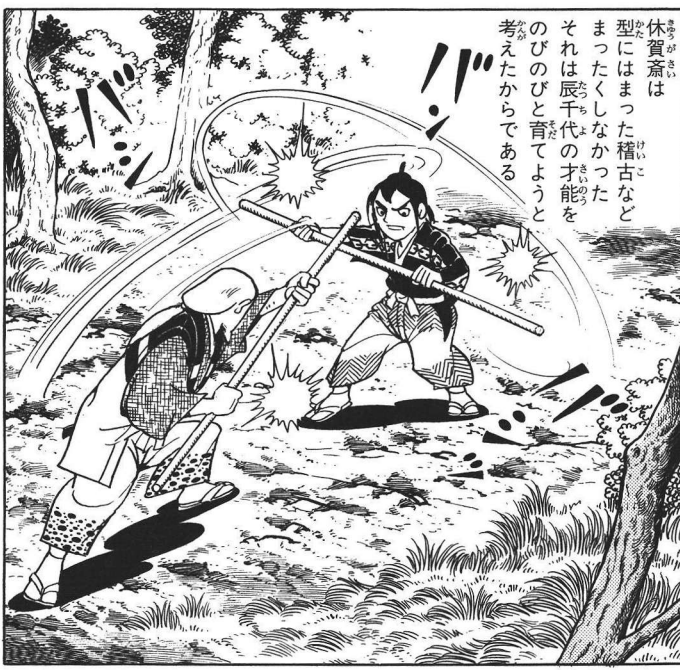


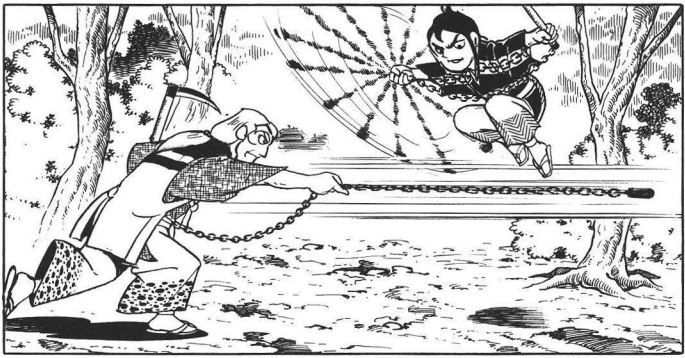
辰千代はそれを読むために文字を覚えた



辰千代が休賀斎の袋竹刀を楽々と避けられるようになると


休賀斎は他の
武芸も教えた


休賀斎は
型にはまった稽古など
まったくしなかった
それは辰千代の才能を
のびのびと育てようと
考えたからである
バン!
バン!




こうして一年が過ぎ
慶長五年（一六〇〇）
初夏を迎えた

秀忠（ひでただ）の屈辱（くつじょく）




慶長五年
（一六〇〇）
徳川家康と
石田三成派の
関係は
ぬきさし
ならぬほど
険悪なものと
なっていた


石田三成は家康を
倒そうとして
会津の上杉景勝と
ひそかに連絡を
とった


ほう　では
それがしに
会津に帰ったら
二度と上洛
いたすなと

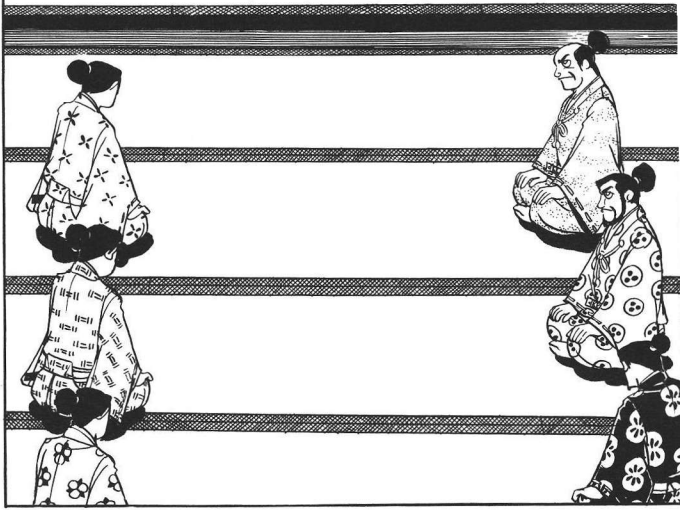

さよう　再三上洛を
促す使者が参りま
しょう　それも拒絶
してもらいたいの
です


となると
家康は豊家五大老
筆頭ゆえ　これを
許すわけには
まいらぬ


会津征伐に兵をむけましょう
だが それで大坂の徳川勢は空になる そこで反徳川の諸大名が立上がるのです
会津と西から徳川勢を挟撃するのです
なるほど面白い
まだまだ豊臣家に恩を感じる大名も多いこれで家康を倒せましょう
わかりましたやりましょう

それっきり上杉景勝は
上洛しなくなった
これは違反である
家康は豊臣家五大老
筆頭として　諸大名に
会津討伐を命じた

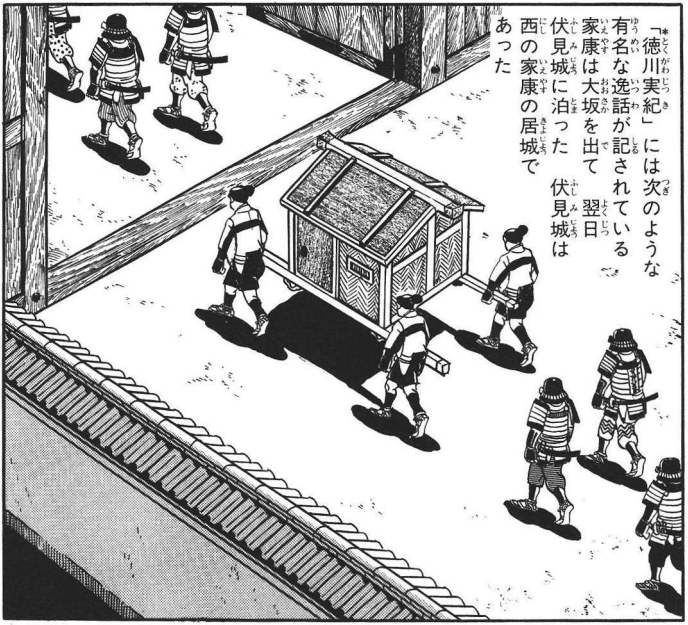


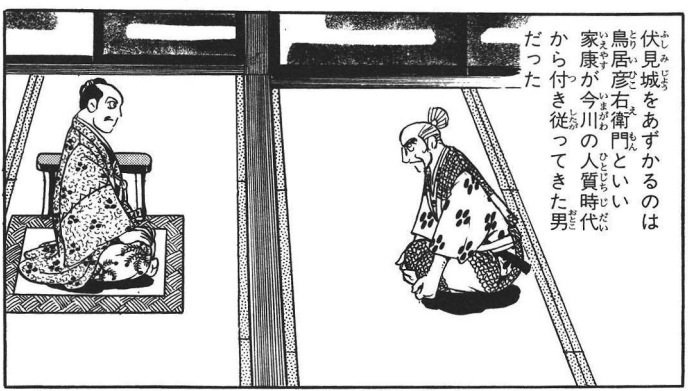




この時　家康は
上杉景勝の行動の
裏に　誰がいるのか
知っていた


それを承知で自分が
故意に大坂を留守にした
のは　石田三成を初めと
する反徳川勢力に決起の
機会を与え　はっきりと
敵味方の区別をしようと
したのである





＊徳川実紀（家康から十代家治に至る間の、編年体実録。全五一六巻）


彦右衛門
伏見城にもっと
兵力を置いて
いきたいのだが
すまんのう
殿
何を
いわれます


御定法を破れば
天下の大名を相手と
します　そんなことが
会津上杉一藩で出来る
わけがない
そんなことは子供でも
わかりますわい


この城に兵力を
ふやしても　何万の
大軍に攻められれば
いずれ　落城
それならば死ぬのは
最初から少ない
方がいい

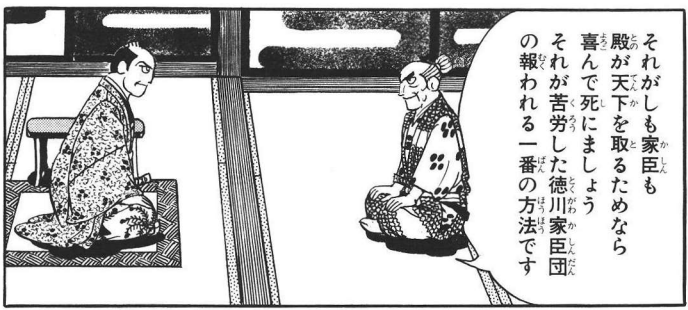

殿　この城の兵は
せいぜい五百か三百で
充分　何もなければ
それでも安泰
何かあれば三千の
兵がいようが五千の
兵がいようが
落城いたしますわい


彦右衛門
そちは死ぬ気か!?
殿　それがしは
子供の頃に今川家に
人質になって以来
共に苦労をしてきた
のでござりまするぞ


殿が今や天下分け目の
御大事の時に　殿を助
けねば　今まで苦労を
共にした五十年はなん
だったのでござります
それゆえ
申しわけなく
思うのじゃ


殿　大事の前に
涙など不吉に
ござる

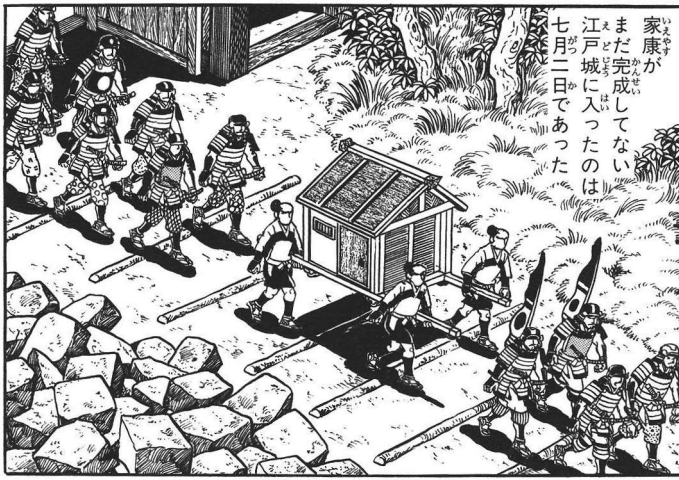


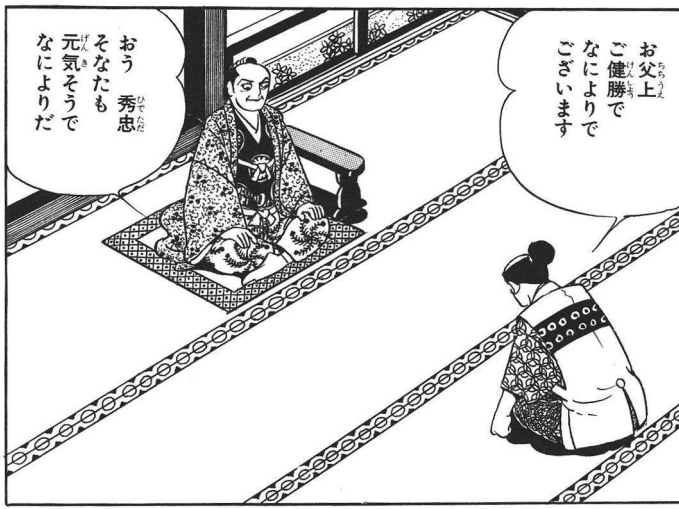

それがしも家臣も
殿が天下を取るためなら
喜んで死にましょう
それが苦労した徳川家臣団
の報われる一番の方法です


喜んで

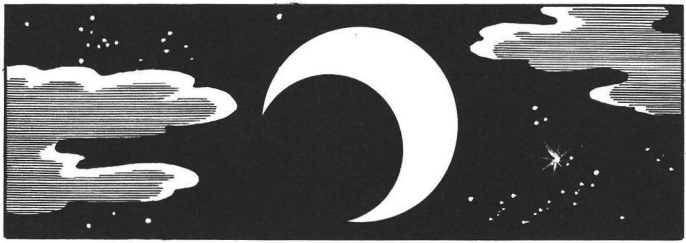

彦右衛門
一献かたむけ
よう


翌日
家康は
江戸へ向かった


家康が
まだ完成してない
江戸城に入ったのは
七月二日であった

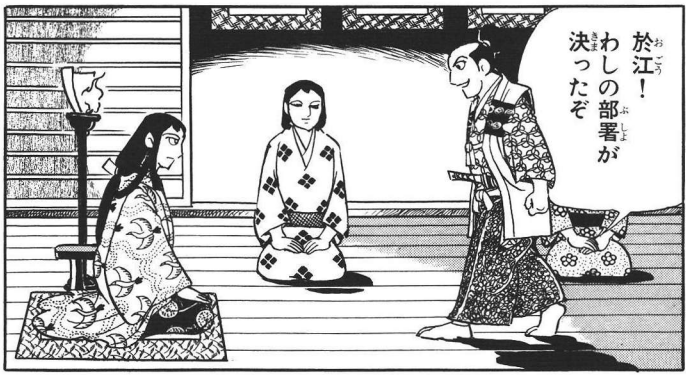

お父上
ご健勝で
なによりで
ございます
おう 秀忠
そなたも
元気そうで
なによりだ


ところでこの度は
上杉景勝が 再三の
上洛命令を拒絶して
まいった
よって 征伐いたす
はい
聞いており
まする
兄の秀康は
太閤さまに従って
九州征伐に出陣した
ことがあるが
そなたと弟の忠吉は
初陣であったな
はい
徳川の名を
辱めぬよう
働いてもらい
たい
もちろん
その覚悟に
ござります








於江！
わしの部署が
決ったぞ

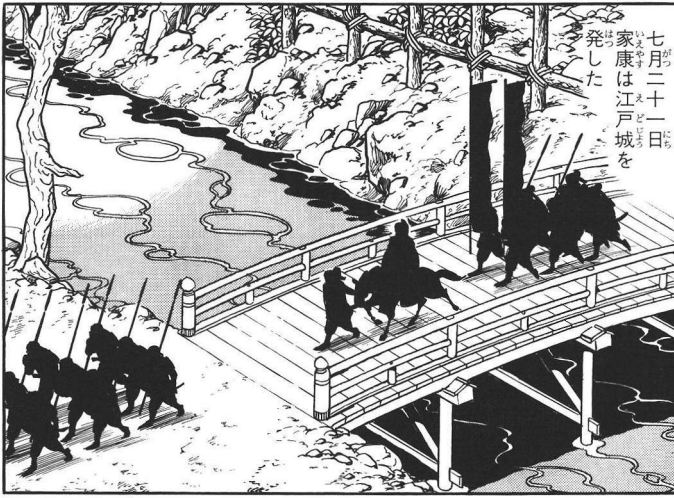

それで殿は……？
前軍の将じゃ
秀康さまは？
忠吉さまは……？
それがわしの軍に所属する一部将じゃ
まあ兄弟の中での総大将
これは徳川家の後継はわしだと天下に示したことになると思うが
さようでございますとも



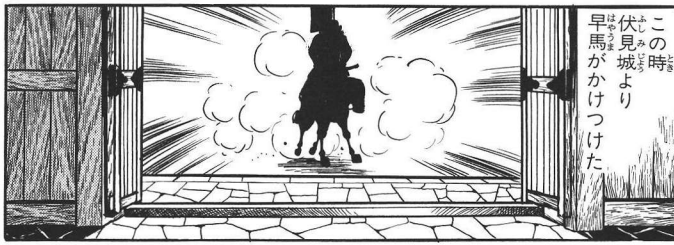

これ　すぐに
お祝の御酒を
はい

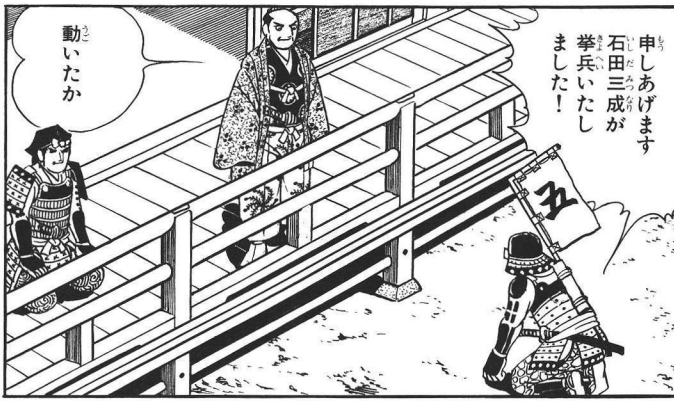



殿が手柄を立てなされば　兄君秀康さまとの差は一気に縮められまする
弟の忠吉さまにもおくれをとらなければ名実ともに　徳川家の後継にござります
その通りじゃ
大きな手柄を
立てる絶好の
機会じゃ！


七月二十一日
家康は江戸城を
発した


二十四日に
下野小山に
到着した


この時
伏見城より
早馬がかけつけた


申しあげます
石田三成が
挙兵いたし
ました！
動いたか


それで彦右衛門は
なんと申した


徳川武士の
強さを見せて
やる　それだけ
申せと


そうか
しかし 城兵は
わずか二千
どう頑張っても
七日であろうのう
ご苦労で
あった
休息をとるが
よい
ははっ
これ すぐに
諸大名を
集めよ
ははっ


諸公に
申しあげる
石田三成が
挙兵いたした！


諸公は大坂城に人質を
あずけており
豊臣家恩顧の大名も
おられる　それゆえ
これからの行動は
自由といたす
領国に帰るもよし
石田方に与するのも
よし　いずれの場合も
わしは阻げぬし
恨みにも思わない

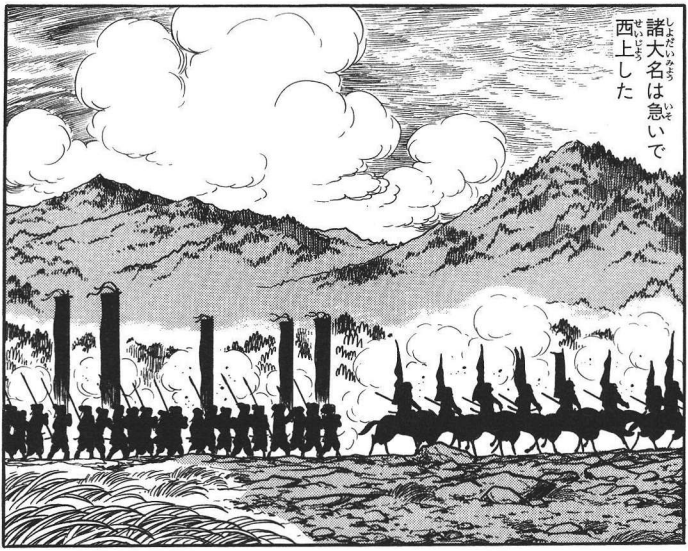

家康どの
我等を
先陣にお命じ
下され
それがしを
先陣に
家康どの
我等は豊臣家に
恩がございます
だが 石田三成には
恩はない
なにとぞ
福島正則に
出陣をお申し
つけ下され
おう そうじゃ
我等も
三成には
恩はない
やつは虎の威を
かりた狐じゃ！

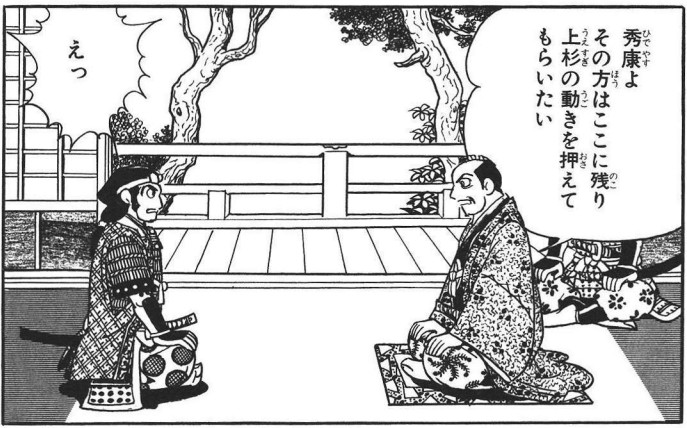


豊臣家恩顧の大名が競って先陣を申し入れたのは　太閤秀吉が朝鮮攻めを行った時台所の苦しい諸大名に軍資金を貸した石田三成はその金に高い利子をつけて怒りを買ったともいわれている

やつの高慢な鼻をこんどこそ叩き折ってくれる！

あんなやつに大きな顔をさせてたまるか


諸大名は急いで
西上した


秀康よ
その方はここに残り
上杉の動きを押えて
もらいたい
えっ

父上　上方の戦は
天下分け目の戦いで
徳川の運命を決める
大事な戦　父君の仰せ
なれども　その儀は
従いかねまする

秀康　その気持はうれ
しく思うが　上杉家は
謙信以来　武勇の家じゃ
誰が相手しても難しい
敵じゃ　それを食い止
められるのは　そなた
しかおるまい

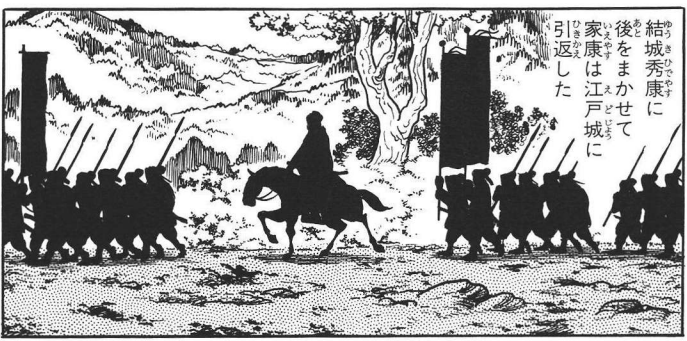
会津征伐に加わった
大名のほとんどは
豊臣家恩顧の大名だ
それが誓紙まで書き
人質まで置いて西上
した

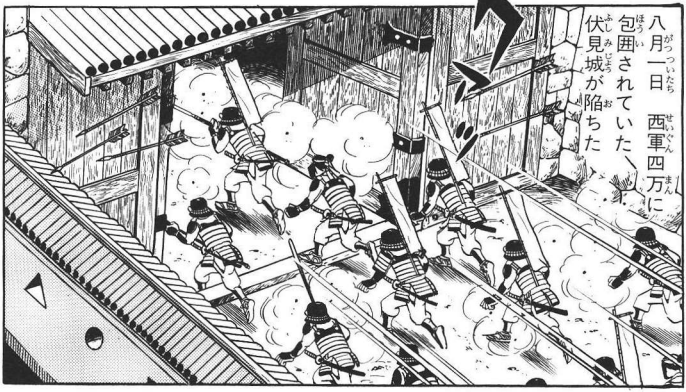
もし　江戸が敗れる
ようなことになれば
あずかった人質も殺さ
れよう　そうなれば
それらの大名はわしから
離れる　となれば
徳川はどうなる

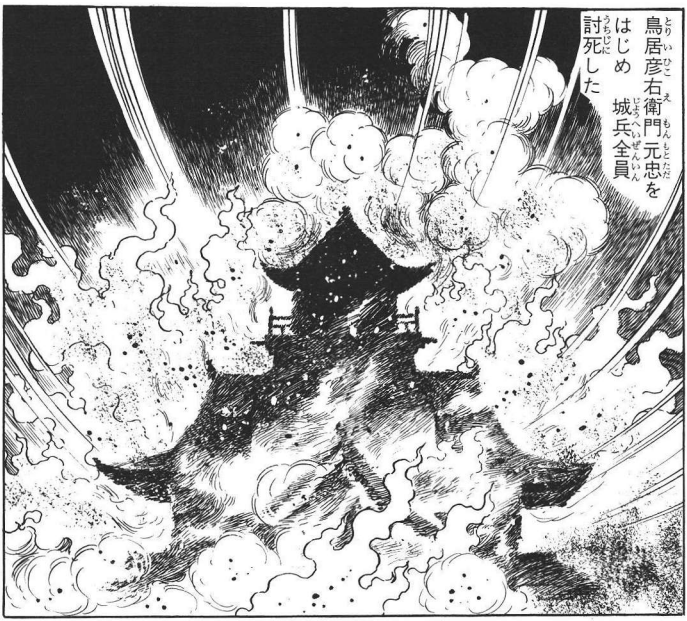
秀忠や
忠吉が
おりましょう


秀康よ
秀忠も忠吉も初陣
じゃ　臨機応変に
合戦できるのは
お前しかおらぬ
頼む　引受けてくれ
……


わかりました
お父上に
そこまでいわれ
ましては……
お引受けいたし
ます
おお
わしの気持が
わかって
くれたか


結城秀康に
後をまかせて
家康は江戸城に
引返した


八月一日　西軍四万に
包囲されていた
伏見城が陥ちた


鳥居彦右衛門元忠を
はじめ　城兵全員
討死した


江戸城では軍評定が
開かれ 西上の方法が
練られた


家康は三万二千を
率いて東海道を
西上し


秀忠は三万八千の兵を
率いて 中山道を進み
岐阜で合流する
ことに決定した


大久保長安
なにか　わしに
申したいことが
あるとか……
はい　それがし
秀忠さまの
補給部隊として
お供をいたします
るが　ひとつ気に
なることがござります
なんじゃ
西軍に属する犬山城主
石川貞清は木曽代官を
かねておりまする

それがしも代官として
あちこちの土地を見て
おりまするが
木曽谷は天然の要害で
ございます
石川貞清がここで
踏ん張るつもりになられ
たら　秀忠さまの軍勢
三万八千をもってしても
容易に抜くことは
できぬと思いまする

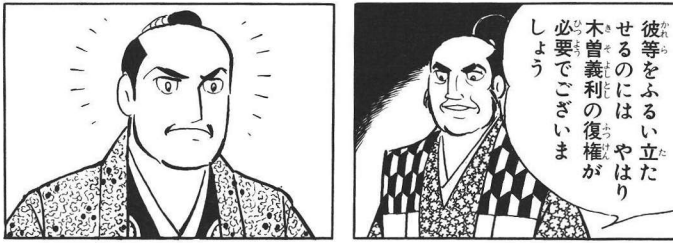
ふむう

そこでそれがしに
ひとつ　考えが
ございます

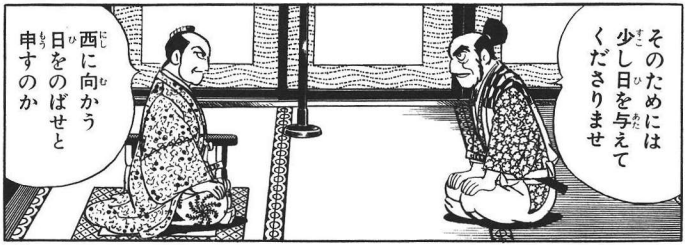
申してみよ

天正十八年
（一五九〇）
木曽福島城の
木曽義利は改易に
処されましたが
木曽にはその時の
遺臣が多く土着
しております


彼等ならば
石川貞清の家来の
中にも縁つづきが
多く 内部からも
反乱を起させられ
まする
なるほど

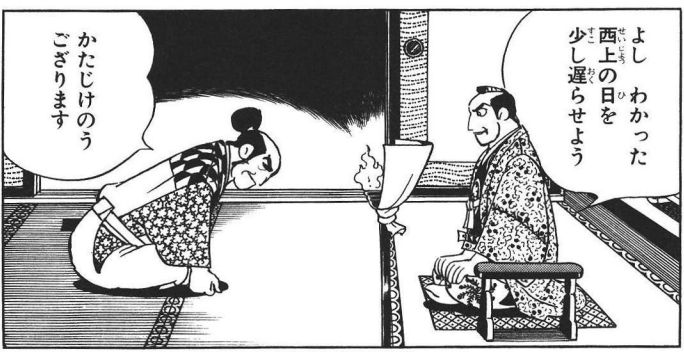

彼等をふるい立た
せるのには やはり
木曽義利の復権が
必要でございま
しょう


木曽義利は
素行が悪くて
改易になったの
じゃ 復権は
ちと 無理じゃのう
では遺臣達に
それなりの
地位を与えて
くださりま
するか
おう それならば
約束しよう
ではさっそく
説得に動き
まする


そのためには
少し日を与えて
くださりませ
西に向かう
日をのばせと
申すのか


ふむ

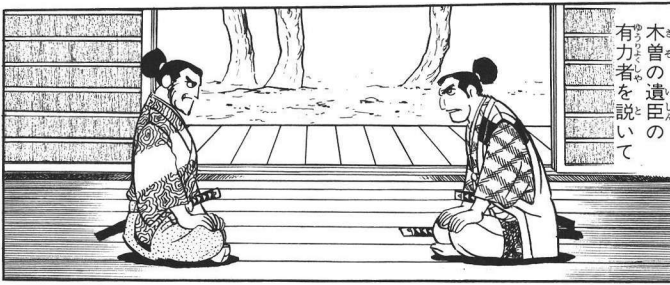

西方の小早川家
毛利の吉川家に
味方につくよう
密使を送ってあるが
まだ 返事がこぬ
間を置けば
その態度も
はっきりしよう

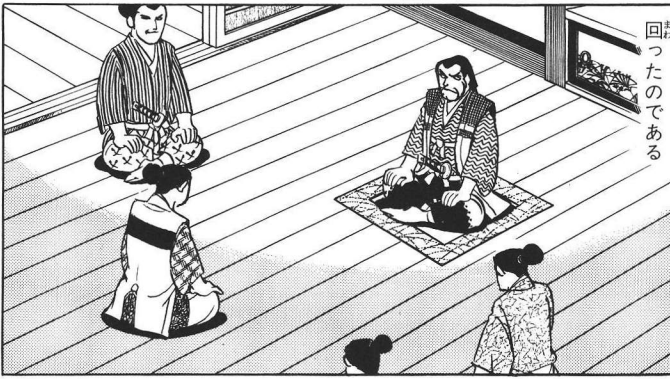

よし わかった
西上の日を
少し遅らせよう
かたじけのう
ござります


この時 大久保長安は
まだ代官にすぎない
「怪物」と呼ばれて
近世史にその名を
残すようになったのは
この後である


大久保長安は
雨宮次郎右衛門と
才兵衛に 木曽の
遺臣説得を命じた


雨宮次郎右衛門と
才兵衛は目の回るような
忙しさであった


木曽の遺臣の
有力者を説いて


回ったのである


説得は成功し
内部から反乱を
起し 石川貞清を
攻めた


秀忠軍に対する備えしか
していなかった石川勢は
予期せぬ反乱でもろくも
崩れ 先を争って
犬山城へ落ちていった




それにしても
木曽に目を
つけるとは
お頭はやはり
只者ではない


家康公は木曽義利を
復権させる気はない
となれば この木曽は
天領となり いずれ
お頭の傘下に入る


才兵衛
お頭はいずれ家康公が
天下を握ると見ているのじゃ　それで長かった戦国の世は終る
終れば平和な世になる
平和がくればまず先に
家が建つ　城下町の
建設もさかんになる
その時　もっとも必要とされるのは材木じゃ


この木曽の材木は
無限じゃ　天下の
財はことごとく
お頭に集まること
だろうよ
わしは
好かぬ


あのお方は
化け物じゃ
欲しがりようが
強すぎる
だが　目が広い
しかも　切れ味
抜群だ


心がありませぬ
心が！　人を将棋の駒
としか見ておりませぬ
しかも　己の貪欲さを
満たすための駒ですぞ
だから　わしは化け物
というのです


若に あんなふうに なってもらいたく ありませんな
そんな心配はいたすな わしはお頭の真似を するつもりはない ただ あのお人の目を 自分も持ちたいと 思っているのだ
お頭の目はずっと 以前から 天下を 見ていた 日本国だけでなく中国から 南蛮まで睨んでいた そんな広大な 視野を持てる人間が 今の日本にいるかね
そりゃいませんよ 自分の国で どうやれば 生き残れるかしか 考えていません
それより あの鬼っ子さま どうしていられますかな
相変わらず江戸城で 暴れているんだろうよ

あの鬼っ子は
大方の人に憎まれ
ごく少数の者に
親しまれながらのう

才兵衛は
鬼っ子が嫌いでは
なかったのか？

いや　たしかに
最初は……
しかし時がたちますと
何やら懐しいような
今一度会いたいような
奇妙な思いがつのって
参りましてな

あのお子も
才兵衛の嫌いな
化け物では
ないのか

あ……
そりゃア違う
てんで違います

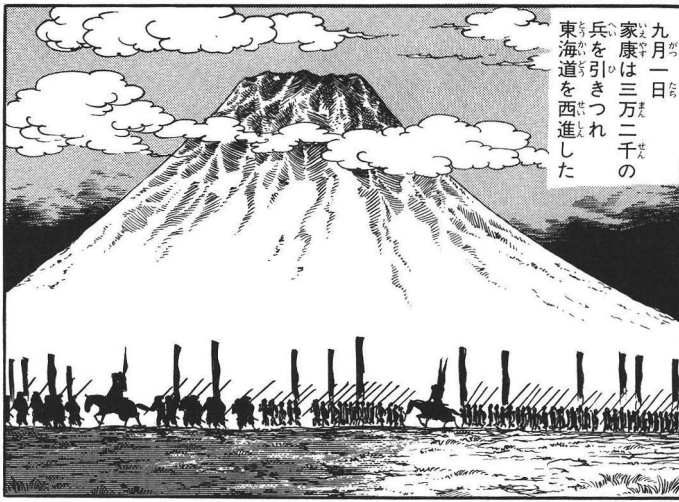
あのお子は心が熱い
熱すぎるんです
だから　化け物めいて
見えるんです　人は
あんなに熱くなれません

どうして
そんなことが
わかる？

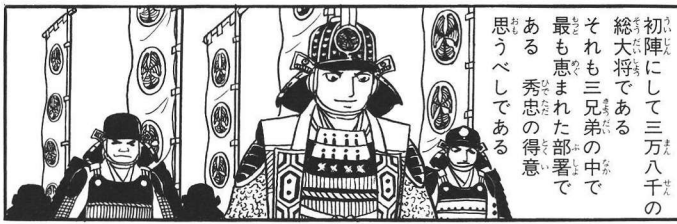

立合って見れば
分かります 人は
立合いの中で自分を
隠すことが出来ません
本当の姿を見せまする
あのお方は 頼むのは
己しかないと思い
何事も人の何倍も
やっているんです

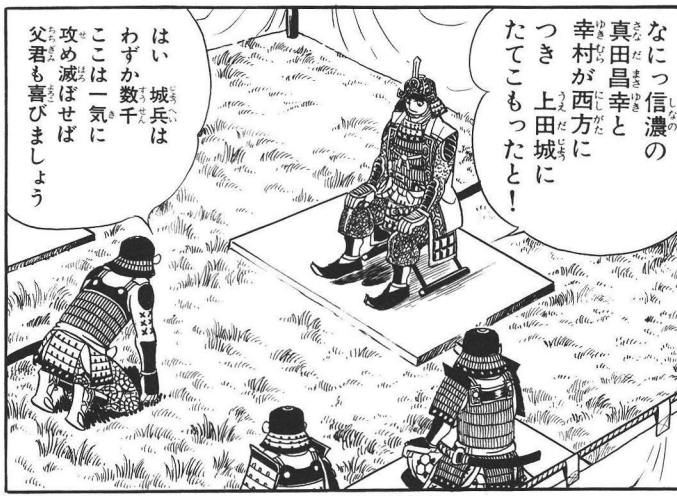

ふむう……
化け物とか怪物とか
呼ばれる人物には
総じて意外なほど
繊細な心の持主が多い
彼等はなんらかの必要上
その繊細さを隠さねば
ならない
それが自分の弱点と
知ってるからだ
それを隠すため
よけい化け物じみた
所業や言説が多く
なる……


そうか
あの子の心は
熱いのか……
そうです


九月一日
家康は三万二千の
兵を引きつれ
東海道を西進した


同時に秀忠も
三万八千の軍勢を
率いて中山道を
西進した


初陣にして三万八千の
総大将である
それも三兄弟の中で
最も恵まれた部署で
ある　秀忠の得意
思うべしである

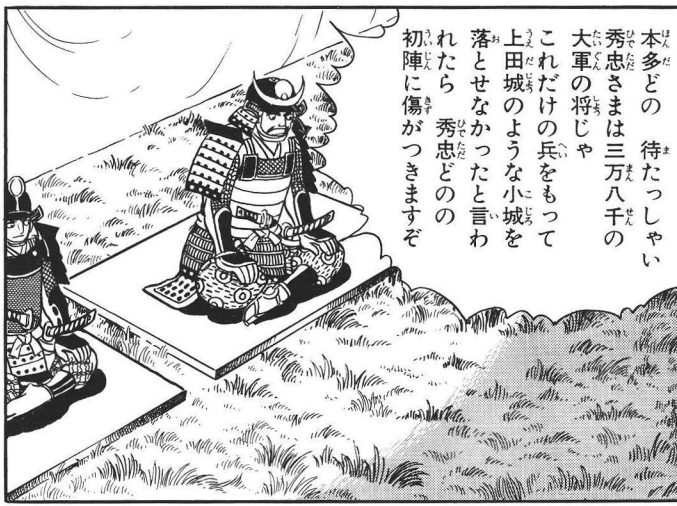

なにっ信濃の
真田昌幸と
幸村が西方に
つき　上田城に
たてこもったと！
はい　城兵は
わずか数千
ここは一気に
攻め滅ぼせば
父君も喜びましょう


それがしは
上田城攻めには
反対でござる


本多正信
真田は会津征伐の時
には　わが指揮下に
あったのじゃぞ
その裏切者を討つな
と……？
なぜじゃ

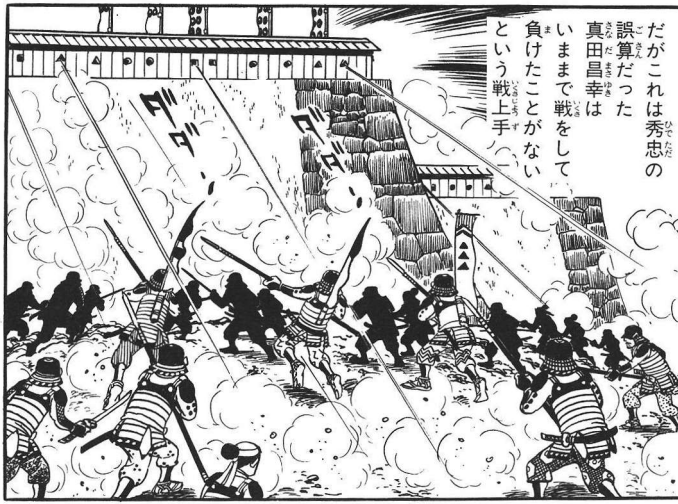

こんなことは地方の豪族には よくあることです 親子が兄弟が敵味方につき家を潰さぬようにする…… そんなことは無視なされ


上田城はわが陣営に参加している長男の真田信幸を抑えに置けば 父昌幸も長男の軍勢には戦はいどみますまい それより約束の日時に岐阜に着くことが重大にございます


本多どの 待たっしゃい 秀忠さまは三万八千の大軍の将じゃ これだけの兵をもって上田城のような小城を落とせなかったと言われたら 秀忠どのの初陣に傷がつきますぞ


その通りじゃ
父上は　それがしに
期待なされているから
これだけの兵を
まかせてくれたのじゃ
この期待に応えねば
ならぬ


よいか
上田城を
ふみ潰して
岐阜へ参る！
ははっ
ははっ

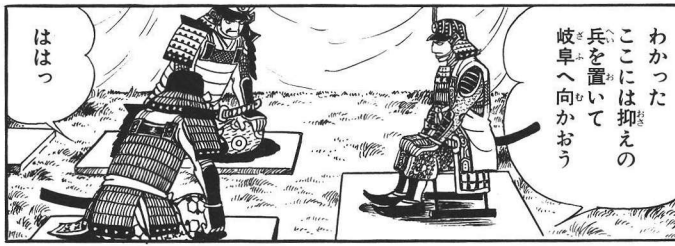

だがこれは秀忠の
誤算だった
真田昌幸は
いままで戦をして
負けたことがない
という戦上手
ダダ
ダダダ

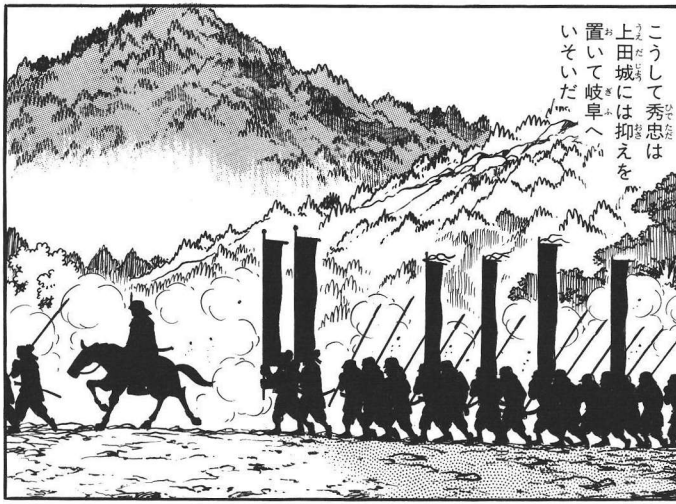

やることなすこと
裏をかかれ
八日かかっても
まだ落ちな
かった

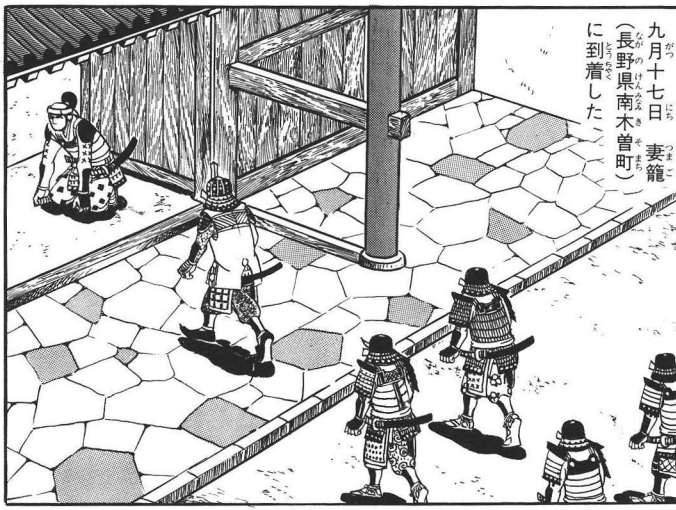

秀忠さま
このままでは
約束の日時に
岐阜へ参ることは
出来ませぬ
ムムム


徳川の運命を
賭けた天下分け目の
合戦に参加しなかったら
末代までの
笑い者となりまする




わかった
ここには抑えの
兵を置いて
岐阜へ向かおう
ははっ

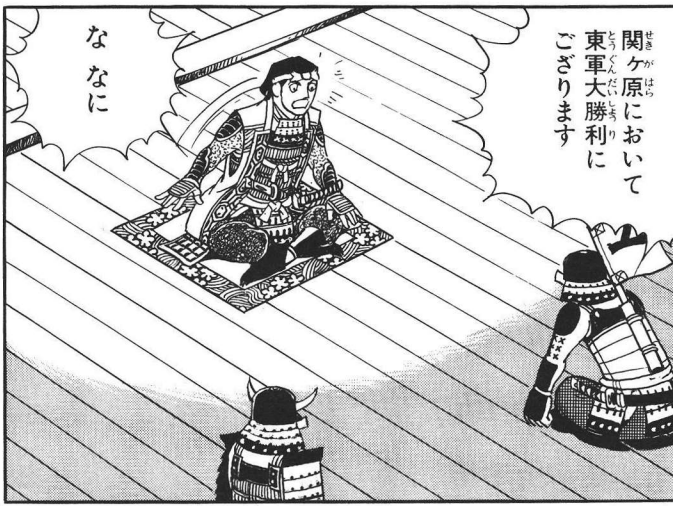

こうして秀忠は
上田城には抑えを
置いて岐阜へ
いそいだ


九月十七日 妻籠
(長野県南木曽町)
に到着した

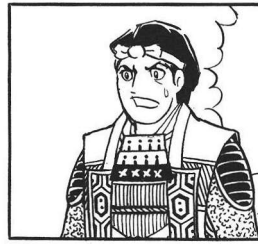



申しあげます




関ケ原において
東軍大勝利に
ございます
な なに


七月十五日
朝より
始まりました


いつ合戦は
始まったのじゃ


二日前に！
はい
合戦は午前中は
一進一退でござり
ましたが 小早川家
吉川家が わが軍に
味方し 勝敗は一気に
決りましてございます


たったの一日で
八万の西軍を
打破ったのか


しまった……
わしの立場は
どうなる！


秀忠は一目散に
関ケ原に駆けつけた
一日十五 六里
（六十～六十四キロ）
の強行軍だった
という……
徳川の命運を左右
するという大事な
合戦に三万八千の
軍勢もろとも遅れる
とは 常識に反する
大失態である



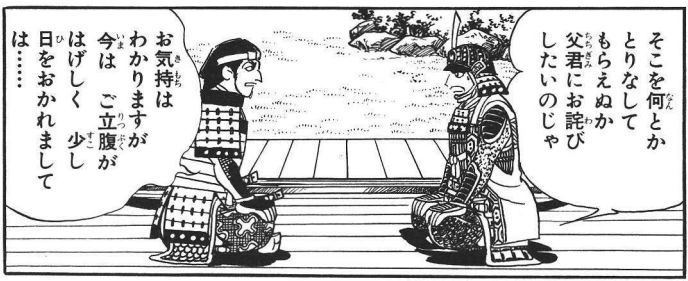

ほう 今頃 どなた様か おいでになったぞ

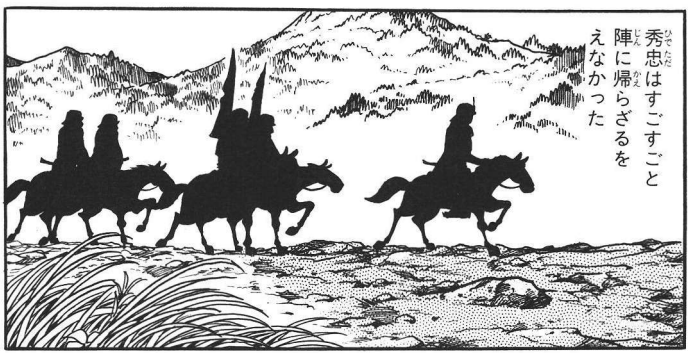

見ろよ 鎧や 旗指物の美しい こと……我等は 泥だらけと いうのにのう



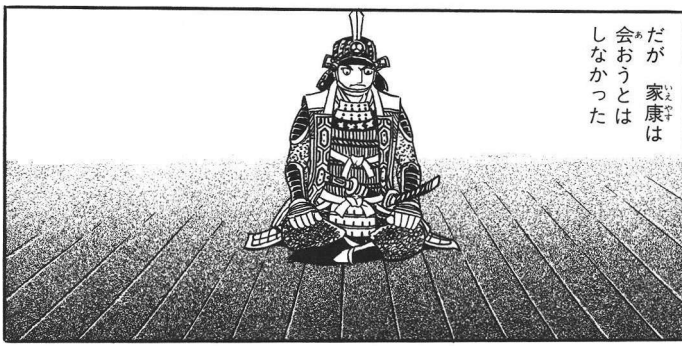

秀忠は軍勢を 草津にとめると 大津城にいる 家康のもとへ とんでいった


なに!?
父君が会いたく
ないと申されたか
はい
なにとぞ
お引取り
下さいませ


そこを何とか
とりなして
もらえぬか
父君にお詫び
したいのじゃ
お気持は
わかりますが
今は ご立腹が
はげしく 少し
日をおかれまして
は……


秀忠はすごすごと
陣に帰らざるを
えなかった


秀忠は毎日
家康のもとへ
おとずれた


だが 家康は
会おうとは
しなかった


秀忠は 失意の
うちに ただただ
家康の怒りが
解けるのを
待つしかなかった

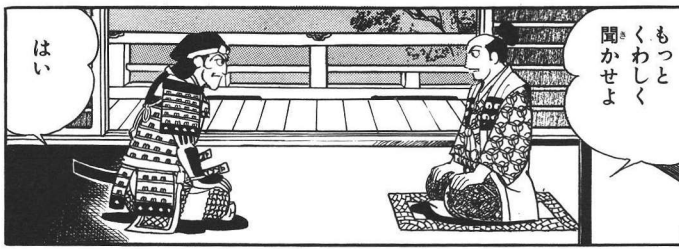



関ケ原の合戦でめざましい活躍をしたのは誰じゃ？
下野公（忠吉）さまにござります


なにっ弟か！


はい 一番槍をつけられました
合戦に最大の手柄といえば一番槍であった





松平忠吉の妻は徳川の重臣井伊直政の娘である　直政は婿の忠吉に何がなんでも手柄を立てさせ家康の後継者争いの先頭に立たせたかった



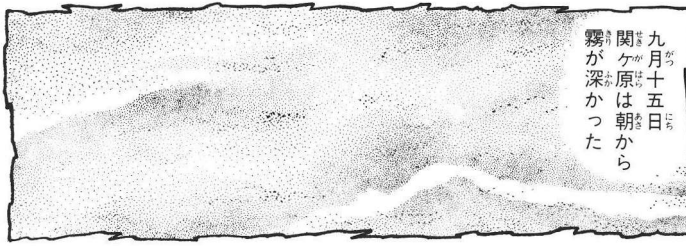

殿 秀忠さまは
まだ ご到着に
なりませぬ
ここは我等だけで
戦うべきでござ
います

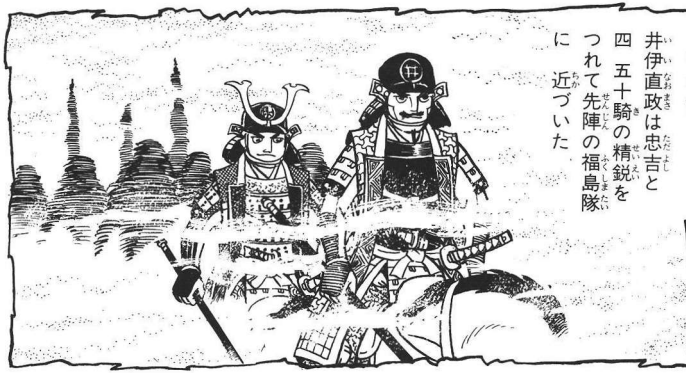

井伊どの
それはならぬ
ここで 秀忠
さまを待つ
べきじゃ
本多どの
戦には戦機と
いうものが
ござる
戦機を逸すれば
勝機を逸し
まするぞ


福島正則をはじめと
する豊臣方の大名は
いきりたち 抑えが
きかぬ状態です
このままでは いつ
彼等だけで合戦を
始めるやも知れま
せぬ


そうなったら殿が天下を取っても徳川殿が天下を取れたのは我等がお陰だと言い触らしましょう
また 時がたてば我等に味方すると約束した西軍の小早川 吉川家がどう心変りするかもわかりませぬ これ以上待つのは不利にござります
ふむう 心変りはありうる
よし 十五日朝より戦闘を開始する各将に伝えい！
ははーっ

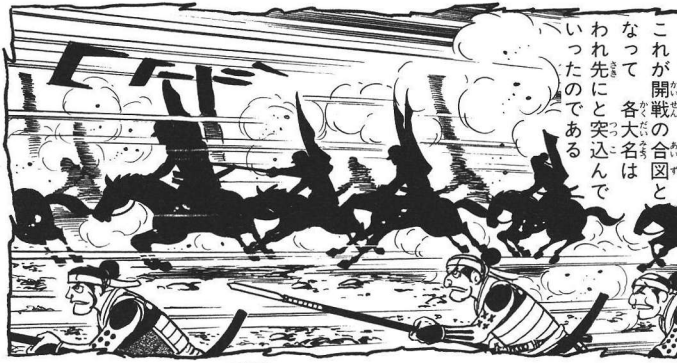

直政が戦闘を
強硬に主張したのは
今が忠吉にとって
絶好の機会であると
直観したからである

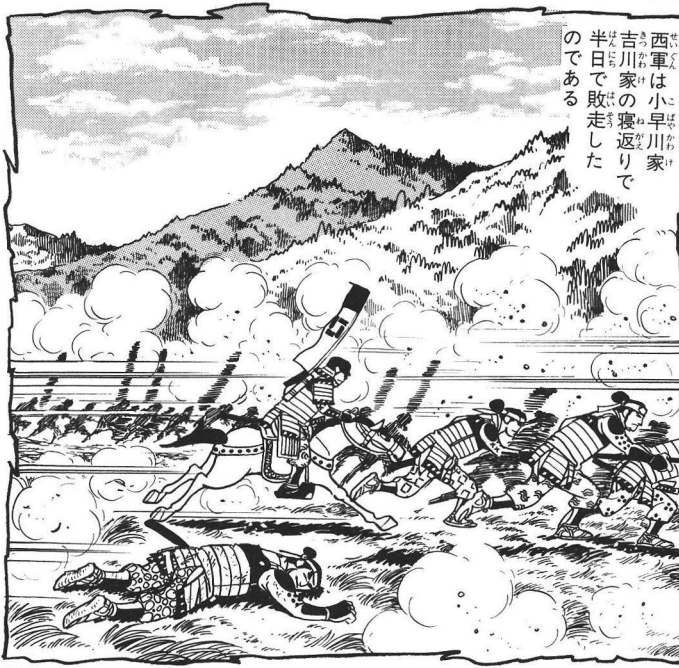

九月十五日
関ケ原は朝から
霧が深かった

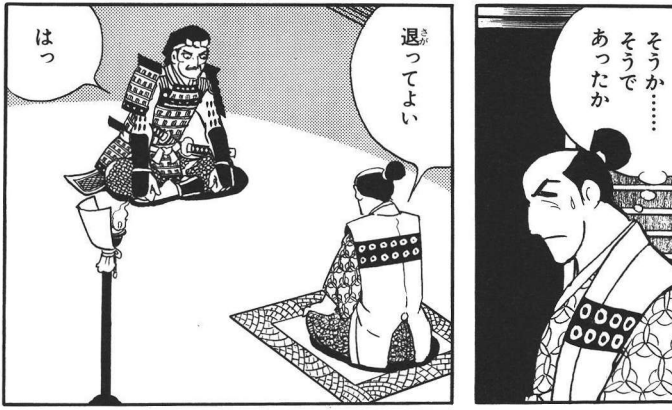

井伊直政は忠吉と
四五十騎の精鋭を
つれて先陣の福島隊
に近づいた


止れ！
何者か
井伊直政でござる
下野公(忠吉)と共に
みずから物見中で
ござる　下野公は
初陣ゆえ　後学の
ためにと思い　戦場を
見せているのでござる
おう
さようか
お通り下され


こうして直政は
福島隊を通り
ぬけ……
そのまま前方の
西軍に鉄砲を
撃ちこみ
斬り込んで
いったのである。


これが開戦の合図となって 各大名は
われ先にと突込んでいったのである


西軍は小早川家
吉川家の寝返りで
半日で敗走したのである

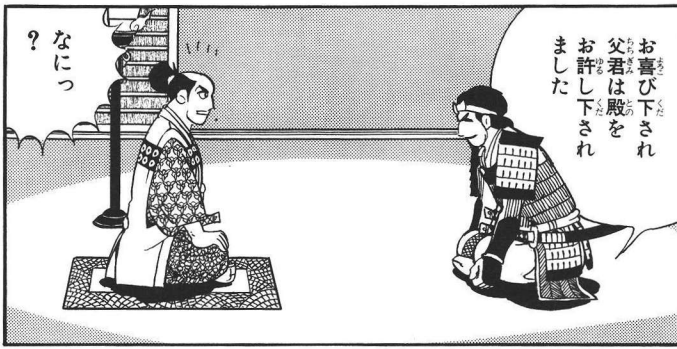

そうか……
そうで
あったか
退ってよい
はっ


兄は会津上杉を
くいとめ 弟は
一番槍か……


それにくらべ
わしは三万八千もの
軍勢をあずかりながら
徳川の運命を
決める合戦に
遅れてしまった


殿




お喜び下され
父君は殿を
お許し下され
ました
なにっ
？


部署も今まで
通り副将格に
ござります


な なんと

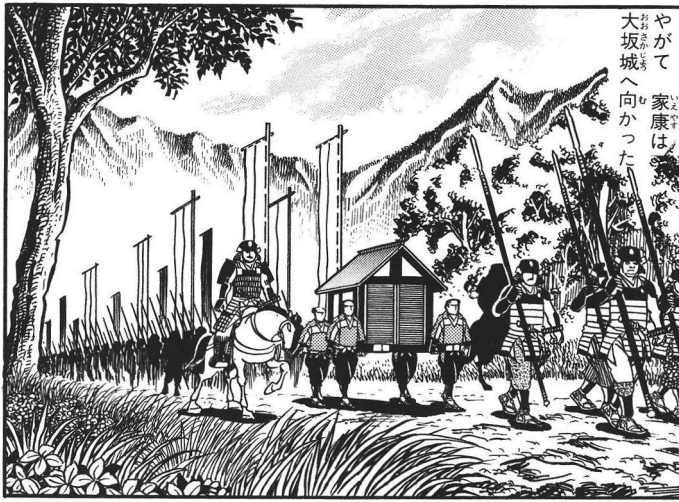
榊原康政さまが
一命を賭けて
殿を弁護なされた
そうにございます

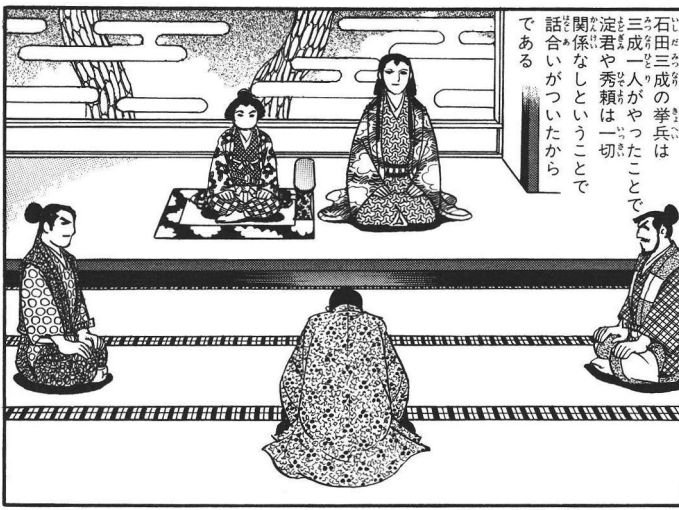
さあ これから
すぐ父君に
ご挨拶に参られ
ませ

おう

だが許されたからと
いって 秀忠の心中は
おだやかでなかった
家康の後継者争いに
大きな遅れを
とったからである

その後
このあせりが
辰千代への
殺意を強めて
いくのである


やがて 家康は
大坂城へ向かった


石田三成の挙兵は
三成一人がやったことで
淀君や秀頼は一切
関係なしということで
話合いがついたから
である


慶長五年（一六〇〇）
家康は天下の覇者
となった
ところが家康の
後継者争いは
熾烈の度を強めて
いくのであった



捨て童子 松平忠輝 上



忠輝（ただてる）と千姫（せんひめ）



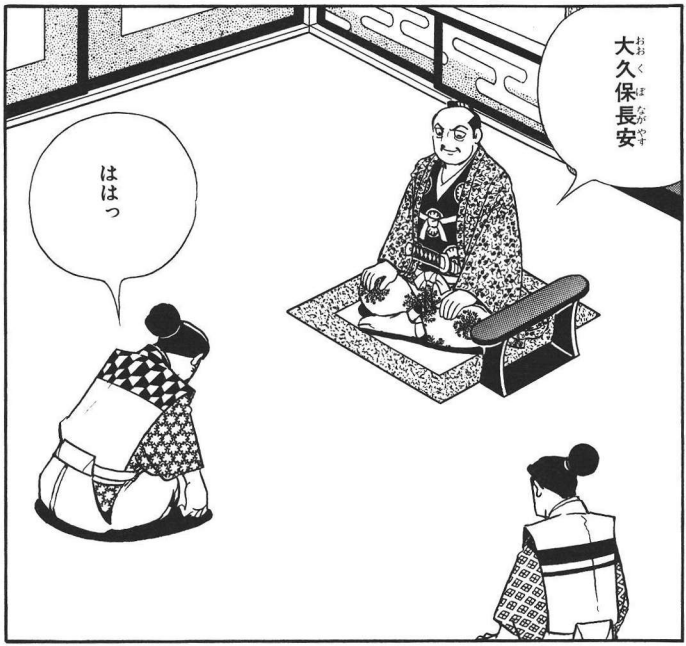

慶長五年九月
（一六〇〇）
徳川家康率いる東軍と
石田三成率いる西軍とが
天下を賭けて関ヶ原で
決戦した
合戦は一日で東軍の
勝利となった

西軍で家を潰された大名
八十七家 領地を減らされたもの四家……
家康はその領地をどう配分するかで知恵をしぼった 豊家恩顧の大名でも東軍に味方した大名には大きく加増した

だが 四国 中国 九州に国替えし 要地には徳川一族や譜代の大名を置いて 守りを固めた

＊譜代（関ケ原合戦の前から徳川氏に仕えてきた家臣）




大久保長安
ははっ

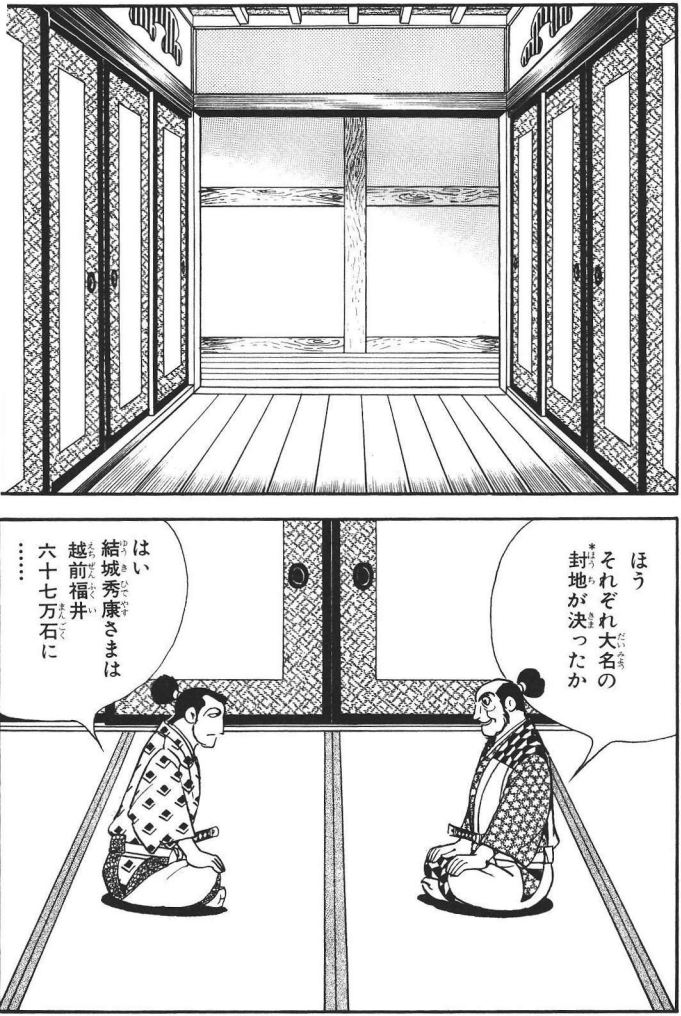






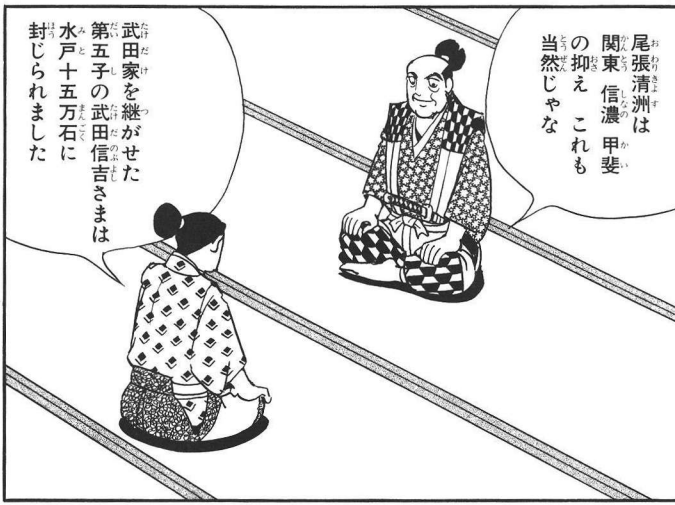


当時　金山や銀山を掘るものは経費込みとはいえ採掘量の四〇パーセント近い歩合が入ったといわれている
長安が歴史の脚光をあびたのは　この時からである



*封地（諸侯の領地）


なるほど
越前福井は京都に
近い北陸の要じゃ
当然だな
松平忠吉さまは
福島正則の領地
だった尾張清洲
五十二万石に……

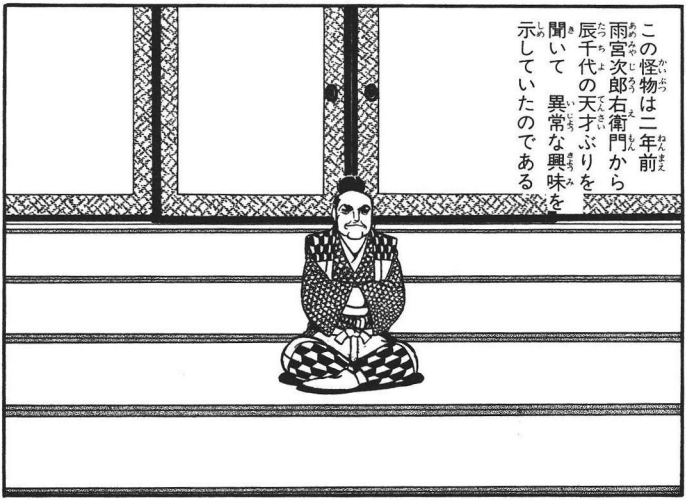

尾張清洲は
関東 信濃 甲斐
の抑え これも
当然じゃな
武田家を継がせた
第五子の武田信吉さまは
水戸十五万石に
封じられました

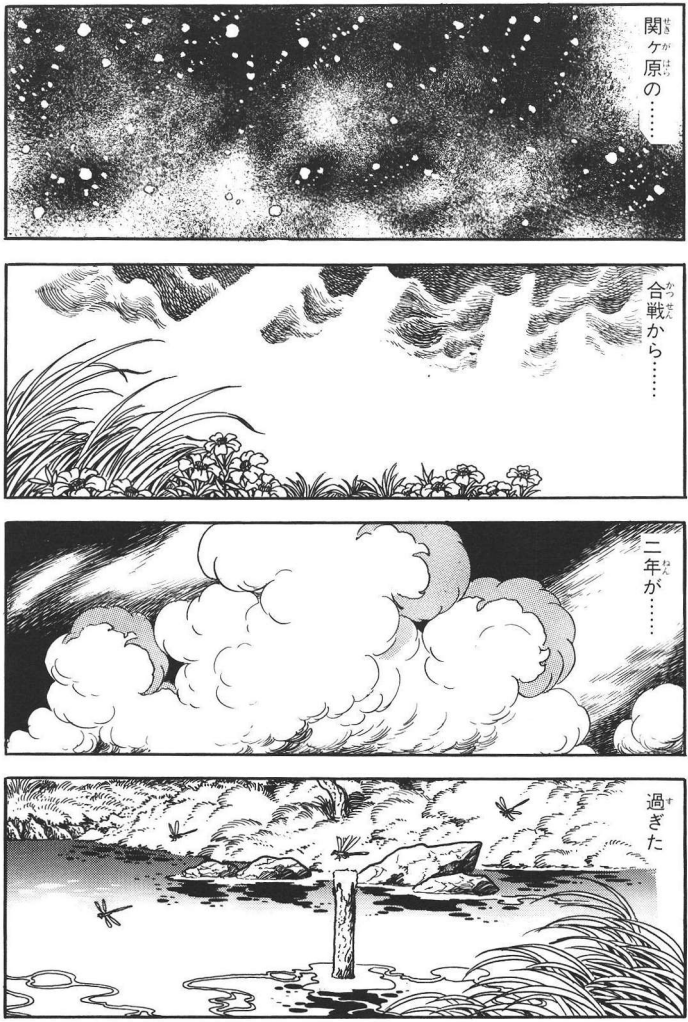

うむ これは
奥州への抑えだ
大殿もなかなか
考えていなさる


ところで
第六子の
辰千代君は
……
それが
加増が
ありませぬ
なにっ！
一万石
そのままか
はい
なぜじゃ
さあ
そこまでは
我等には
わかりませぬ
ふむう……
雨宮次郎右衛門の
報告では並はずれた
天才児との話で
あったが……
それほどの
子供なら　将来
徳川家のために
大きな力となろうに
……

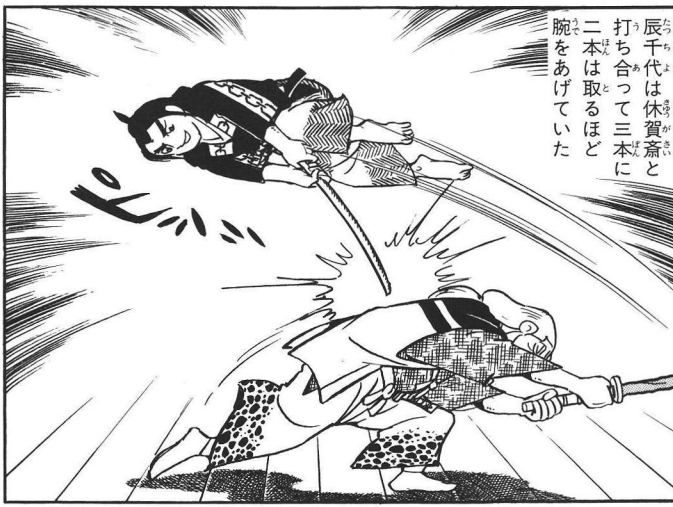

その方 辰千代君に関しては これからもっとくわしく報告いたせ
はは―っ

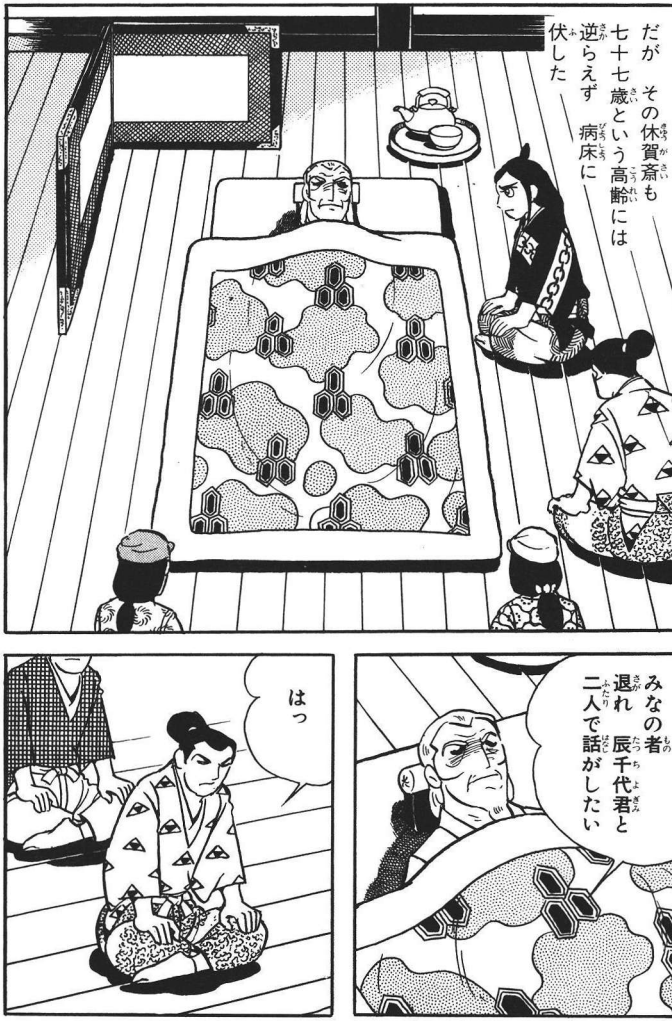

なぜじゃ石田三成滅んだといえども 豊家はそのまま豊家恩顧の大名もそのままだ
それほどの天才児を放っておく手はない


この怪物は二年前雨宮次郎右衛門から辰千代の天才ぶりを聞いて 異常な興味を示していたのである

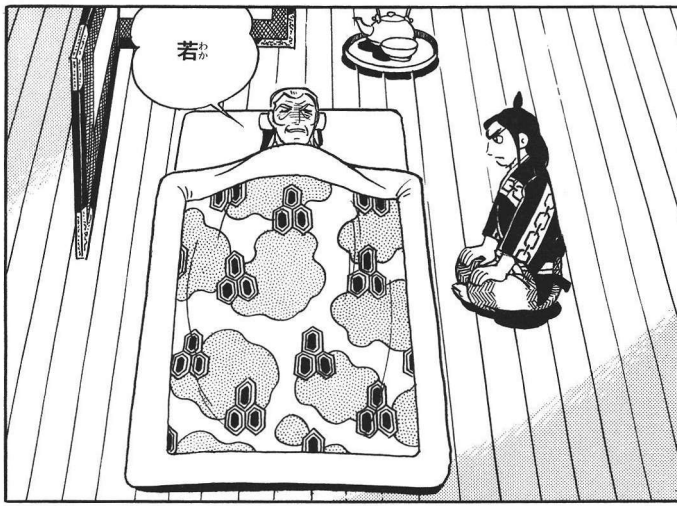

関ケ原の……
合戦から……
二年が……
過ぎた


鬼っ子辰千代は
あいもかわらず
奥山休賀斎と
武芸を楽しんで
いた
バン
☆
☆


辰千代は休賀斎と
打ち合って三本に
二本は取るほど
腕をあげていた
ハッ


だが　その休賀斎も
七十七歳という高齢には
逆らえず　病床に
伏した
みなの者
退れ　辰千代君と
二人で話がしたい
はっ




若


爺！　死ぬなよ
爺がいなくなったら
おれはどうしていいか
わからなくなる


これは爺の
遺言だと思って
聞いて下され

生あるものは必ず滅ぶものなのですこれは自然の道理にございます

でも死んじゃだめだ！

いいですか若は力がありすぎまするこれからは十の力を八まで隠しなされ

兵法だけのことではありませぬぞ　若の持てるあらゆる力を心して隠さねばなりませぬ　さもなければ二十歳まで生きることはおぼつかぬかもしれぬぞ

それから中納言（秀忠）さまには気をつけなされ

兄上に……？

あのお方は
小心で嫉妬深い
……若とは
水と油じゃ
できうれば顔も
合わさぬほうが
よろしい

わかったよ
爺のいうことは
なんでも聞くから
死んじゃだめだ

ヒュン

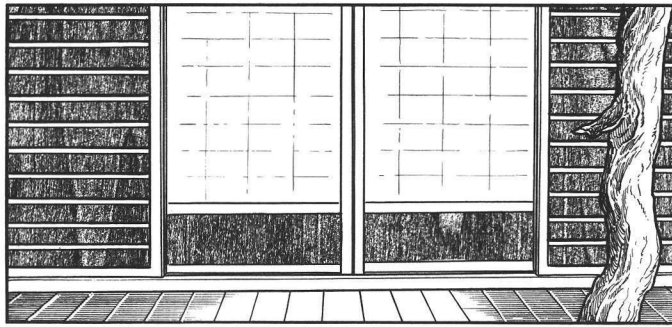
おみごと！
もう爺では
歯が立ちませぬ

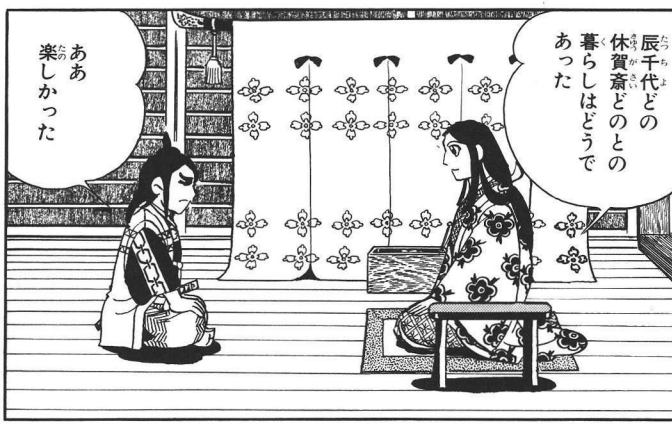
この鉄扇を……
それがしの形見に
……


爺！
ガク
爺！
死んじゃだめだ
爺！
爺!!
辰千代にとって
休賀斎は
父親のような
ものであった


辰千代は
休賀斎の
野辺の送りを
すませ……


江戸城に
引返した




辰千代どの
休賀斎どのとの
暮らしはどうで
あった
ああ
楽しかった


母上
爺はどうして
死んでしまったんだ


天命だけは
だれにも
さけられませぬ

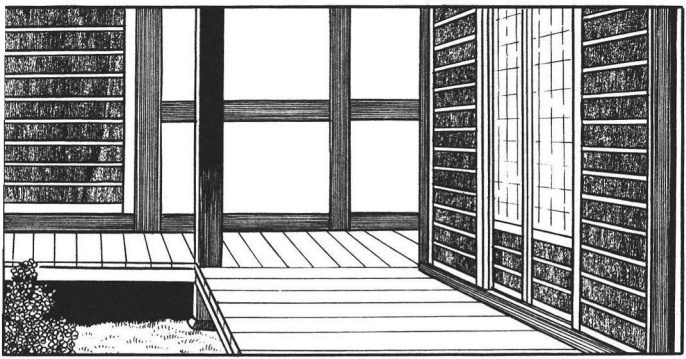
ところで辰千代どのも大きくなられたもう元服してもおかしゅうないのう

元服？

元服するということはのう　もう大人になったということなのじゃ

ふーんおれが大人……






なにっ！
辰千代君が
元服なされたと
はい
そして
松平忠輝を
名乗られました


それで
大殿からは
何か*沙汰は
あったか


はい　元服を祝って
下総佐倉五万石を
与えられ　上総介に
任ぜられました

*沙汰（しらせ、命令、指図）


佐倉五万石……
他の兄弟に比べ
低いのう……
それで
いや忠輝さまは
どうなされている
辰千代……
あいも変わらず
江戸城を走りまわり
周りの者を困らせて
おりますようで
そうか
ご苦労であった
また何か
あったら
知らせてくれ
ははっ


よし！　わしの手で忠輝どのを大大名にのしあげてみせる
五万石や十万石では旗印にもならぬ
まず手初めに川中島十二万石じゃのう
大久保長安は石見銀山の奉行になってからその頭角を現した
当時　鉱山は縦穴式であったが　長安は横穴式に変えた
縦穴式は水が出ると掘れなくなるからである

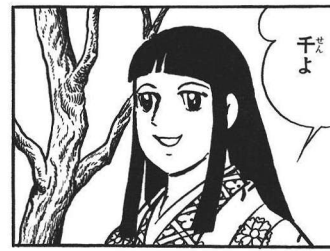

その結果　年間
数百貫にすぎなかった
銀の採掘量を
三千六百貫にして
みせたのである
家康は当時の日本で
考えられないような
数字に驚いた


家康の信頼は
厚くなり
長安は次々と
重用されていった


ピヨ〇〇〇---
笛の音は悲しい
音色であった
休賀斎への
挽歌であった
叔父さま
？


お前は誰だ


叔父さま
わたしもそこへ登らせて


千よ


千って……？
千姫か……


おれのことどうして知っている
だって叔父さま有名だもの

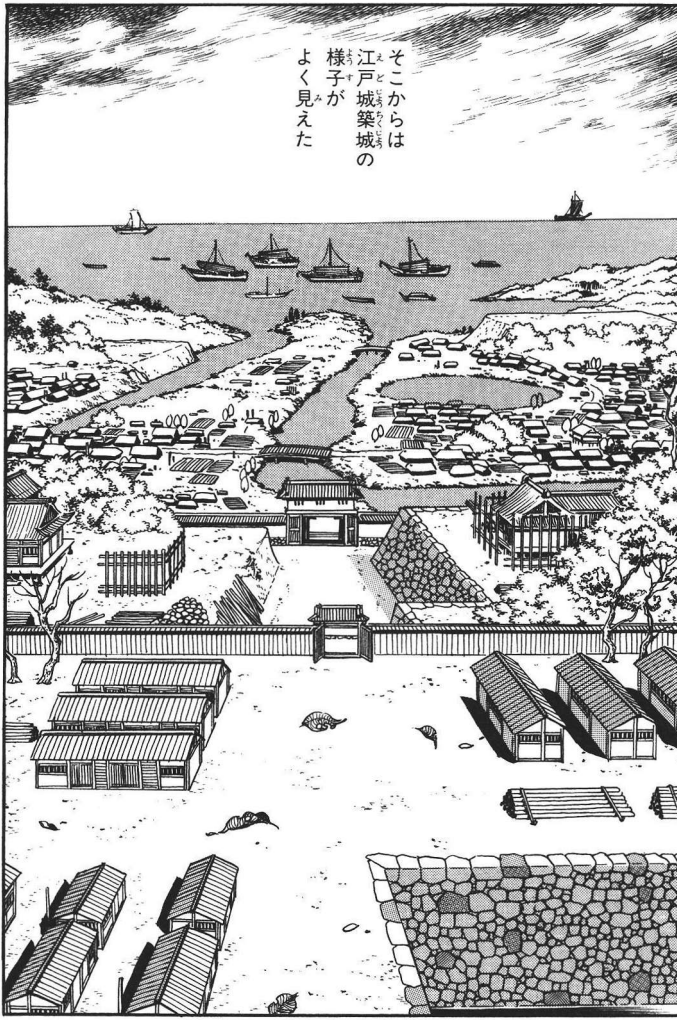

ねえ
わたしも
そこに行きたい
千姫は秀忠の
長女で　この時
六歳であった
フッ
すごい
やっぱり
鬼っ子だわ
あの上に
登りたいのか
うん
お願い




よし
背中にしっかり
しがみつけ
うん


ほら
よく見ろ




そこからは
江戸城築城の
様子が
よく見えた


ヒィ
恐い
降ろして
なんだ
登らせろと
いったり
降ろせといったり
どちらなんだ
恐い
降ろして！
じゃ
恐くないように
してやるよ
？


キヤア
ヴィッ
千姫さま
どこに
おられます
千姫さまーっ


おおっ
ひえっ！
な なんと
いうことを！
忠輝(ただてる)さま
なんということを
なされます


お願いです
降ろして
くださりませ


キャ


わたしたちが
きついお叱りを
受けまする
なにとぞ……
なにとぞ……


その騒ぎで
警護の武士までが
とんでくる始末と
なった

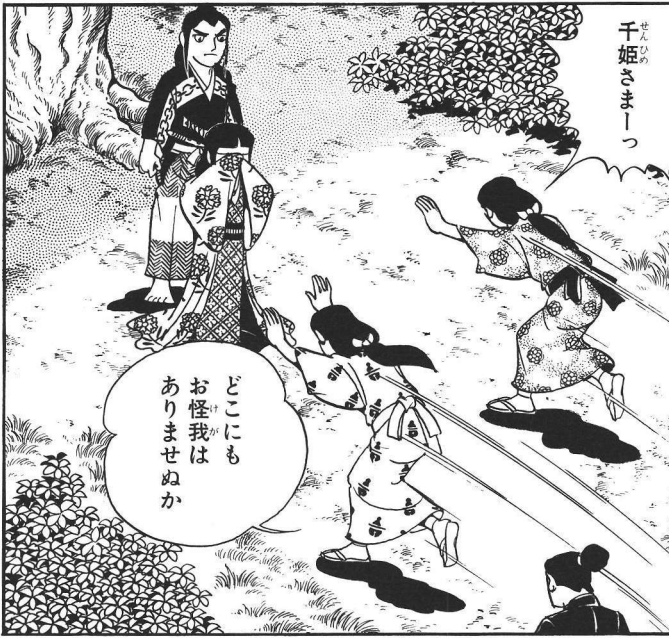

ヴ


なんだ
ちょっと　木に
登ったぐらいで
……

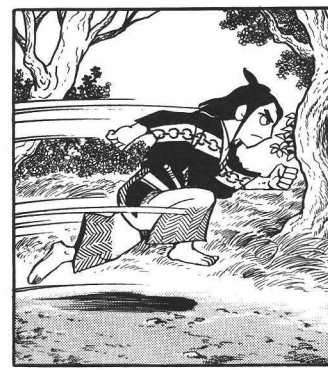



エーン
エーン




千姫さまーっ
どこにも
お怪我は
ありませぬか


ばーか




なに！
忠輝がお千を
木の上に……
はい

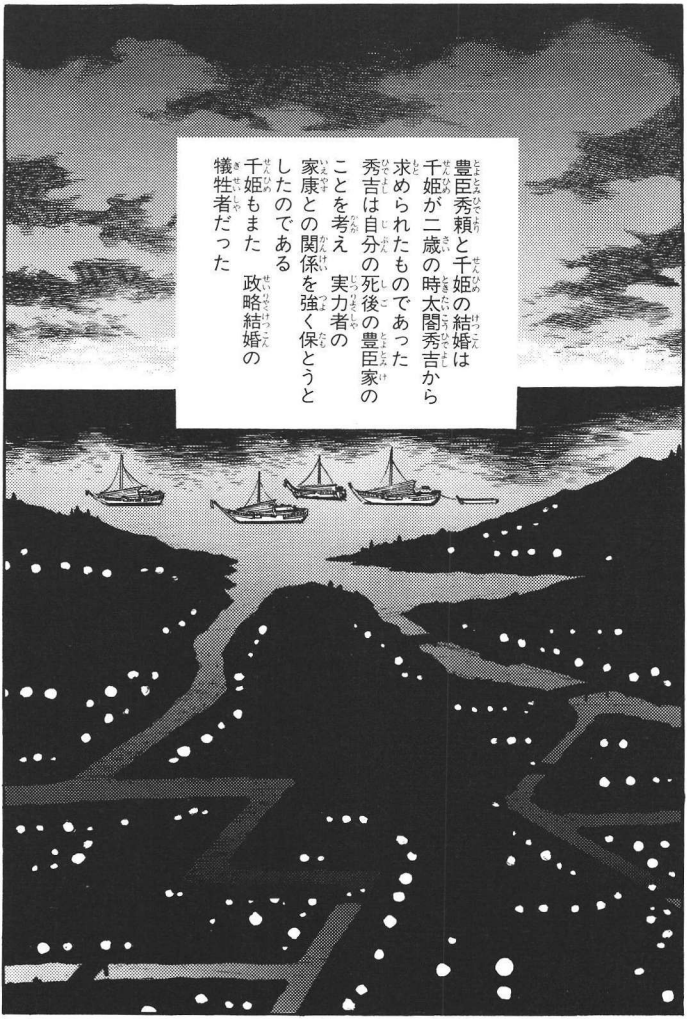

忠輝め
元服したとたんに
色気づきおった
殿！
笑いごとでは
ありませぬ
お千は来年には
豊臣秀頼公の
もとに輿入れする
のでござりますよ
そ それは
よく承知
いたしておる
もし お千の身に何か
あったら
大殿（家康）が一番
お困りになるのでは
ありませぬか
そうなったら
世継としての殿の
立場もおかしゅう
なりませぬか

大殿は来年にも
征夷大将軍に就任する
ことが内定している
豊臣家の家老の一人で
あった大殿が豊臣家を
さしおいて武家の棟梁
になることなど
大坂の姉上(淀君)が
認めぬ　そのため約束
通り　千姫を嫁がせ
大坂を安心させるのだと
申されたのは　殿で
ございまする

その通りじゃ
故太閤秀吉公との
約束を　しかと守り
徳川　豊臣が親戚となり
豊臣家に対し
他意のないことを
見せるのじゃ

ならば
あの乱暴者の
忠輝など近づけて
もし　何かあったら
どうなされます

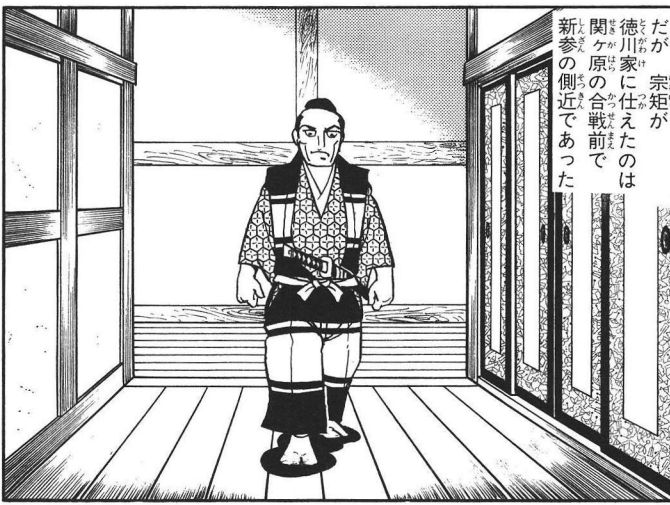
わかった
お千に忠輝を
近づけぬよう
なんとか手を打とう


豊臣秀頼と千姫の結婚は
千姫が二歳の時太閤秀吉から
求められたものであった
秀吉は自分の死後の豊臣家の
ことを考え 実力者の
家康との関係を強く保とうと
したのである
千姫もまた 政略結婚の
犠牲者だった

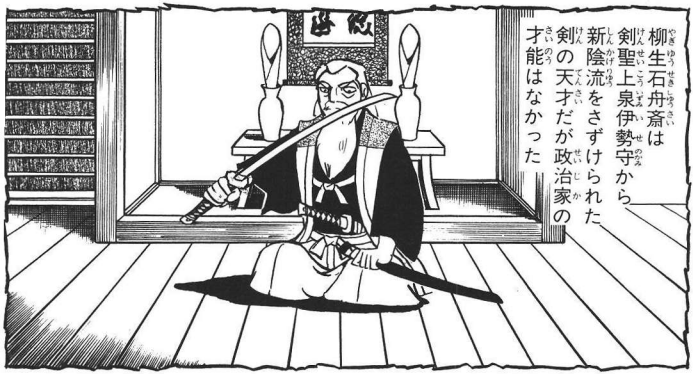
柳生宗矩（やぎゅうむねのり）

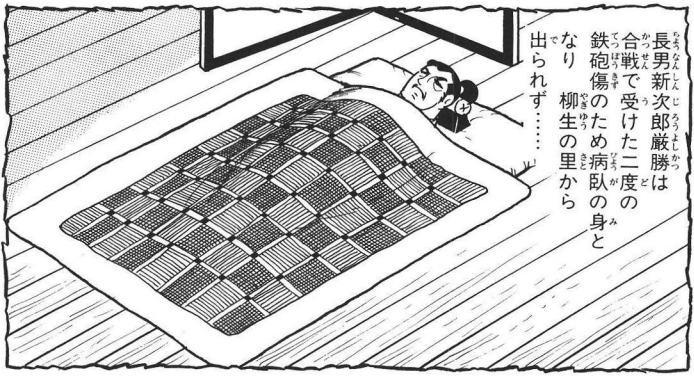



柳生宗矩は
秀忠の兵法
指南役である


だが 宗矩が
徳川家に仕えたのは
関ヶ原の合戦前で
新参の側近であった

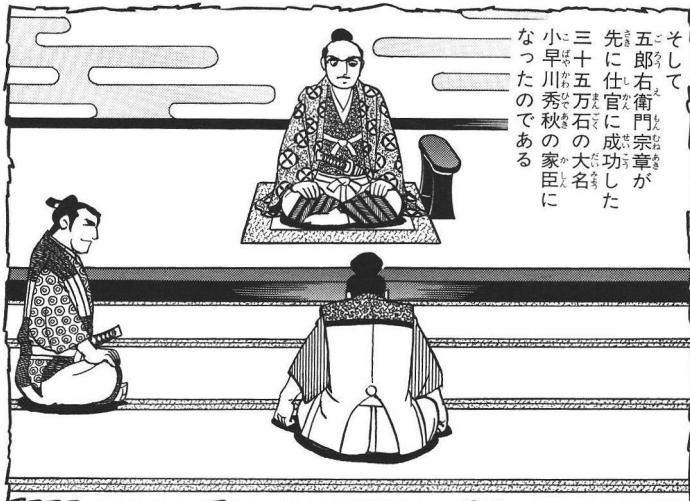

柳生一族は土豪出身の
小武将で　自立するだけの
力はなかった　常に誰かの
配下に属していなければ
生き残っていけなかった
そのため　松永弾正に仕え
たり　筒井順慶に仕えたり
しているうちに　天下の
時流に乗り遅れ　誰からも
禄をもらえず　柳生の里に
ただの土着人として暮らす
ようになってしまった

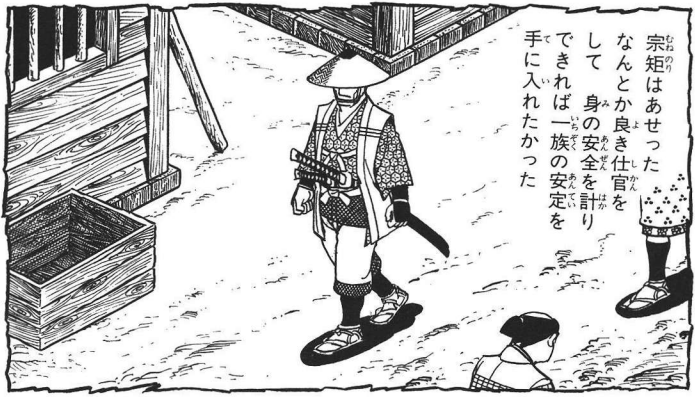

柳生石舟斎は
剣聖上泉伊勢守から
新陰流をさずけられた
剣の天才だが政治家の
才能はなかった


長男新次郎厳勝は
合戦で受けた二度の
鉄砲傷のため病臥の身と
なり　柳生の里から
出られず……


二男久斎
三男徳斎の二人は
口べらしのため
僧となった


四男の五郎右衛門宗章と
五男の又右衛門宗矩は
良き主君を求めて
諸国を放浪していた


そして
五郎右衛門宗章が
先に仕官に成功した
三十五万石の大名
小早川秀秋の家臣に
なったのである


宗矩はあせった
なんとか良き仕官を
して　身の安全を計り
できれば一族の安定を
手に入れたかった


この時　家康が
上杉討伐を
開始した

宗矩は　これが
石田三成に挙兵させる
ための家康の陽動作戦
と見抜いた

宗矩は　ただちに
家康の本陣に駆けつけ
柳生一族でお味方いた
すと申し出た
家康は喜んだ
兵法者として柳生の名は
天下に名高かった
からである

宗矩はこの時から
徳川家に仕えた
宗矩には父にない時流を
見る目があった

剣技より政治家として
の才能があった宗矩が
後に　一万石の大名に
なったのは
その政治家としての
業績であった

＊陽動作戦（真の目的をかくすために別の行動をとること）


おう
宗矩
もっと近う
お召しに
ござりまするか

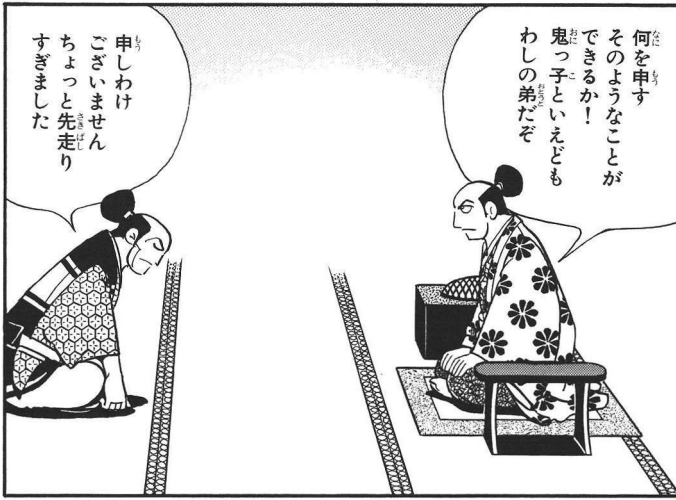

内々で
鬼っ子について
相談したい

宗矩はすでに千姫と忠輝の騒動を聞いていて　内心ではつまらぬことと騒いだ連中を軽蔑していた









しかし秀忠はまんざらでもなさそうであった
自分の命令一つで何人であろうと暗殺を即座に引受けてくれる部下がいることは悪い気持はしなかった

では
どのように……

千姫の輿入れまで
鬼っ子を千姫に
近づけとうない！
怪我だな……それも
重からず軽からず……

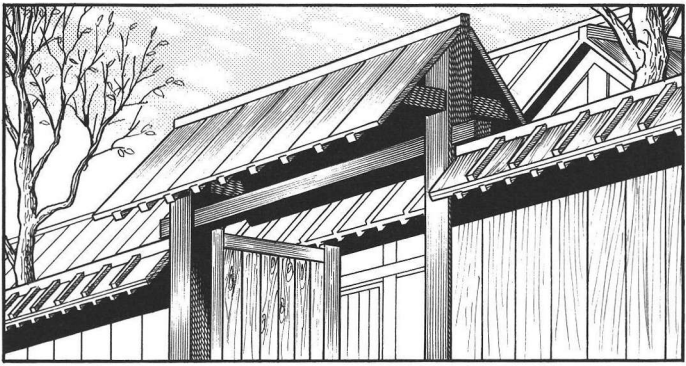
わかりました

そんなに簡単に申すな
鬼っ子は別式女を
いとも簡単に負かしたのじゃぞ


承知いたしておりまする
しかし 別式女と
柳生軍団を 同様の
ものと思われるのは
心外にございます
そ そうか


では
さっそくに
……


うむ




鳥居四郎右衛門！
鬼っ子に怪我を
させてもらいたい
それも軽からず
重からずという
程度だ
は……
？


知っての通り
千姫は来年大坂へ
輿入れなされる
それまで 千姫に
鬼っ子を近づけ
たくないのだ


しかし お二人は
まだ子供……
子供の遊びぐらい
は……
鬼っ子の遊びは乱暴
すぎるのだ もし万一
何かあったら秀忠公が
大殿(家康)に叱られる
千姫が無事 豊臣家に
嫁ぐことによって
徳川 豊臣は縁者
これで周りはまるく
治まる 千姫の身に
何かあっては天下に
ひびくのじゃ
大切な人質で
ござりまするな
四郎右衛門
よけいなことを
申すでない
は……

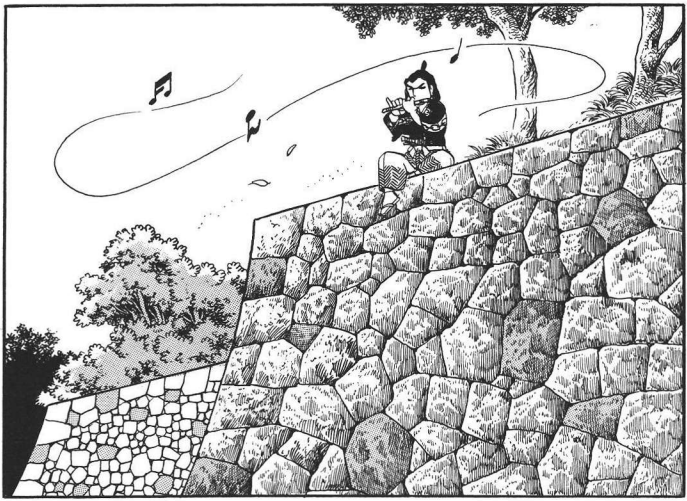

とはいえ　鬼っ子も
徳川家の第六子……
柳生が怪我をさせたと
わかれば一大事
それゆえ　顔を知られて
おらぬ者を柳生の里から
十名ほど呼びよせて
やるがよい

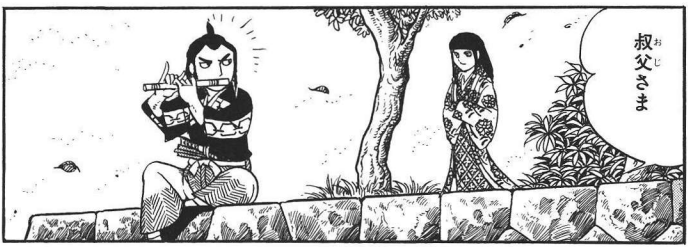

子供一人に
十名もで
ござりまするか


鬼っ子は剣も習わずして
別式女を三人も負かした
のだぞ　甘くみるでない


四郎右衛門　そちは
事を軽く考えているよう
だが　事はもっと複雑だ
わが殿秀忠公は
凡人の上　小心
それに
関ヶ原の合戦では
遅参するという大失態を
演じた　今や　世継と
しての立場も微妙だ
……


三河譜代の家臣団は
秀忠公がどうなろうと
その地位を失うことは
ない　だが柳生は違う
秀忠公が転べば柳生も
転ぶ　秀忠公が栄えれば
柳生一族も栄える
だから　どうしても
秀忠公に世継になって
もらわねば困るのだ
わかりました
柳生一族の運命に
関わるとあらば
肚をきめて
かかりまする
うむ
まず　江戸城の
地形を調べてから
かかれ　何事も
用心じゃ
宗矩は現在の
兵法指南役千石には
満石していなかった
家康の後を継げるか
どうかもわからぬ息子
の兵法指南役など
どれほどの価値があるの
かと疑問を持っていた



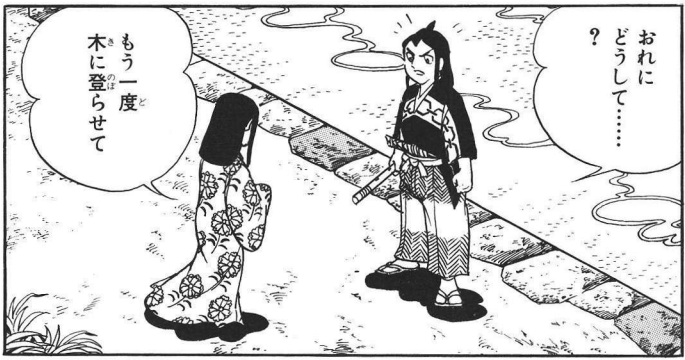

叔父さま


だって　みんな
お正月の準備で
忙しいんだもの


お千　また一人で
出てきたのか


だって
叔父さまに会いた
かったんだもの


しかし　姫の付人は
姫がいなくなったのを
知ったら困るぞ
前の付人は暇を出され
たと聞いたぞ


おれに
どうして……
？
もう一度
木に登らせて

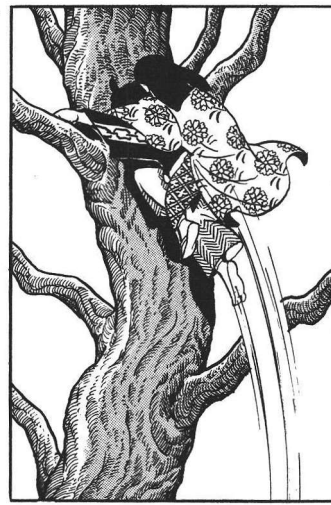

お前
あんなに恐い恐い
と泣き叫んだじゃ
ないか
あの時は
少しびっくり
したんだもの




ねえ　もう
泣かないから
もう一度木に
登らせて
本当に
泣かないか
うん
うん
うん
よし　じゃ
これっきりだぞ
しっかり背中に
つかまれ
やっぱり
叔父さま
やさしい
いくぞ
キャホー








どうだ
恐くなかったか
うん
鬼っ子が
ついてるもの


ここに　大きな
お城ができるのね
でも　千は大坂に
行くから見られない


ああ　でも
大坂城は日本一の
お城だそうだよ




どうして泣く？
泣かないって
約束だぞ
うん


恐くて涙が出た
のじゃないの……
なんだかさびしく
なって……


千
叔父さまのこと
大好き




ど どうして
どうしてか
わかんないけど
好き……


うん


千姫さま
千姫さま



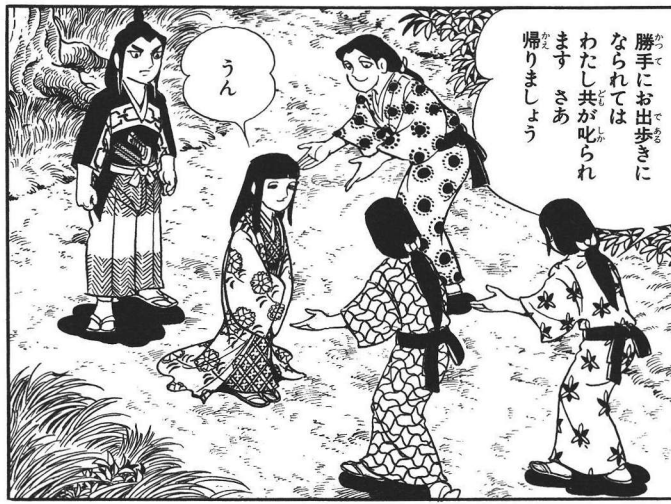

お千 また大騒ぎにならぬうちに降りよう

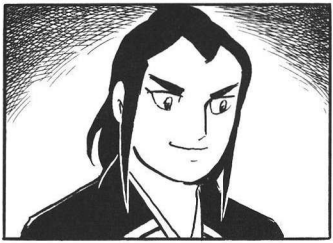

うん


あっ
千姫さま




こんな所に
おられましたか

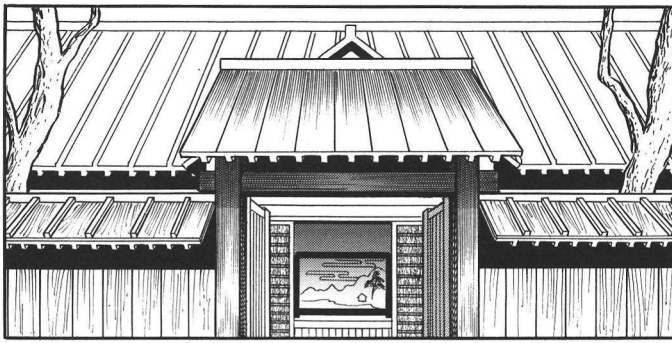

勝手にお出歩きに
なられては
わたし共が叱られ
ます さあ
帰りましょう
うん





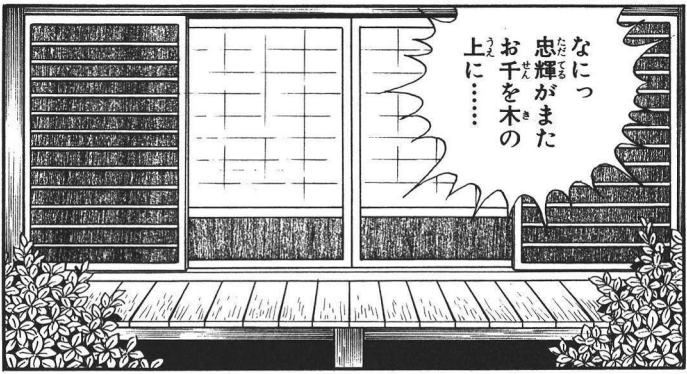


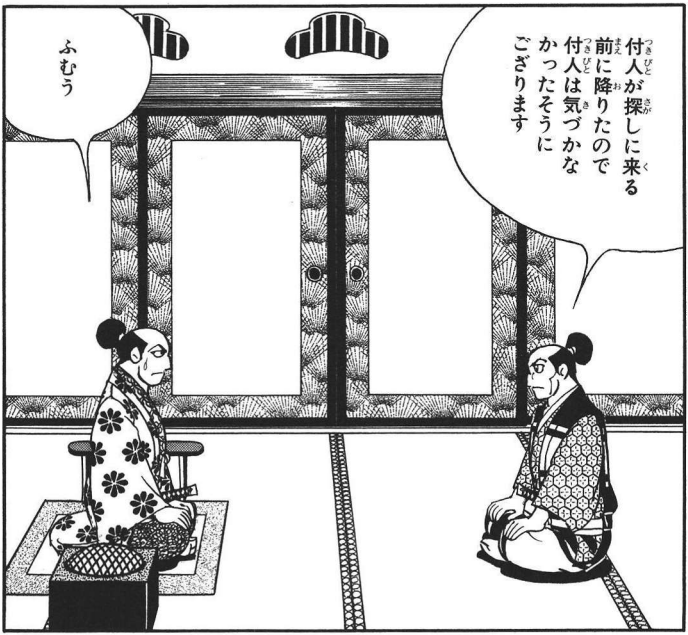

だが これを
江戸城の地形を
調べていた鳥居
四郎右衛門と
その配下に見ら
れていた




何！
鬼っ子がまた
千姫と木に
登ったと
はい
侍女たちが
現れる前に
降りたので
侍女は気づかな
かったようです

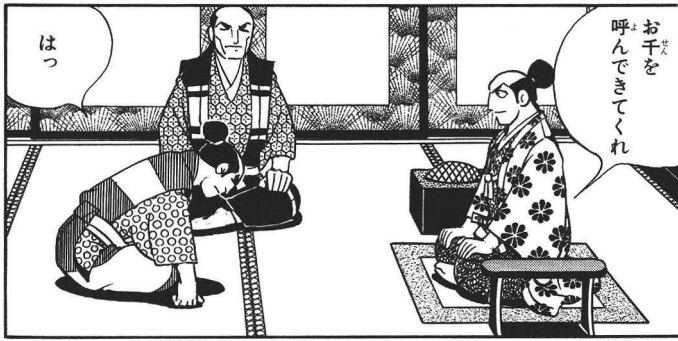

そうか 一応
殿に報告して
おいた方が
よいな

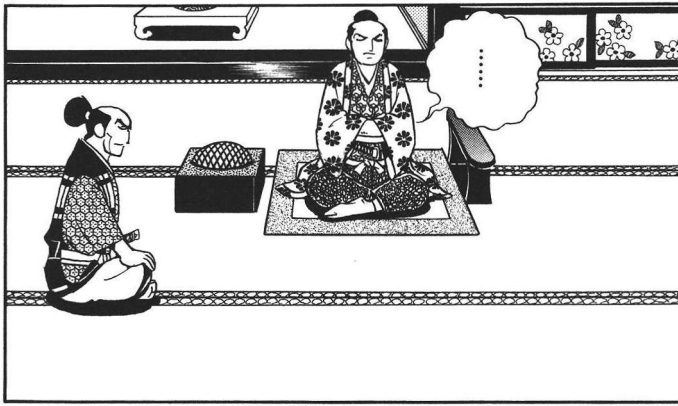

なにっ
忠輝がまた
お千を木の
上に……


付人が探しに来る
前に降りたので
付人は気づかな
かったそうに
ござります
ふむう


はっ


これ誰(だれ)か！
ポンポン


はっ
お千(せん)を呼(よ)んできてくれ


……


お千
今日は何をして
遊んだ？
あちこち
お城の中を
散歩したの
付人は忠輝と
一緒だったと
申しているぞ


じゃ
降りるところを
見られたのね
そうじゃ
あれね
叔父さまに
わたしがお願い
したの
どうして
そんなことを
頼んだ
わかんないけど
なんだか高い高い
ところに登って
みたかったの
それに　千は
叔父さまのこと
好き
どうしてじゃ
忠輝は鬼っ子と
呼ばれる恐ろしい
男じゃぞ


みんな 鬼っ子
鬼っ子と悪口いうけど
叔父さまは恐ろしい人
じゃないわ それに
なんでもできるし
素敵な叔父さまよ
父親にとって最初の
娘は最高の恋人である
しかも 父親は異常な
ほど嫉妬深い男になる
のが世の常だ
千姫の忠輝礼賛は
その嫉妬心に火を
つけることになった
お千よ
お前は女の子じゃ
姫がそのような
ことをするのは
はしたないことなの
じゃ これからは
絶対そのような
ことをしては
ならぬぞ
お父さまが
駄目と
いわれるなら
いたしませぬ


でも
叔父さまの
笛を聞いたり
するのは
いいでしょ
うむ


もう
いいから
行きなさい
はい


……



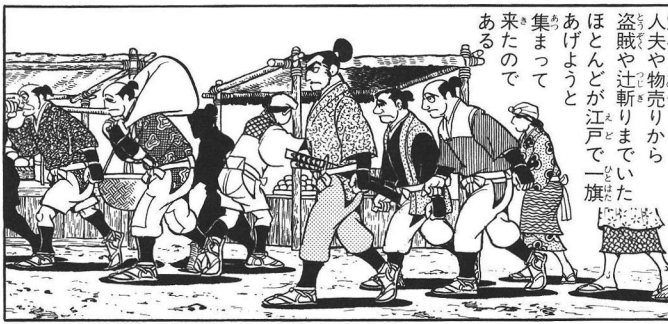

宗矩よ
即刻
忠輝を襲え！
手にあまれば
斬ってよい
はっ

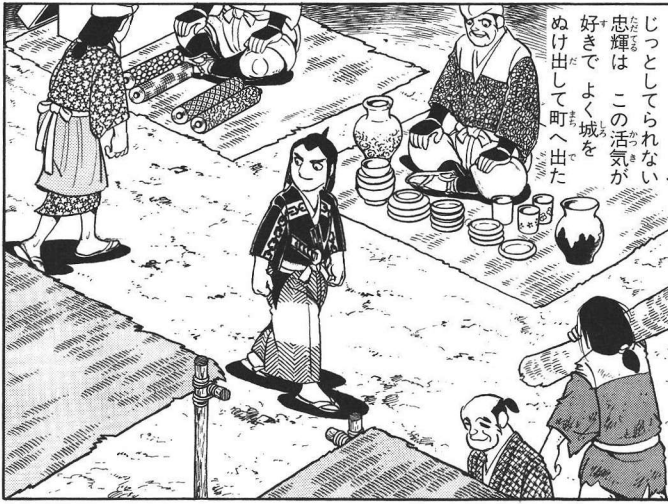

今の千姫の置かれた
立場を考えると
父上も忠輝を
折檻するつもりで
あったと言えば
認めてくださるで
あろう
いざという時は
宗矩に軽い仕置を命じ
たのに 行き過ぎて
殺してしまったと
宗矩とその部下に
責任を押しつければ
よい

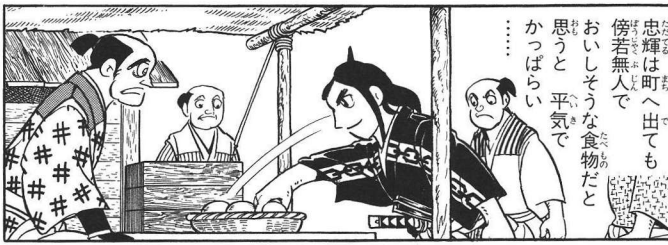
暗殺団（あんさつだん）

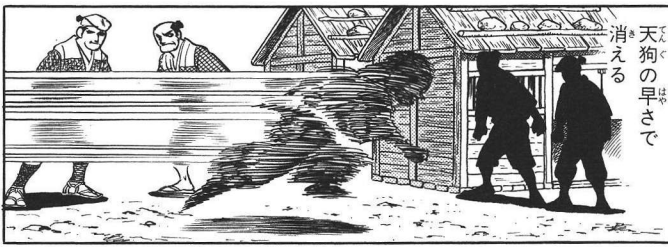



開発途上の江戸の
町はいろんな人間が
集まって来て
ごったがえしていた

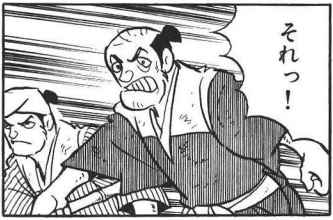

人夫や物売りから
盗賊や辻斬りまでいた
ほとんどが江戸で一旗
あげようと
集まって
来たのである


じっとしてられない
忠輝は　この活気が
好きで　よく城を
ぬけ出して町へ出た

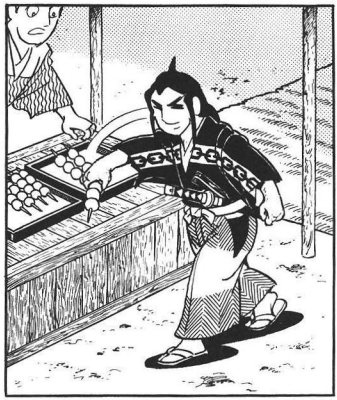

忠輝は町へ出ても
傍若無人で
おいしそうな食物だと
思うと　平気で
かっぱらい
……


天狗の早さで
消える







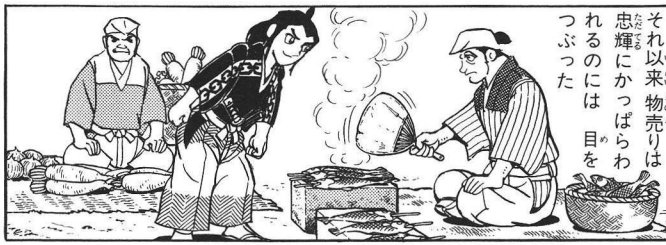




*業を煮やす（いまいましくて、しようがない）


ビュッ
ガ"
ヒュン
ヒ"ッ


うう っ
アチチチ
ポイ


それ以来物売りは
忠輝にかっぱらわ
れるのには 目を
つぶった


酒
とられるものは
にぎり飯一つとか
焼魚一匹とか
値にすれば取るに
足りぬわずかな
食い物だけだった
からである


お陰で「天狗の若殿」と
いえば江戸の盛り場で
誰一人知らぬ者のない
有名人になっていた
もっとも 本人はそんな
こととは 知らない


さあさあ
お立合い！
これから始める
剣呑みは　唐から
渡ってきた秘芸だよ
お気に召したら
銭を投げておくれ


さあさあ
よくごろうじろ
この男が剣を
呑みこんで
しまうのじゃ


はいはいはい
一つ間違えば体の
中に突き刺さる
命を賭けての
荒業じゃ



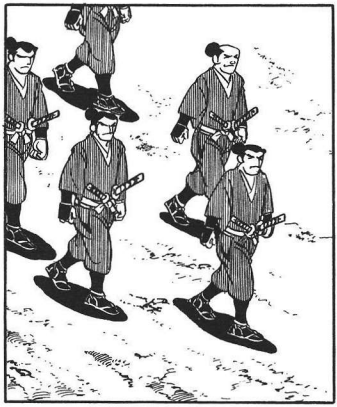

おおっ
すごい


ニコリ


さあさあ
満足なされたら
銭をくだされ
これだけの芸の
只見はありま
せんぞ


お願いします

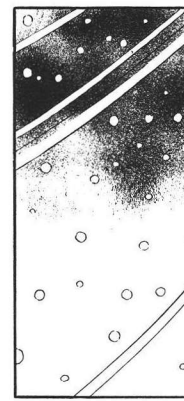

あんた
つけられてるよ
右に五人……
左に五人……
どうして
そんなこと
教えるんだ
心配してやったんじゃ
ないか　悪かったの
かい!?
いや
悪くないよ
有難う
気をつけた
ほうがいいよ



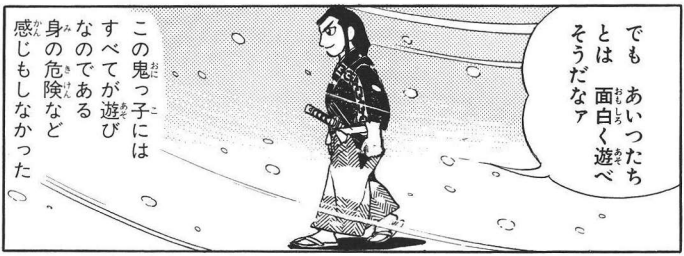


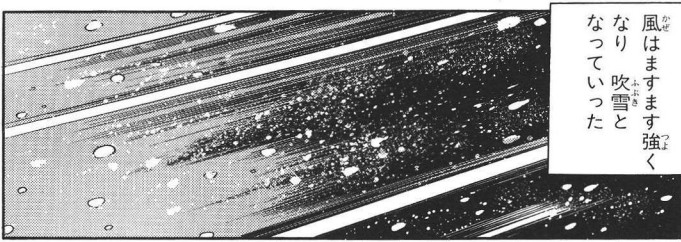

つけてくる……
おれに何の用が
あるんだ


雪だ



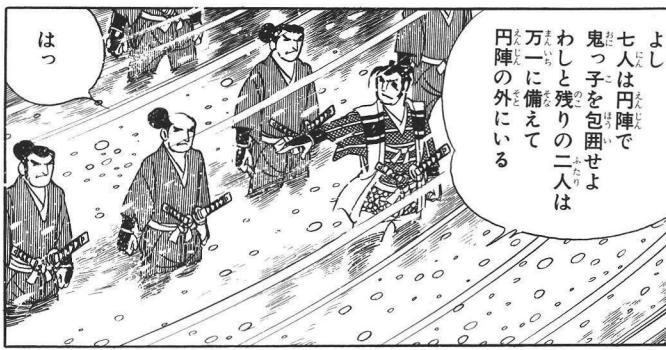

風も出てきたし
吹雪になり
そうだな
どうしよう
城に帰るか

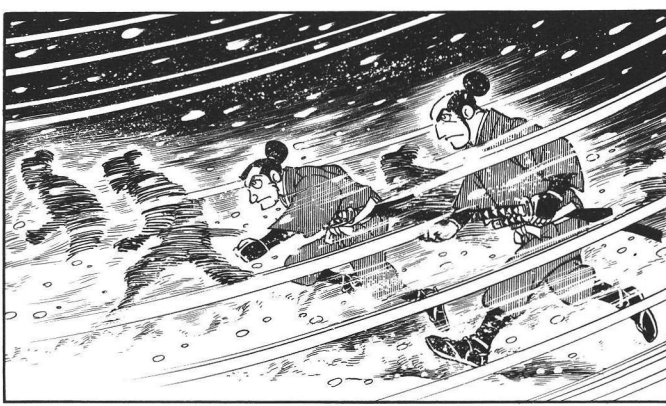

でも あいつたちとは 面白く遊べそうだなァ
この鬼っ子にはすべてが遊びなのである 身の危険など感じもしなかった


風はますます強くなり 吹雪となっていった


だが この鬼っ子は 裏柳生の殺人剣の恐ろしさを知らず 遊びの道を選び わざと人影のない方向へ進んだ
ヒュウ


いいぞ この吹雪では
目撃者も現れまい
殺して海に投げこめば
だれの犯行かも
わからなくなる


よし
七人は円陣で
鬼っ子を包囲せよ
わしと残りの二人は
万一に備えて
円陣の外にいる
はっ

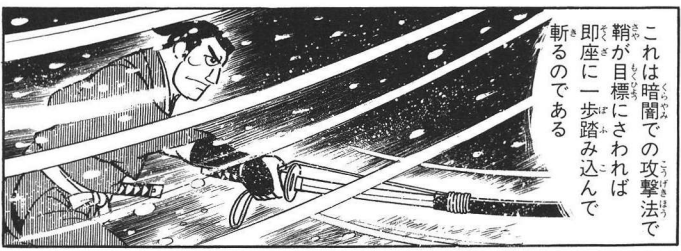



わあ
これじゃ一寸先も
見えないや






柳生軍団は鞘を切先に
ひっかけて掃くように
しながら包囲を
せばめた


これは暗闇での攻撃法で
鞘が目標にさわれば
即座に一歩踏み込んで
斬るのである


いたっ
ビュン
ビュン
うわっ
ボト


ばーか


忠輝は簡単に
包囲を突破した



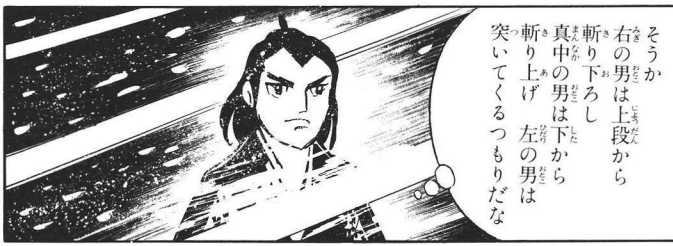

だが 円の外には
鳥居四郎右衛門と
柳生衆が二人
万一に備えていた






チャリ




そうか
右の男は上段から
斬り下ろし
真中の男は下から
斬り上げ　左の男は
突いてくるつもりだな


シュッ

だが その一瞬
忠輝は驚くべき
跳躍力で
まっすぐ上に
跳び上がった

三人の太刀は空をきり
鳥居四郎右衛門は突を
入れた配下の両腕を
斬りとばしていた

忠輝は上段から
振り下ろした配下の太刀の
上に跳び下り

鉄扇で頭蓋を
一撃していた


それは
まばたきする間の
出来事であった
この時になって
鳥居四郎右衛門は
この子供が とんでも
ない怪物だと初めて
気づき 背筋に
寒気をおぼえた

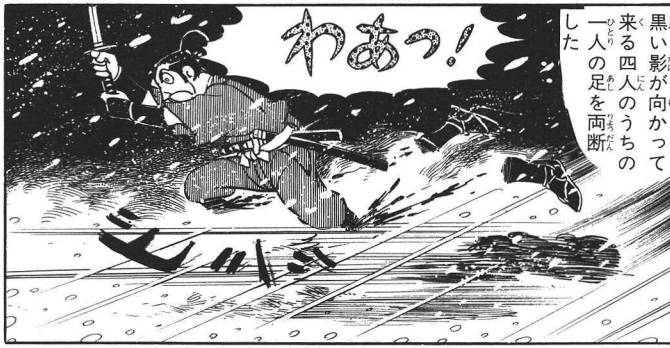

このままでは
我等のほうが
全滅する


ヨヨヨ
捨！
「捨」とは自分の命を捨て相討ちでも相手を殺せという命令である


四人が四方から突進した
斬られるのを覚悟で
四人同時に太刀を
振り下ろすのである
どんな名人でも四本の
太刀を同時に
防ぎきれない


忠輝は獣の
本能で危険を
さとった
忠輝から遊びの
表情が消え
怒りの表情に
変っていった


忠輝は四つんばい
になって 疾走
しはじめた
低い方が
視界から消えて
有利だからである



黒い影が向かって来る四人のうちの一人の足を両断した



その後ろに後詰めの伊賀者が二人いた

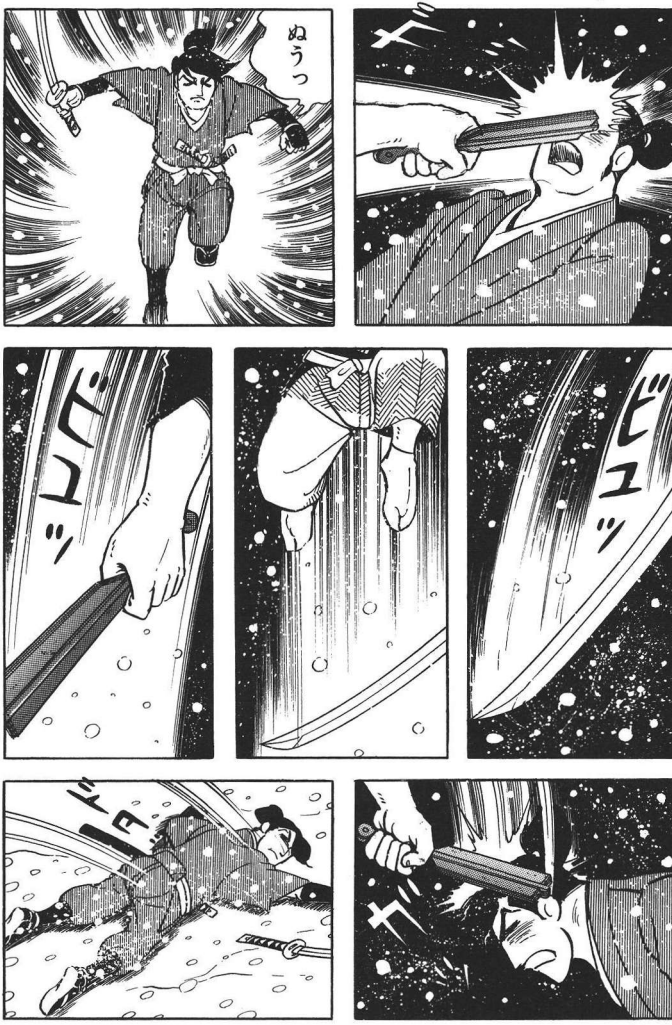




忠輝は獣のように その二人にせまった


ビシッ
二人は　何に襲われたのかわからぬままたおれた
ドタ
おおっ


早く傷の手当をしないと死んでしまうぞ
ぬうっ
ドカ!!

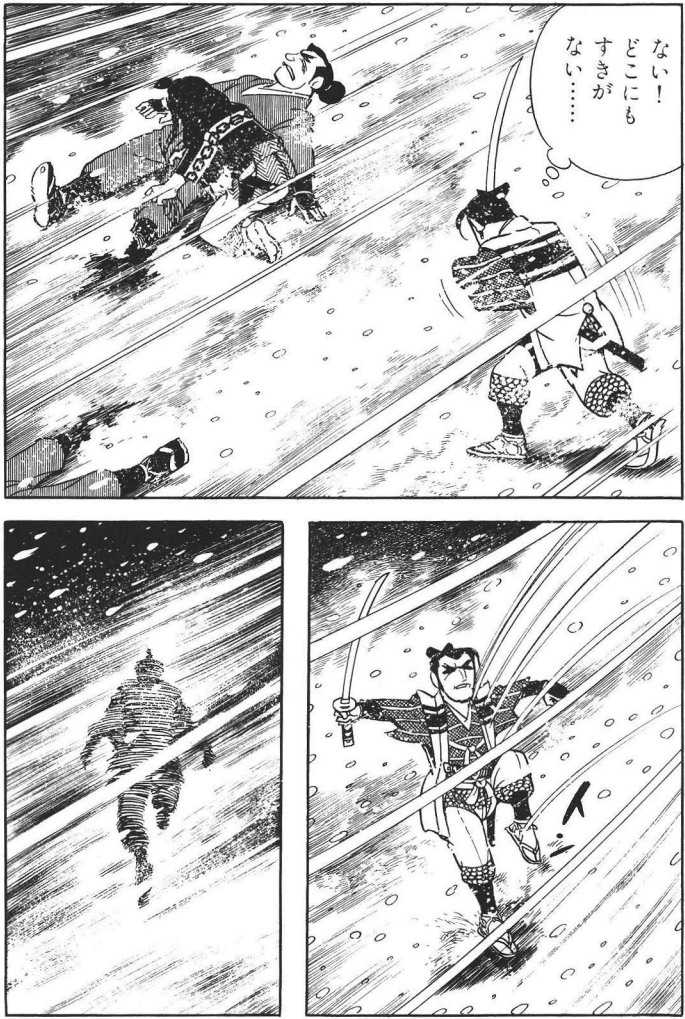

ぬうっ
ビュッ
ドサ


柳生とは
こんなものか

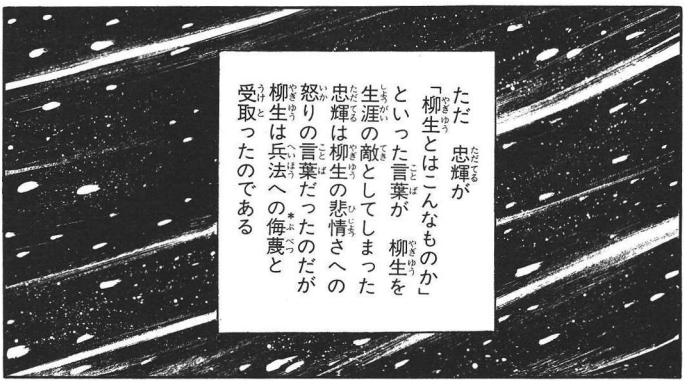



我等の
素性を知って
いる……


よせ
このままじゃ
死んじまうよ


ない！
どこにも
すきが
ない……





＊侮蔑（ぶかにして、軽く見ること）




なにっ
失敗したと
はい
その場で切腹しようと思いましたが
まずは報告をと思い
生き恥をさらして
帰って参りました


なにい！


ここで切腹しお詫びいたします

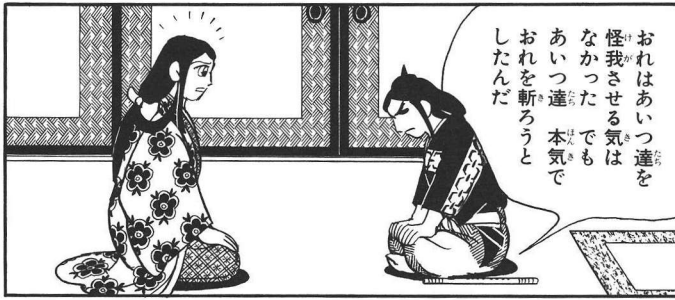

これほどの失態を
犯して　死んで
責任のがれをしよう
というのか！
いえ
そのような
気持では……
メゴ
お前が
死ねるのは
あの鬼っ子を
首尾よく殺した
時しかない！
ボカッ
ボカッ


忠輝
あっ！
母上


何かあったのですか
なにが……
?
忠輝！
母にかくしても無駄です
ここ二三日
あなたの笛の音は
乱れています
なにを怒っているのです
わかるのか
わたしには
あなたの喜び
悲しみ 怒りの
感情はすぐに
わかります


さあ　何が
そんなに腹が
立つのか
いいなされ！
柳生がおれを
襲った


なんですと


おれはあいつ達を
怪我させる気は
なかった　でも
あいつ達　本気で
おれを斬ろうと
したんだ


柳生が勝手にそのような
ことをするはずがない
お茶阿は　その裏に
秀忠がいることは
すぐにわかった

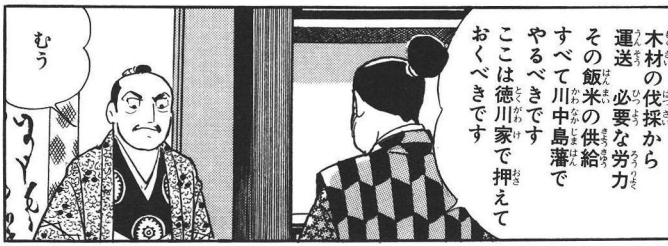

殿に訴えなければ……
いや　これは千姫のことがからんでいる
千姫は　今　天下にとって重要な姫……
秀忠どのに忠輝を仕置しようとして　柳生をさしむけたといわれれば秀忠さまの行為をお認めになるであろう
忠輝
もう　あまり勝手に出歩いてはなりませぬ
……

木の上の初恋



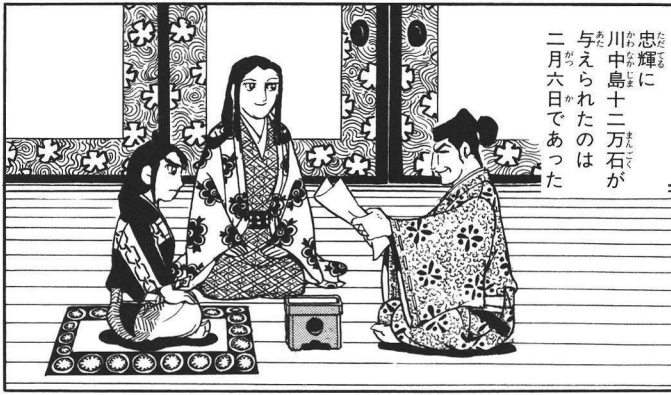

慶長八年(一六〇三)を
迎えた
忠輝は十二歳となった
この頃 家康は
伏見城で多忙な日々を
送っていた

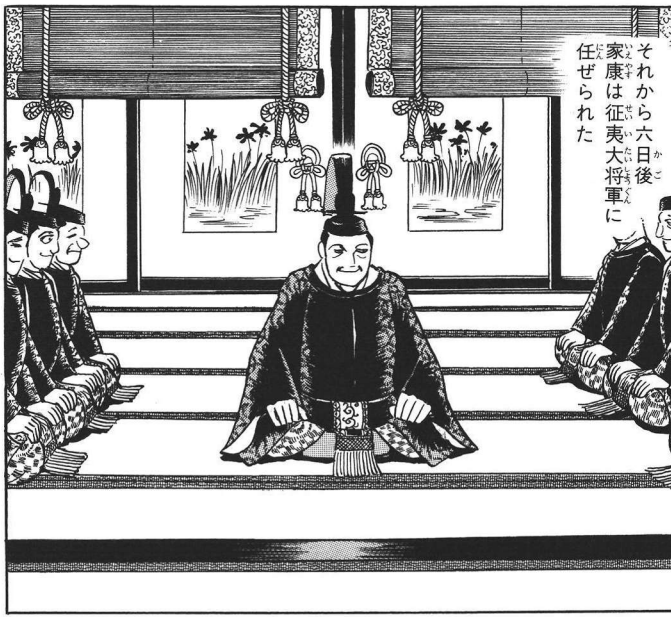

なにっ 忠輝を川中島十二万石の領主にせよと申すのか
はい 木曽谷の無尽蔵ともいえる木材は これから徳川家の大きな財産となりますこれを他の大名にまかせることはありませぬ

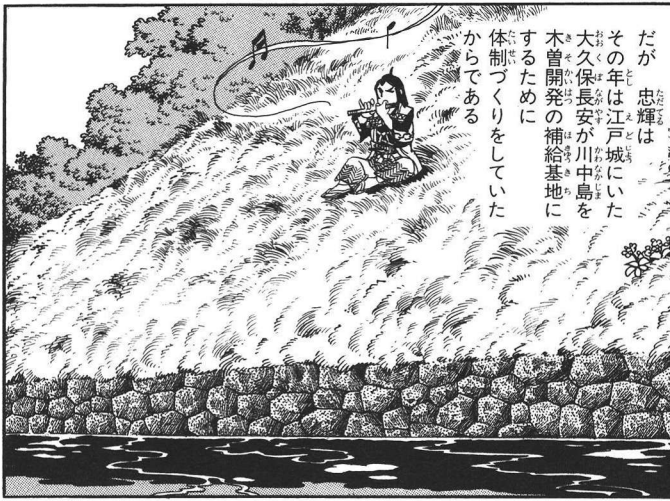

木材の伐採から運送 必要な労力その飯米の供給すべて川中島藩でやるべきですここは徳川家で押えておくべきです
むう


御曹子や徳川譜代の臣はすべて重要な地についておりまする 残っているのは 忠輝さまだけ……それゆえ 忠輝さまをここの領主にするのがふさわしいと思いまする


ふむう　確かに
もっともな話だが
忠輝をのう……
忠輝さまでは
何か不都合でも
……
いや
そんなことは
ないのだが……
いろいろ乱暴な
話も耳に入って
いるでのう
忠輝さまは
まだ　いたずら
盛りの年齢に
ござります
そうよのう
よし　忠輝に
川中島十二万石を
与えよう　ただし
そちが付家老となり
よく　監督いたせ
ははーっ


忠輝に
川中島十二万石が
与えられたのは
二月六日であった

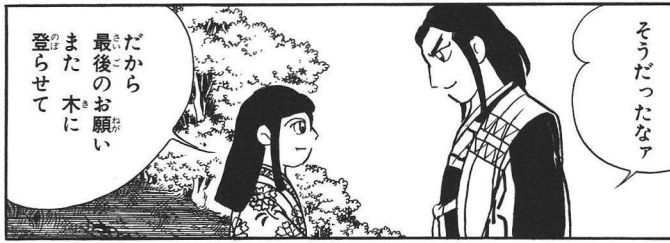

それから六日後
家康は征夷大将軍に
任ぜられた


だが　忠輝は
その年は江戸城にいた
大久保長安が川中島を
木曽開発の補給基地に
するために
体制づくりをしていた
からである


叔父さま
あっ
姫……

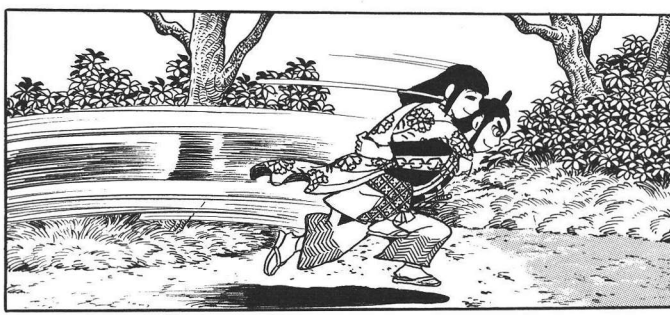

また　付人を
まいてきたのか

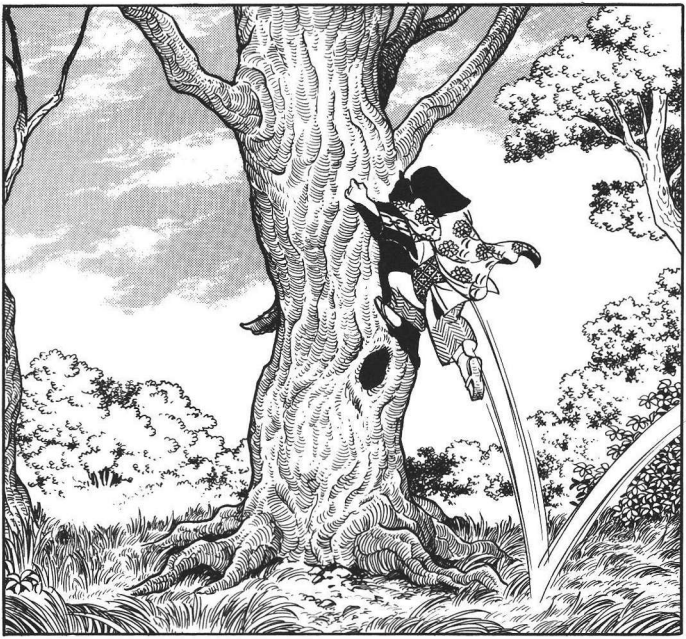

だって　千は
明日　大坂に行くの
もう　叔父さまに
会えないもの


そうだったなァ
だから
最後のお願い
また 木に
登らせて

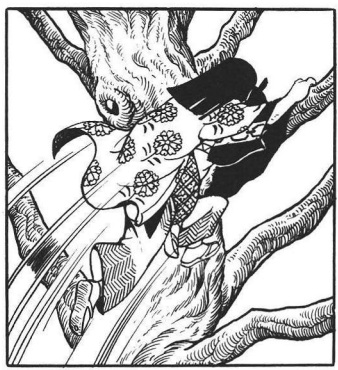

姫は高い所に
登るの
好きなんだな
なんだか
胸がすーっと
するの


よし
背中につかまれ









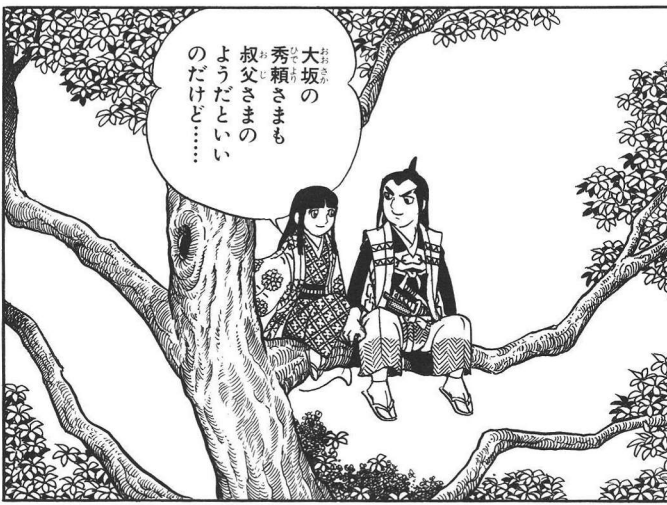

ほら
ついたぜ


やっぱり
いいわ


枝をゆすって
やろうか
面白いぜ
ほんと？
じゃ
やって
キャッ
ははは
キャッ
キャッ
付人が見たら
気絶しそうな
光景であった

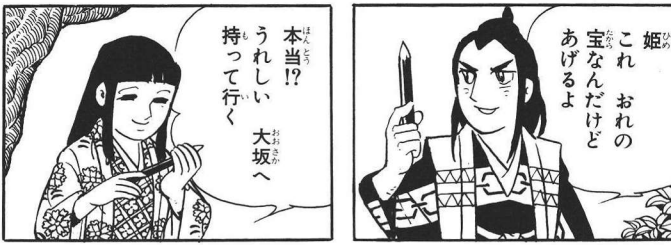

どうだ
面白かったろう

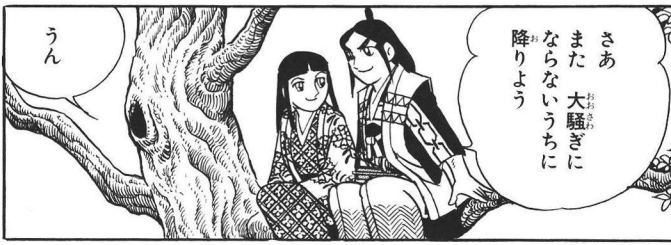

うん ハラハラ
ドキドキしたけど
面白かった

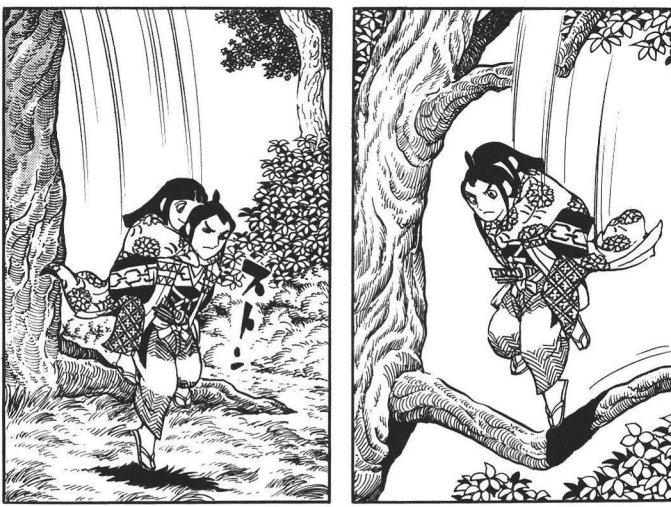

大坂の
秀頼さまも
叔父さまの
ようだといい
のだけど……


千は大坂へ行っても
叔父さまのこと
忘れない


ピヤ
ケケー


姫
これ　おれの
宝なんだけど
あげるよ
本当!?
うれしい　大坂へ
持って行く

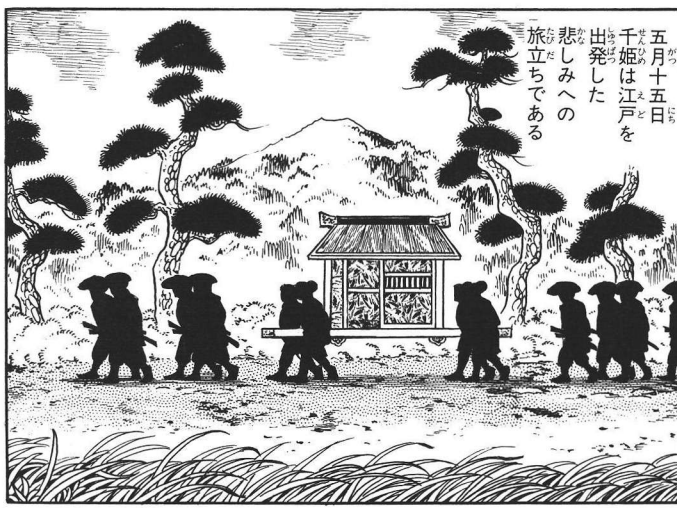

さあ
また　大騒ぎに
ならないうちに
降りよう
うん

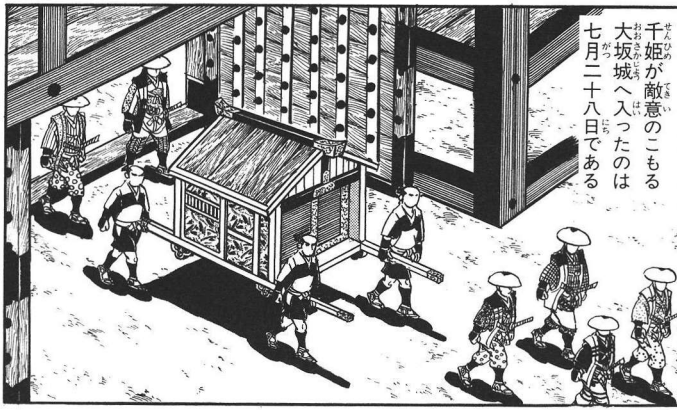

スト!




……


姫
達者でな
叔父さまもね


五月十五日
千姫は江戸を
出発した
悲しみへの
旅立ちである


千姫が敵意のこもる
大坂城へ入ったのは
七月二十八日である

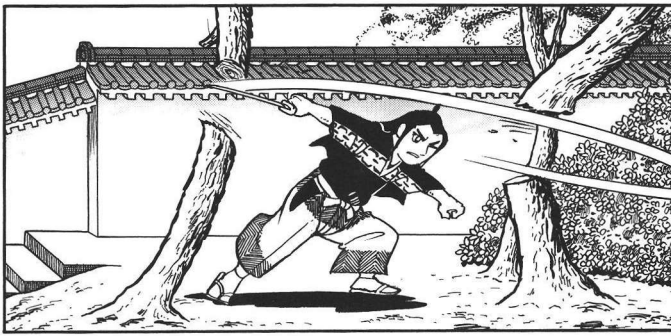

この婚儀は　豊臣家の
一家老であった家康が
豊臣秀頼をさしおいて
征夷大将軍に就任したことに
対する淀君の怒りを和らげる
ためのものであることは
誰の目にもわかった


大坂城内では賛否渦巻き
淀君の側近は千姫を殺そうと
息巻き　片桐且元は「家康に
豊臣家を攻め滅す絶好の
口実を与える」と必死に
この暴挙を阻止した


千姫は　これ以後
大坂落城の日まで
七歳から十九歳までの
十二年間の青春を
悲しみと辛苦の中で
暮らしていくのである

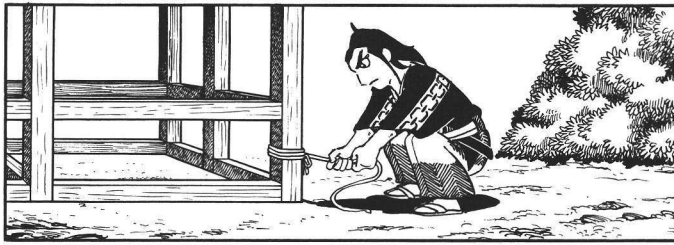
千姫がいなくなると
忠輝の粗暴は
目にあまるように
なった

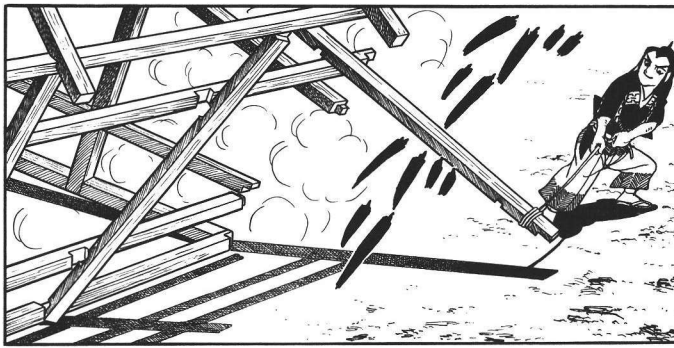


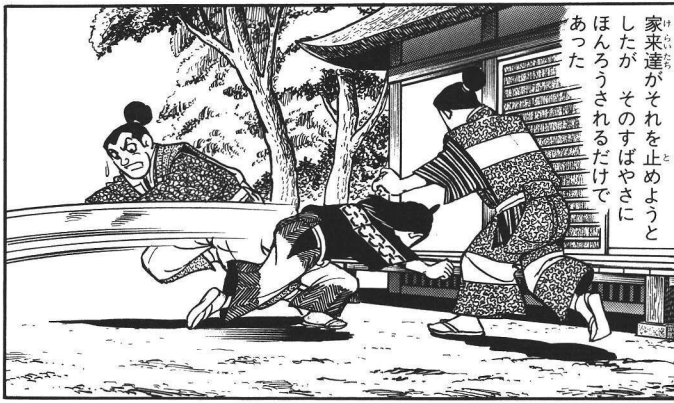


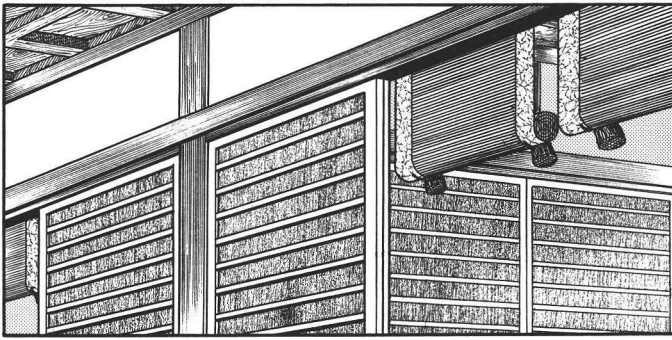









家来達がそれを止めようとしたが そのすばやさにほんろうされるだけであった



のう 花井三九郎
近頃の忠輝の乱暴は
目にあまる
十月には大殿が江戸に
お帰りになられる
このことが耳に入れば
大殿はお怒りになり
せっかく手に入れた
川中島十二万石を
失いかねませぬね

はい
それがしも
それを
心配いたして
おりまする

何か　乱暴を
押さえる手は
ないものかねえ

千姫さまが
原因のように
思えまする

卑俗な手ですが
ここは千姫さまに
かわる女子を
与えてはいかがに
ございます

しかし
あの子は
十二歳ですよ

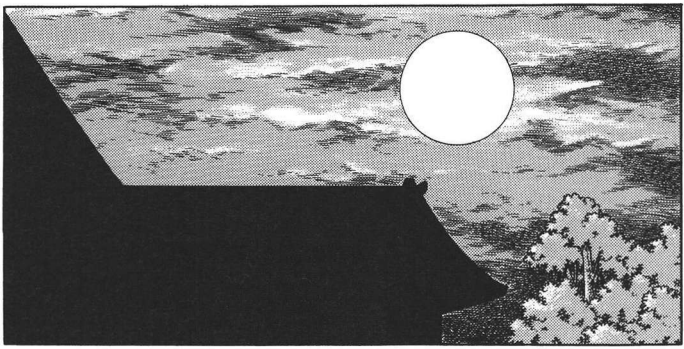
それがしにも
十二歳の頃はござり
ましたが　女子の
肌が気になりました

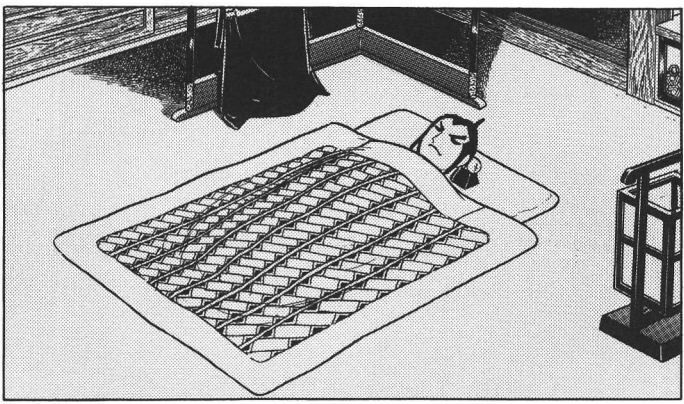
そなたが
わせ(早熟)だった
のではないか

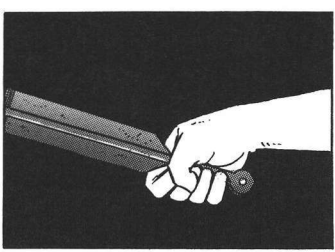

いえいえ
同じ年頃の者が
ほとんど
そうでした
あの子がもう
そんな歳に
なったのですか
どのような女子が
よいのじゃ
わらわにはわからぬ
同じ年頃か
二三歳上でしょう
あまり 歳がかけ離れ
ても……といって
未通女では困ります
むつかしい
ことを申す
では そなたが
選んでおくれ
まかせます
はっ

道々の者（みちみちのもの）



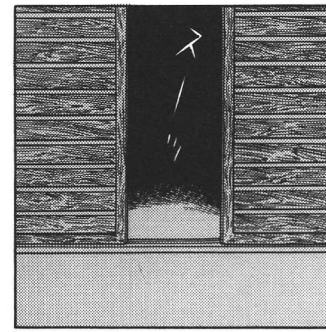






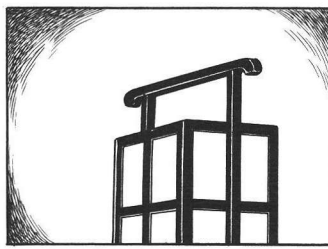



お茶阿の方さまの
おいいつけで
参りました


スー

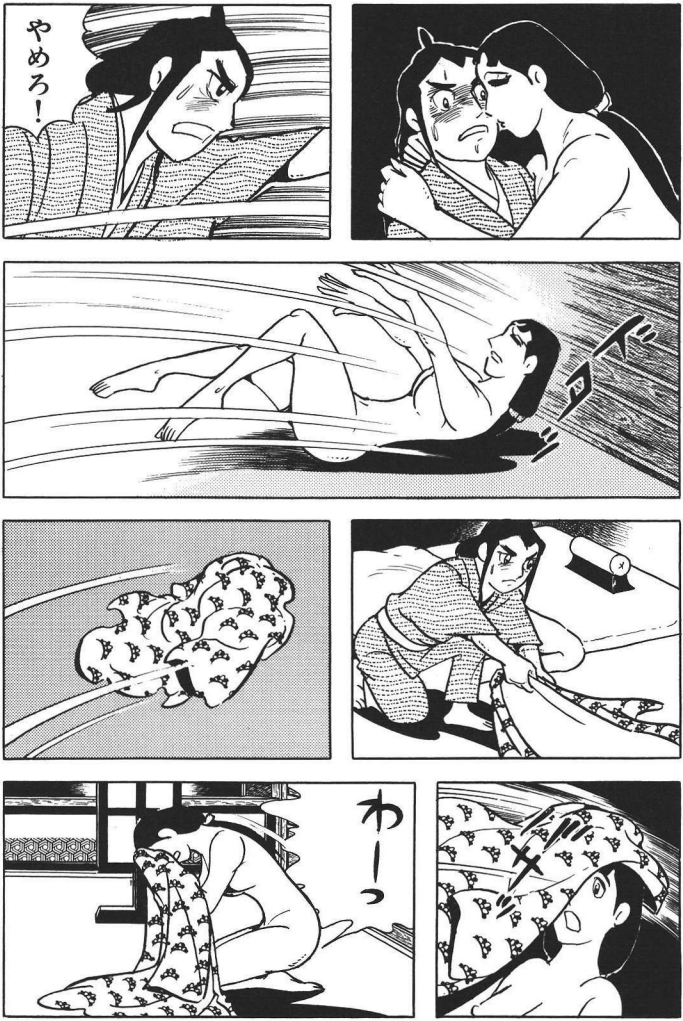

何の用だ
用は……



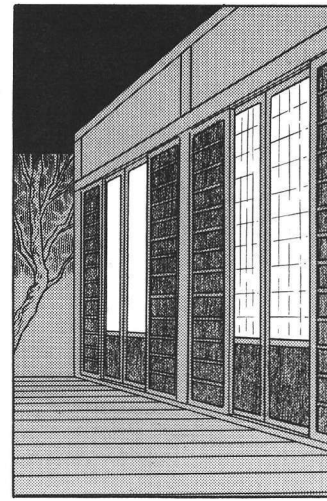


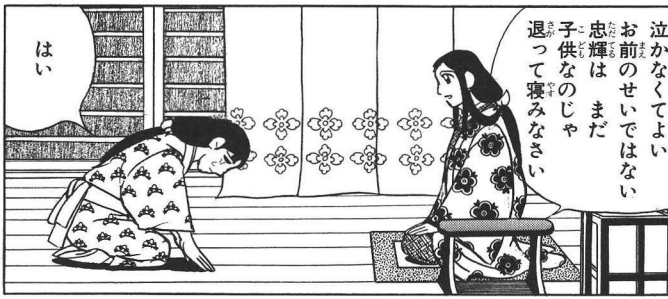

ナデナデ


用は これに ございます
パラリ
もういい 着物を着て 帰ってくれ
でも お茶阿の方 さまが
これっ よせっ！

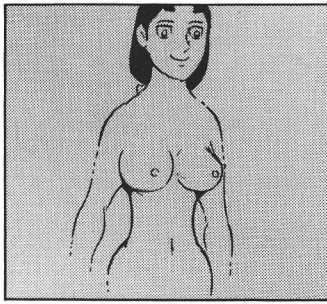

やめろ！
ドド
わーっ


そうですか
忠輝が断りましたか



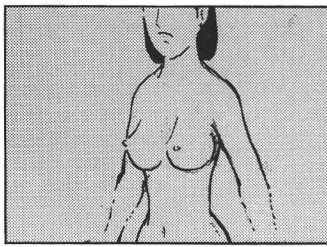

泣かなくてよい
お前のせいではない
忠輝は　まだ
子供なのじゃ
退って寝みなさい
はい


お茶阿は
母親として
ほっと安心したが
これでよいのか
どうか　複雑な
気持であった

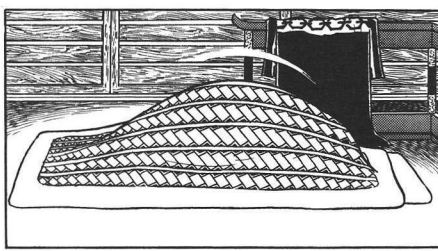



だが　少しは
効果があった
ようだ

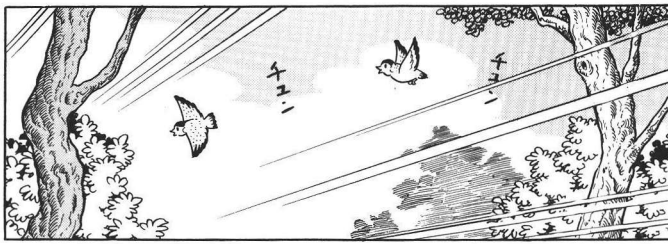






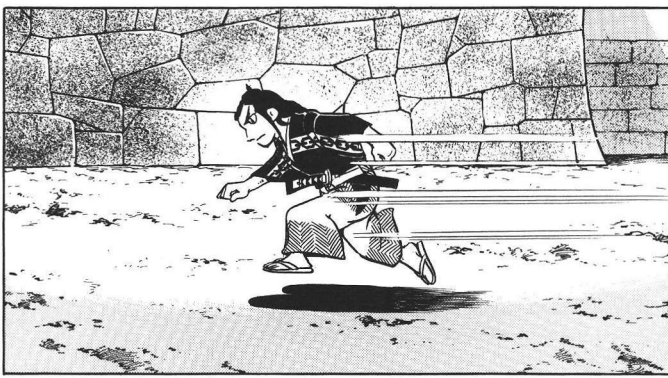


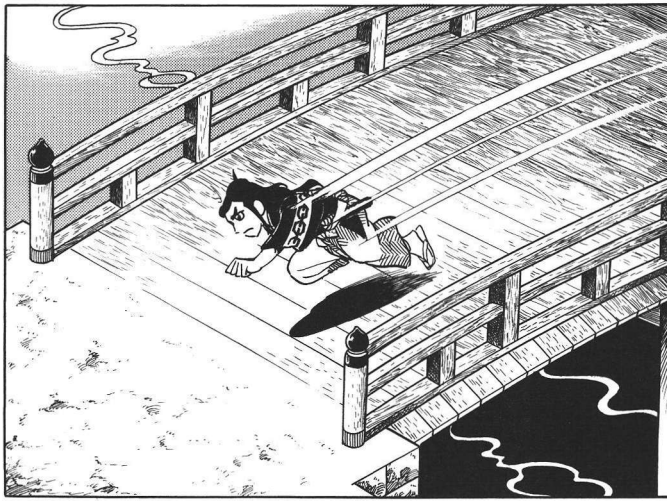


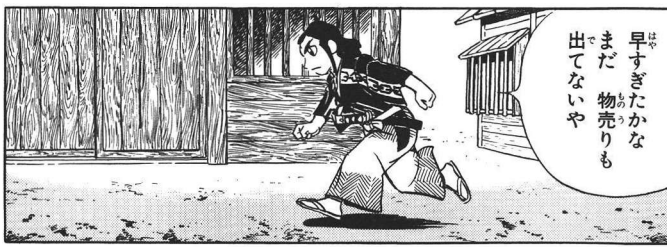

チュン
チュン


ふーっ
なんだか眠られ
なかったな

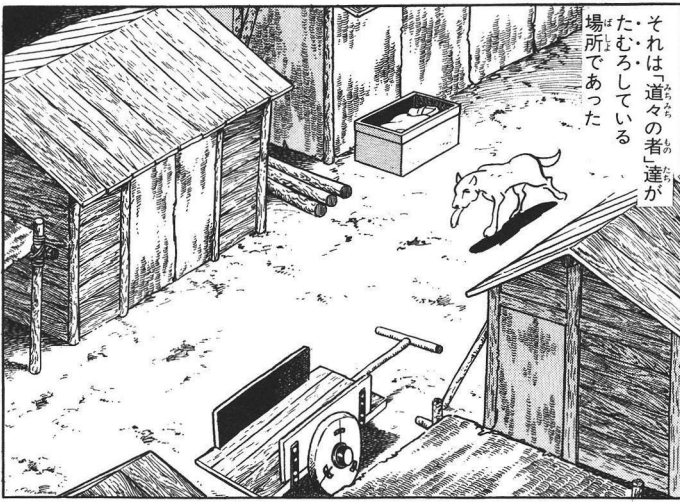

よし
町へ行こう



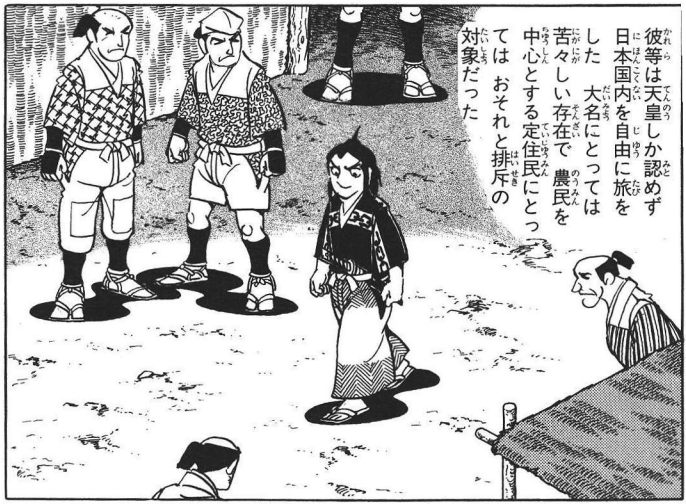



早すぎたかな
まだ 物売りも
出てないや


そうだ
むこうに辻芸人が
集まっている所が
あったな


それは「道々の者」達が
たむろしている
場所であった


「道々の者」とは
からくり人形をあやつる
傀儡師や　異国より来て
日本に帰化し　異国の
芸を見せる辻芸人
金山銀山を探して全国を
歩く山師など日本全国を
旅して歩く漂泊の民の
ことをいった


彼等は天皇しか認めず
日本国内を自由に旅をした
大名にとっては
苦々しい存在で
農民を中心とする定住民にとっては
おそれと排斥の対象だった


あんた こんな時刻によそ者が来ちゃ駄目だよ


あ……
お前 この間おれがつけられているのを教えてくれた娘だな


そうだよ


あたい達が
商売を始めたら
入って来てもいいけど
それまではあたい達の
暮らしがあるんだ
よそ者が勝手に入って
来たら　みな怒るよ
ふーん
おれのどこが
よそ者だ


その着物が
よそ者さ

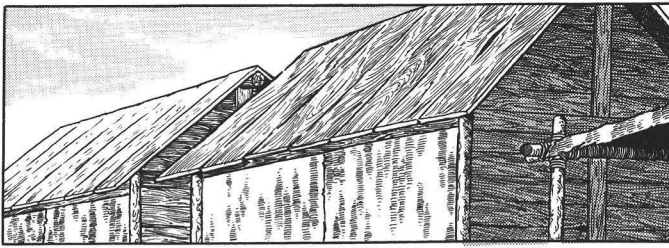

へえ
これが
いけないのか


じゃ
ぬげば
いいだろう


ほら




どうだ
これでいいか
それとも下まで
とるのか
まあっ
はっははは
はっははは
全裸で歩いて
どうするのよ
おいで
周囲の者が笑ったと
いうことはこの行為で
「道々の者」達が
心を許したということ
である




へえ これがお前の住いか簡単だな
あたい達いつでもすぐに旅に出られるように簡単なのさ




これを着るといいよ

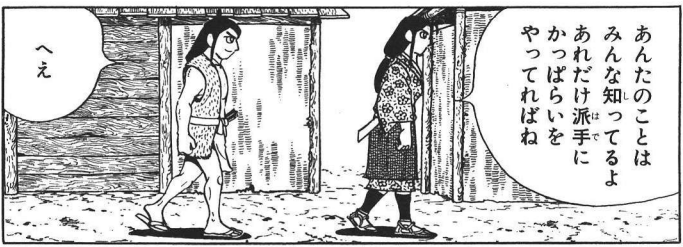

へえっこれはあったかくていいな


おいで


朝めし
まだなんだろ


ああ


おれは
忠輝だ
あたいの名は
雪って
いうんだ


へえ
あんたのことは
みんな知ってるよ
あれだけ派手に
かっぱらいを
やってればね


みんな！
この人も一緒に
朝めし 食べさ
せてよ


いいとも
ここに来て
好きなだけ
食いな


うわあ
うまそうだな
うん
これは
うまいや
へえ
若様の
お口に
あうとはね
おれ
こんな味
好きなんだ
おかわり
もらうぞ
へえ
そんなに
気に入ったか
ねえ
あんた
いい体を
してるねえ
歳はいくつなの


あたいの男にしたいねえ
あ……
お万の悪いくせが始まったぜ
また
ねえ
あたいと仲良くしておくれ
お万姉さん！
あらやきもちかい？
男女が好き合うのは勝手だろ！
ねえ～


ヒョイ


ほう


これ
ずいぶん
重いな


ほう




さ……
しまいなよ


お万がよくない
他人の獲物に
手を出しては
殺されても
文句はいえぬ
ふん
さっきの質問に
答えよう
おれは十二歳だ
十二!?
なーんだ
雪ちゃんは物好きだね
この子は まだ
役に立たずだよ
フン


放っておけ
雪の自由だ
ふん
強いのう
生れつきだ
鬼っ子なんだ
なるほど
すばらしいな
雪は目が高い

おれがすばらしい……？
おれは悪くいわれ
嫌われるけど
すばらしいなんて
いわれたことないぞ

あまりに人並勝れた者
を世人は嫌う　それが
鬼っ子だ

ここにいる者は
みな傀儡子だろ
傀儡子も鬼っ子
なのか？

はっははは
これは面白い

確かにそういえる
かもしれぬ　だが
お前さまほどの
力は持たぬ

おれ　傀儡子が
気にいったなァ
みんなわずらわしい
ことを気にせず
自由に生きている

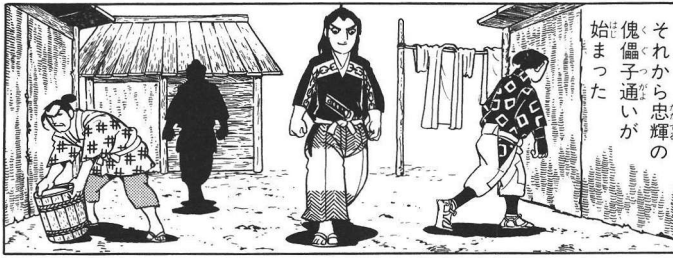
ああ
うまかった
ごちそうさま

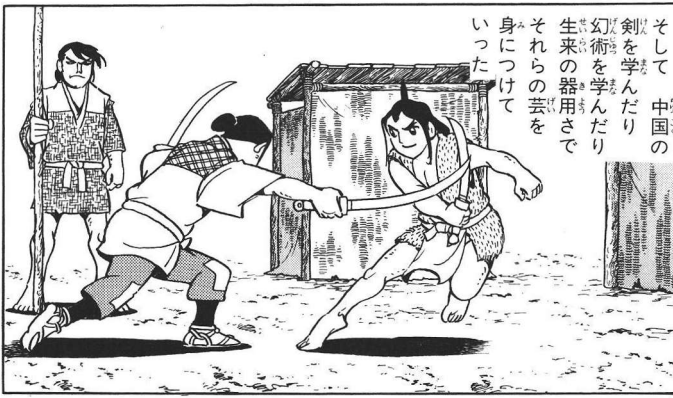
いつでも
気楽に
来なされや

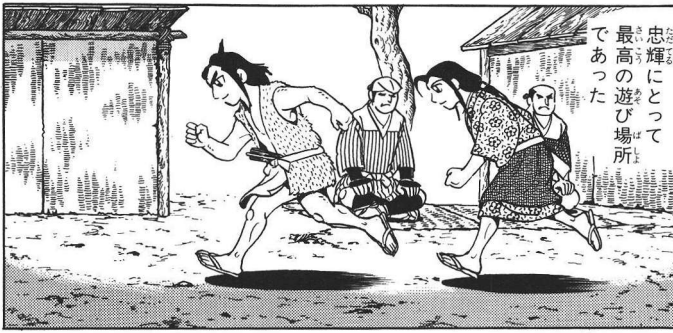
そのあとを
雪がいそいそと
ついていった

その雪の姿を見て
長は ふと痛ましそうな目になった

雪の辛い生涯の始まりを 長はこの時すでに予感していたのである

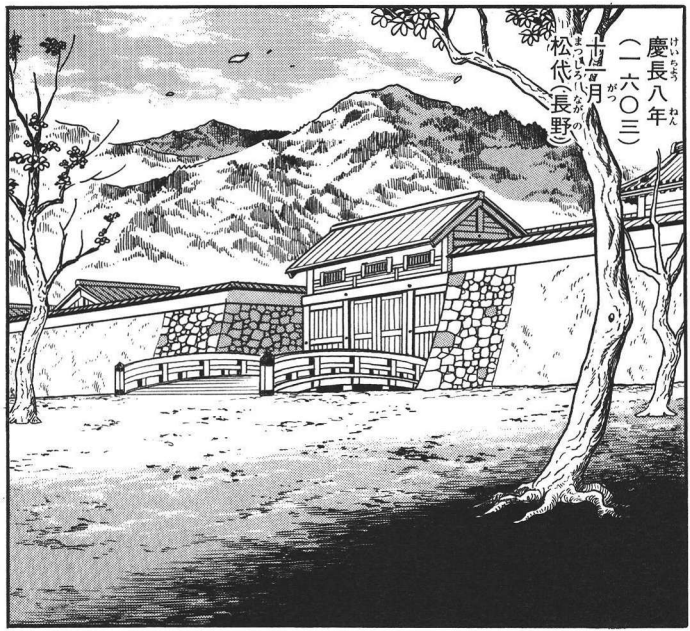

それから忠輝の
傀儡子通いが
始まった


そして 中国の
剣を学んだり
幻術を学んだり
生来の器用さで
それらの芸を
身につけて
いった


忠輝にとって
最高の遊び場所
であった

柳生領潜入（やぎゅうりょうせんにゅう）




慶長八年
（一六〇三）
十二月
松代（長野）


忠輝さまを
お迎えするだけの
準備は整うたか
はい
ご指示通りには
いたしました


うむ
ご苦労であった
ところでそちは
これから柳生領へ
潜入してもらいたい
柳生領へ？
そうじゃ
柳生といえば
関ヶ原後
石舟斎どのが二千石
宗矩どのが千石と
三千石の新参旗本
その領地を調べる
のですか？
そうじゃ
あらゆることで
柳生の非となる
ことを探しだして
もらいたい


柳生はその昔 松永家に
仕えていた頃 隠田を
持った理由で罰せられて
いる その隠田が今でも
温存されているかも
しれぬ それを見つける
だけでも柳生を取潰せる


なぜ
それほどまでして
柳生を……

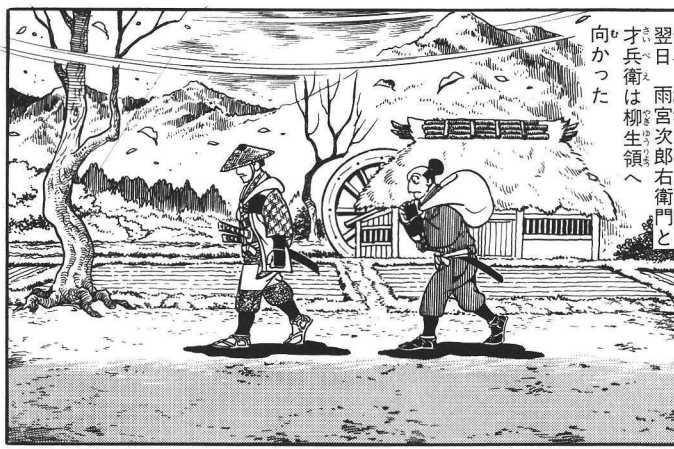

宗矩どのは
忠輝さまの
お命を狙うた


なんですと
!?

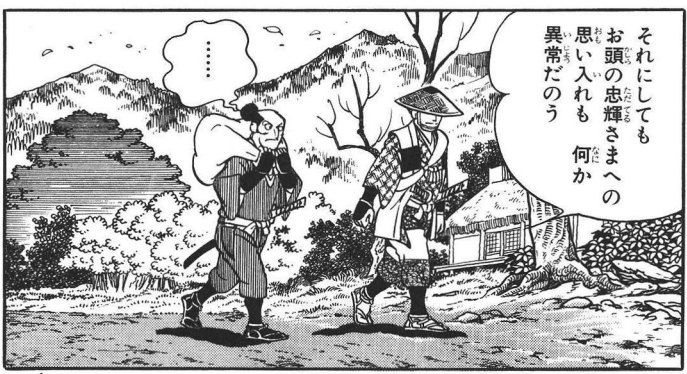

恐らく秀忠さまの
ご命令によるもの
と思われる
わしは忠輝さまの
付家老として
お茶阿の方さま
から 相談を受け
たのじゃ


だが　秀忠さまを
抑えることができぬ
ならば　柳生を叩く
しかない　付家老と
して忠輝さまを守る
のは当然じゃ


よいか　柳生を
取潰せるだけの
証拠を集めよ！
はっ


翌日　雨宮次郎右衛門と
才兵衛は柳生領へ
向かった


若 これは危険な任務でござりまするな
柳生領は伊賀 甲賀に隣接していて 柳生の門弟にも伊賀 甲賀者が多いといいます
うむ 不正を見つけたら我等は柳生に抹殺されるやもしれぬ


……
それにしてもお頭の忠輝さまへの思い入れも 何か異常だのう


忠輝さまを
川中島十二万石の
領主に推薦したのは
お頭じゃ お頭の
経営手腕は誰もが
認めており
どの御曹子でも
喜んで迎えてくれる
それを 一番禄高の
低い忠輝さまに力を
いれている

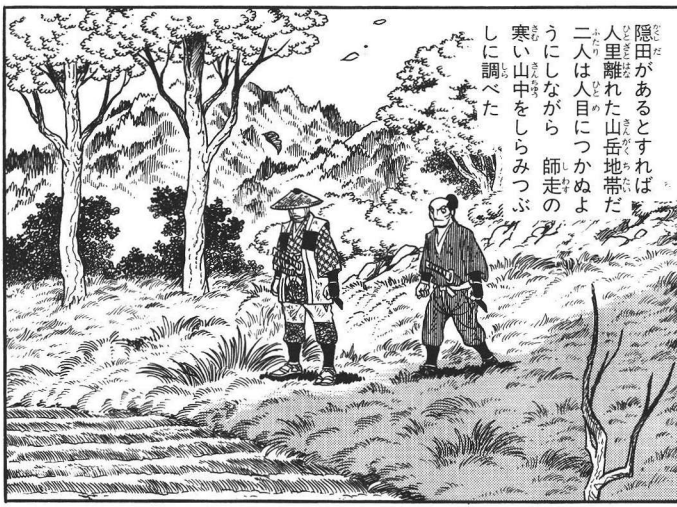

お頭も忠輝さまが
好きになったの
ですかね

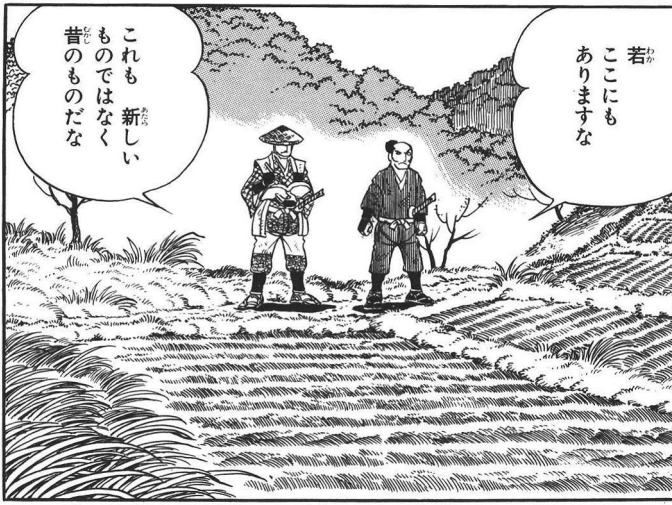

わしは
そう思えぬ


わしらはあのお方が
好きだが お頭は
好きで肩入れしてる
とは思えぬのだ
そうでございますな お頭のやることはすべて計算ずくですからのう


その通りだ
その計算で近づいて
いるとしたら
お頭は忠輝さまに
何を求めているのじゃ

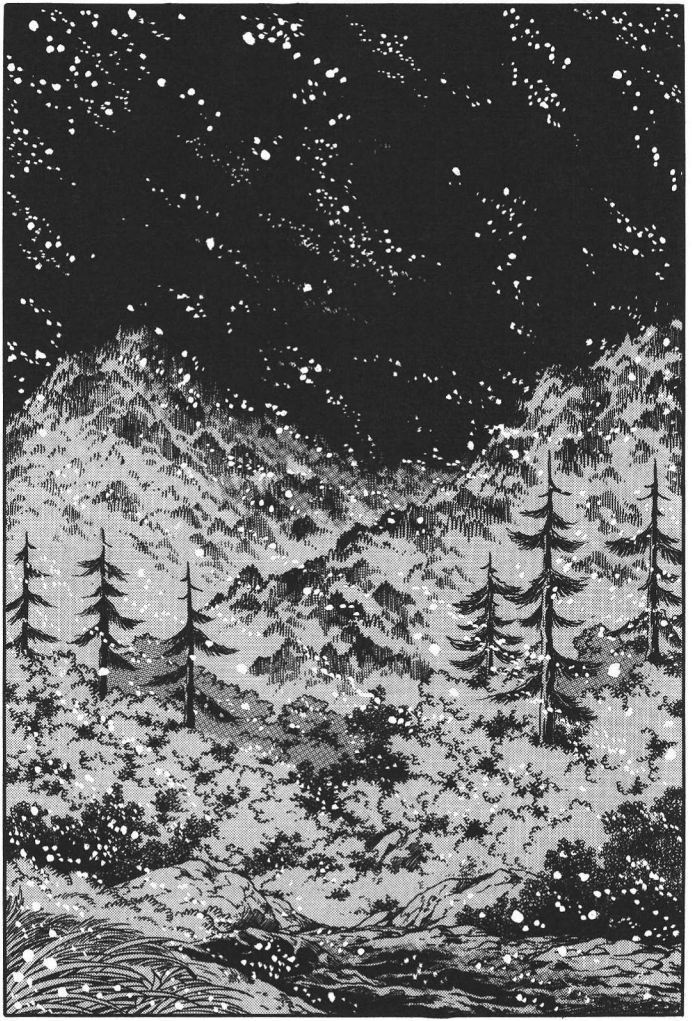

二人は笠置山の
奥から柳生の庄に
入った


隠田があるとすれば
人里離れた山岳地帯だ
二人は人目につかぬよ
うにしながら　師走の
寒い山中をしらみつぶ
しに調べた


若
ここにも
ありますな
これも 新しい
ものではなく
昔のものだな


あれ
雪ですよ
よし
知らぬ山中で
吹雪にまきこまれる
のは まっぴらだ
今日はこれくらいに
しよう


今夜の野宿は
骨身にこたえ
そうですな
うむ




イナユン
イナユン


おお 若 すっかり 雪景色に なっておりま するぞ


おお


焚火をしよう とてもたまらん


焚火？ そんなことしたら たちまち見つかって しまいます
そろそろ 見つからねば 困るのだ



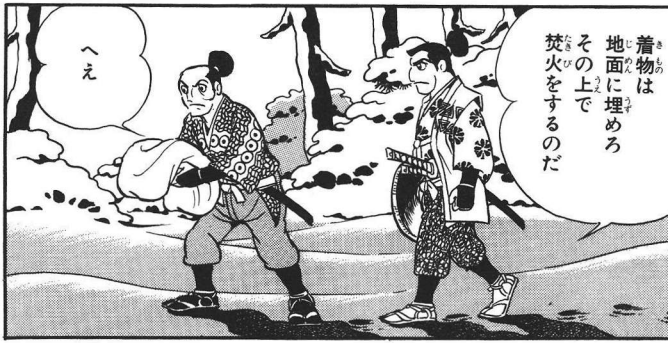
*査察（決めた通りかどうか調査すること）


もし 柳生がわしに
賄賂を贈ったならば
そのこと自体が違法で
さらに賄賂を贈ってまで
隠さねばならぬ違法を
領国内に持っていると
いう証拠になる
だから わしは賄賂を
受取りにいかねば
ならぬのだ
しかし
我等を抹殺する
という手が
ありまする


もし 我等の消息が
一月も絶えれば
お頭はただちに
その行動を取るだろう
たとえでっち上げても
お頭は隠田の存在を
証明してしまうだろう

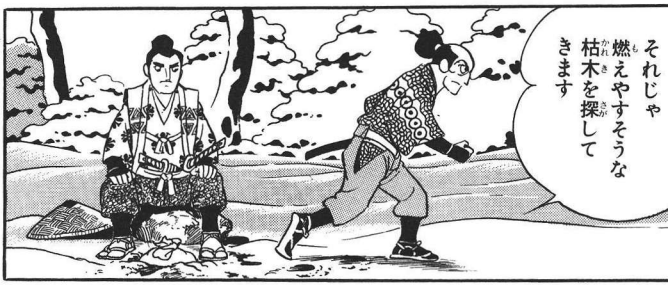

わしは奈良代官所属の
手代であるという証明書
を持っている それを
斬ったとあらば たちまち
柳生領の隅々まで厳しい
査察の手が入り 何か
罪を見つけるだろう


だが わしは
そんな死に方は
まっぴらだ
だから 柳生に
見つけてもらわ
ねば困るのだ
柳生はどちらに
転んでも駄目と
いうことですか
そういうことだ
意味がわかったら
持って来た新しい
衣服に着替えろ
今朝早く 奈良を
立って道に迷った
ことにするのだ
はっ
それにしても
お頭は我等が
抹殺されることも
計算してますかね
していて
その準備も
してると思う
やっぱり
お頭は
怪物ですな


着物は
地面に埋めろ
その上で
焚火をするのだ
へえ



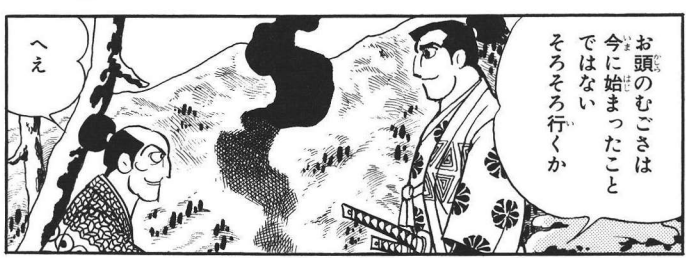



それじゃ
燃えやすそうな
枯木を探して
きます


パキ
メラメラ
やっと
暖をとることが
できましたな
仕事とはいえ
冬の野宿は
きつかったのう
来ました


いまいましい雪だな　これでは柳生屋敷を見つけることも簡単にできん
若はここにござれ　手前が一走りして柳生さまのお屋敷を探して参ります


馬鹿を申せ！凍え死んでしまうわ歩いているほうがよっぽどましだ
しかしお代官さまも酷なお方ですな　選りによって　こんな日に査察を命じられるとは

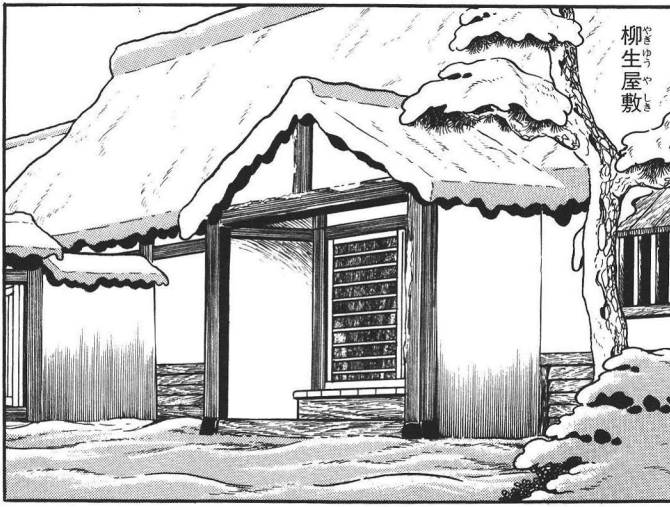

お頭のむごさは今に始まったことではないそろそろ行くか
へえ


ムクッ
ムクッ
ザッ
柳生屋敷に御案内申しあげる


お主等
何者だ
芝居はご無用に
願いたい
芝居だと
二人だけの話に
しては 少し
声が大きすぎ
申した
柳生の門弟か
それにしては
忍びのように
見えるが
もともとは
伊賀の忍びで
ござる


おう
では 柳生屋敷に
案内してもらおう


衣服を着替えたことまで見抜かれていなければ よいのだが……


柳生屋敷


今時分　何故の大和代官の査察か？江戸で宗矩が何かいたしたのかな
手前どもはお代官のお指図のままに動くだけですから

それはどうかのう
大久保長安どのが
わざわざ甲斐から
お手前のような
*地方巧者をこの里に
さしむけられたについて
いわくがないはずはない

うっ
我等が
甲斐の者だと
知っている

忍びを供に
つれた手代など
そう たんとは
おりませぬよ
雨宮どの

わしの本名まで
知っている
これは ただの
兵法者ではない

この様子では
賄賂など
出す気はないな

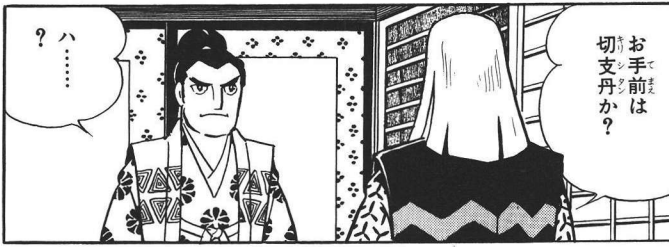
*地方巧者（地方行政のベテラン）

宗矩は仕官を求めて全国を流浪し苦労を重ねております
そのため出世を急ぎすぎるきらいがある
出世のためなら何でもする しかし それは柳生の総意ではない
お帰りになったらその点を大久保どのにご説明願いたい

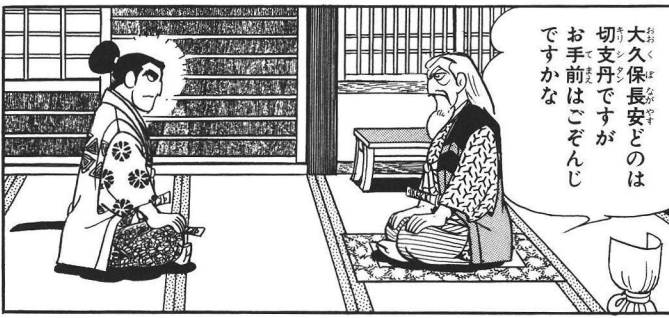
確かにお伝えいたす

そんなこと伝えても 全く無駄なんだが……

瞬間 次郎右衛門のわずかな表情の動きから石舟斎は微妙な感じを読みとったようだ


お手前は切支丹か？
ハ……？


どういう意味だろう
豊臣秀吉はバテレンの布教活動を禁じたが家康公は　外国との交易を盛んにするため大幅に緩和している
罪になることではないのだが……


大久保長安どのは切支丹ですがお手前はごぞんじですかな


ま　まさか
それは何かの間違いでござりましょう


大久保長安は
何よりも派手な
ことが好きで
それに輪をかけて
女が好きである


石見銀山や今度の
佐渡金山を査察に
行く時は二百五十人
からなる大行列を
ひきつれてゆく
そのうち七 八十名は
女である

そして　宿舎では
飲めや唄えの
大宴会をくりひろ
げるのである



お頭は派手で遊び好き
切支丹では日本にない
一夫一婦という教えが
あり　お頭が切支丹な
らば　その教えに背き
ましょう

長安どのは
奈良の出だ
そして奈良のこと
に関するかぎり
わしら柳生の者が
知らぬことは
何一つない

長安どのの父御
大蔵太夫十郎どのが
すでに切支丹で
あった

心底からの信徒であったのか　新知識を吸収するための方便だったのか　それは知らぬ
特に長安どのは到底切支丹とは思われぬ所業の数々……
疑問を持たれて当然じゃが……

しかし　長安どのは切支丹でなければ知り得ない知識を持っている
金山銀山の採掘法
鉱石の新しい製錬法
どれを見ても　我が国古来の技術ではない

誰から　そんな術を
習うたと思う
我が国にそんな知識を
持った山師がいたの
なら　とっくの昔に
名をあげている

大久保長安どのが
切支丹ならば
家康公は　どう
考えましょうな

太閤秀吉どのは
切支丹の布教を禁じら
れましたが　家康公は
外国との交易を考え
緩和なされた
罪にはなりませぬ

さよう　罪にはならぬ
だが　家康公が若い時
三河の領内で一向一揆
が起り　徳川家臣団の
中からも信心深い信徒
は家康公にたてつき
戦を挑んだ　家康公は
この苦い経験を忘れ
ては　おりますまい

大久保どのは今　天下の惣代官と呼ばれ　あずかる土地は四百万石……しかし代官は代官で　大名のように大勢の家臣がいるわけではありませぬ　貴公達も大久保どのの部下ではあるが家臣ではござらぬ　それゆえ家康公も安心して経営をまかせられている

しかし　大久保どのが切支丹ならば家康公は警戒なさると思われぬか

ふむう

もし　お頭が切支丹だったらどうなるか　切支丹はかつての一向宗一揆がそうであったように恐ろしいばかりに結束が固い　お頭はその役職を利用して切支丹集団のために尽くすだろうし切支丹もお頭を頼りお頭を強くするためなら一身を捨てるだろう

今　切支丹の数は八十万ともいわれている　その中で老人女子供を除いても二十万から三十万の男がお頭の背後にいることになる　今　これだけの人数を動員できるのは家康公一人だけだ……

しかも　金山銀山採掘の成功で　その歩合は大変なものだ
軍資金に困ることはない　武器として鉄砲　大砲　火薬は宣教師を通じていくらでも手に入る

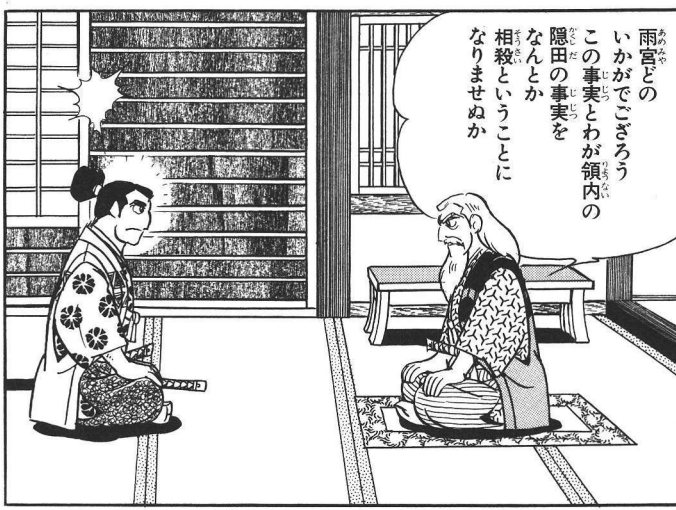




もし　お頭が旗印として忠輝さまをかつぎだせば婿どののためにと伊達家も後押しするだろうし……



お頭は陰で一大勢力を握ることになる

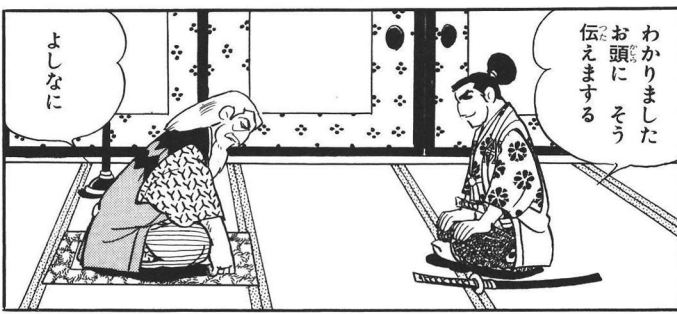


雨宮どのいかがでござろうこの事実とわが領内の隠田の事実をなんとか相殺ということになりませぬか


ほほう
隠田がおあり
ですか
雨宮どのが
ご視察になられた
通りでござる
確かに我等は隠田の
あることは承知して
おります　しかし
二十年ぶりに領主と
して戻った我等と
しては　それを
潰せとはいえぬ
また　お上に届ける
こともできぬ
我等の苦衷をお察し
願いたい
態度こそ下手に出て
いるが　これは
強烈な恐喝だ
この勝負
お頭の負だ


切支丹の件ですが
江戸の宗矩どのも
ご承知のことで
しょうか
いや　誰一人
知る者はおりませぬ
あくまでもこの老人
一人の胸にあること

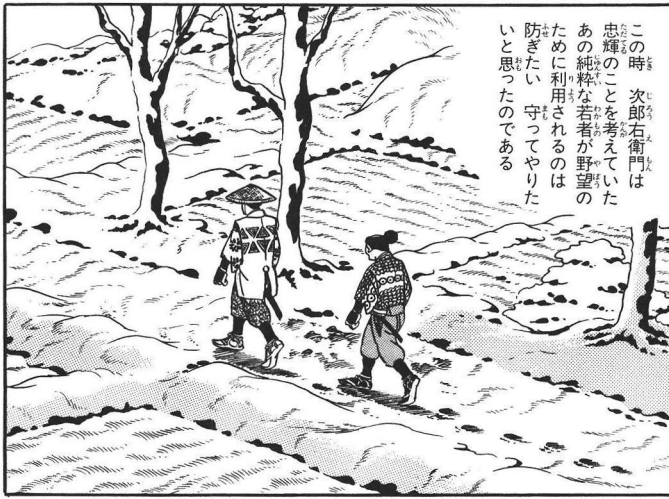

そのお情けによって
柳生が無事に存続
できますれば
この事実は手前の
胸の中で死に絶える
ことになり申す
御家来の方が
ご承知なのでは
ありませんか
何代　何人もの配下の
報告書を総合して
手前が推察し
突きとめた事実で
ござる　他に知る
者は絶対にない


わかりました
お頭に　そう
伝えまする
よしなに


どうでした
賄賂を
つつみましたか
いや
では
私達は抹殺
されますか
いや
それもない


どういう
ことで
ございます
お頭の弱点を
教えられ
あべこべに
おどかされたわ


お頭の弱点
……？
真偽のほどは
まだわからん


この時　次郎右衛門は
忠輝のことを考えていた
あの純粋な若者が野望の
ために利用されるのは
防ぎたい　守ってやりた
いと思ったのである


馬馬鹿なことを申すな
何をでたらめなことを申すか天下の柳生石舟斎ともあろうものが……
やはりさようですか手前も虚言だろうと思いましたが……


では この取引は
成り立たぬ旨
即刻 柳生へ知らせてやりましょう
まてっ


何もこちらから返事をしてやる必要はない もともと柳生を滅すのが目的ではない 隠田の事実をつきつけ宗矩を牽制すればたりるのだ
しかし それでは石舟斎どののおどしに屈したようにとられませんか


あちらが どうとろうとも 当方は痛くもかゆくもない それに たとえ虚言であろうとも 切支丹と噂されては迷惑きわまる
なるほど


このことは
他言無用だ
無論 承知して
いるだろうが
この時 長安の目に
殺意が走った

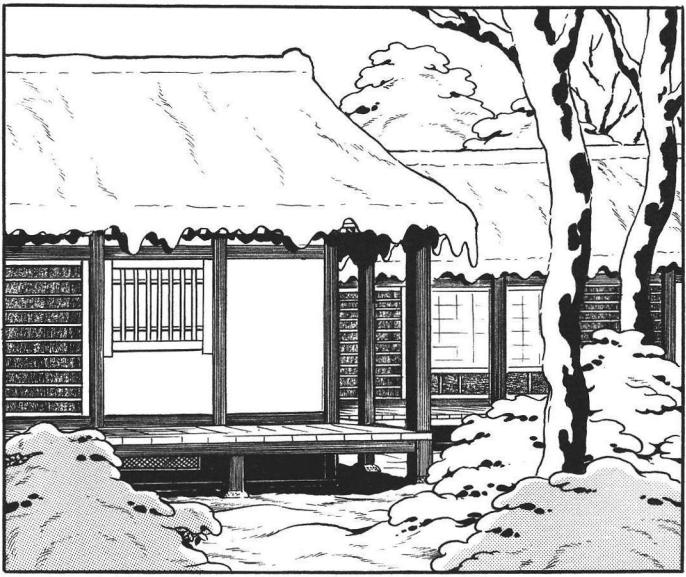

まかり間違えば
殺す気か……
ならば
こちらも
石舟斎と同じ
手を使うか……


ご懸念には
およびません
手前はまだ生きて
いとうございます
これは殺されない
ように万全の用意を
するという意味だ
自分を殺しにかかれば
ただちに長安の秘密も
公になるよう手配する
ぞといったのだ


わっはっはっは

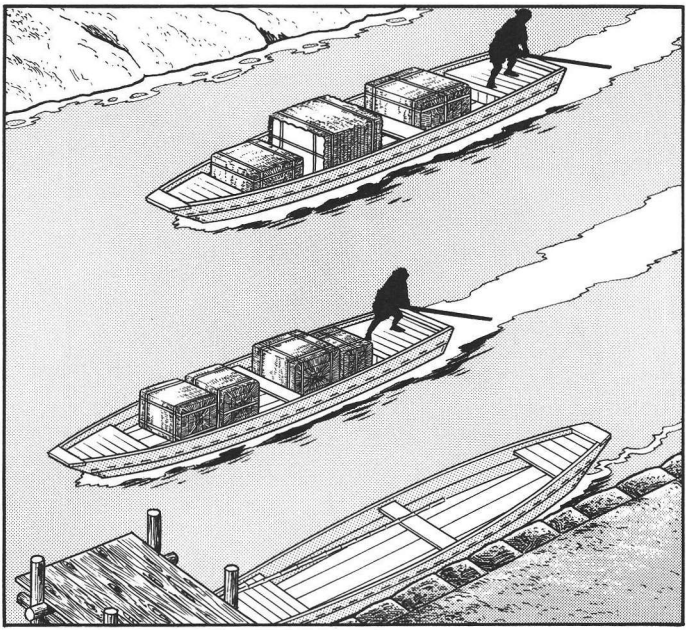



この度の旅で
腕を上げたな
次郎右衛門
なにしろ
柳生新陰流を
目のあたりに
見ましたから

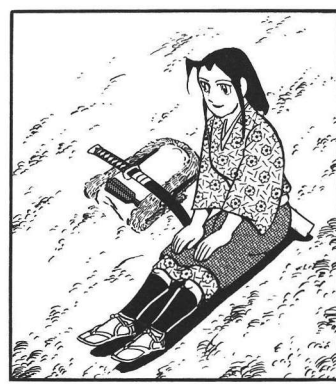


怒(いか)りの剣(けん)





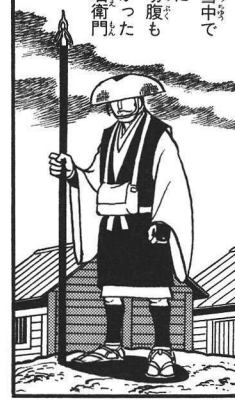

ぷあーっ




あんた
寒くないの
水の中は
ぬくいんだよ
また つけら
れているよ
知ってる
四人だろ
あの向うの
岸にいる
坊主


あの
大道研師
猿回しと
水売りだ
でも
今日は
今までと違って
殺気があるのよ
心配しなくて
いいよ
四人ぐらい
なんともないよ

その僧は雪中で
忠輝襲撃に
失敗し　切腹も
許されなかった
鳥居四郎右衛門
であった

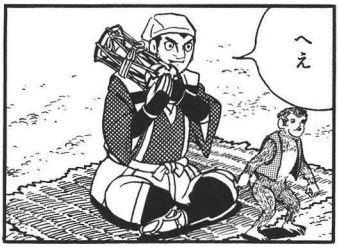


四郎右衛門はその後
二十人の刺客と三人の
伊賀者を呼びよせて
忠輝暗殺の機会を
うかがっていた
だが　暗殺の機会に
なかなか　めぐまれ
なかった　忠輝の行動
が気まぐれすぎたから
である



だが　近頃の行動は
一定のパターンとなった
早朝　江戸城を抜け出す
と傀儡子の一族のもとへ
行き　雪という娘と遊び
暗くなると城に帰って
いった　その帰りを襲う
ことにしたのである




へえ


気づかれておらぬな




へえ
今夜 帰りを襲う 他の者の手配は終ったであろうな


ねえ やっぱり今日はなんだかおかしいわよ 今夜は私と一緒にいて
でも母上が心配するよ

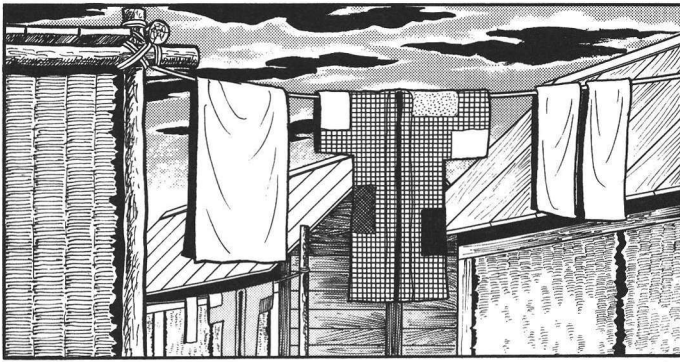



いや
今日は帰し
たくない


やれやれ
やってくれるわ


人生最後の
口づけか


なあ お雪
わかってくれ
おれは江戸城では
嫌われ者だ
それをかばってくれ
るのは母上だけ
その母上を心配させ
たくないんだ
じゃあ
どうしても
帰るの……




じゃ
明日(あす)また
来(く)るよ





……

どうしたんだろう
この胸騒ぎは
なんだろう

本能というのか
雪はじっとして
いられず
忠輝の後を
追った

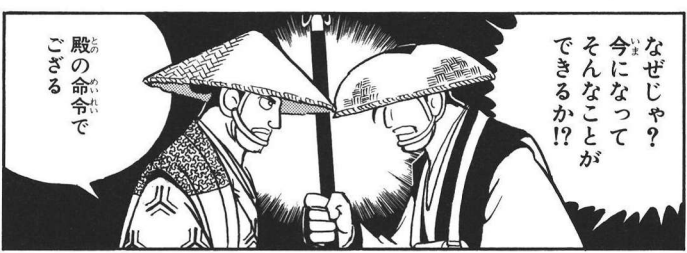
冬の落日は早い
いつのまにか
すっかり暗く
なっていた

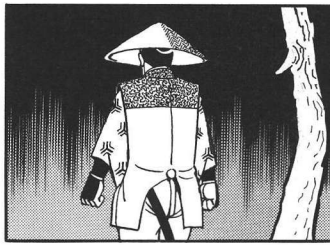



四郎右衛門どの


忠輝さま殺害は
中止されよ


な
なにっ!?


なぜじゃ?
今になって
そんなことが
できるか!?
殿の命令で
ござる



使者の口上は
すでにお伝えした
異論あらば
殿に申されよ



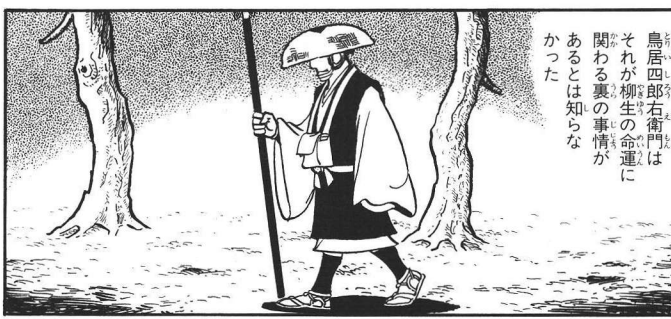
なぜじゃ
そんな馬鹿な



これでは
わしの武士と
しての意地が
たたぬ!!



殺す この手で
必ず殺す!
そして腹を切れば
すむことじゃ!!



鳥居四郎右衛門は
それが柳生の命運に
関わる裏の事情が
あるとは知らな
かった


事情が変ったのは
その日の午後
大久保長安が
柳生宗矩の屋敷に
出向いていたのである


この国の隅から隅まで
手前の目の届かぬ場所
はござらぬ 柳生の庄の
隠田も然り
たいした広さではない
が 書き上げに洩れている以上
柳生家の申し開きは
無用でござる
な なんと
！
そ そんな


疑問ならば
わが手代が調べた
報告書を読み上げ
ましょうか
それは初耳


そうかも知れま
せんのう
宗矩どのは長年
兵法修行のため
あちこち　旅を
なされてました
からのう
そ
その通り

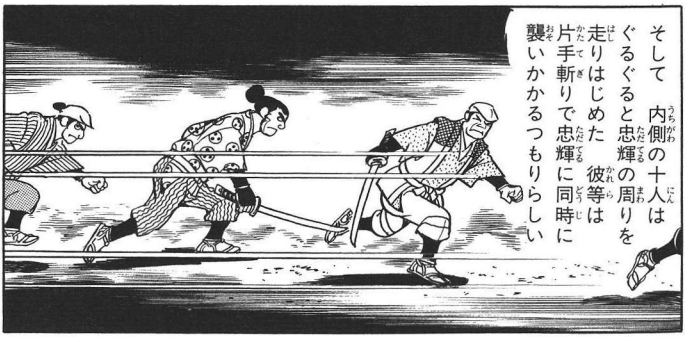

大殿が征夷大将軍に
就任されたといえども
世の中まだまだ不安定で
ござってのう　わしは
金山銀山を掘って
軍資金をたっぷり
つくらねばならぬ
世の中が平和になる
ための忙しさは平気で
ござるが　その上
忠輝さまを立派な
大名にせよと仰せ
つかってのう……


まあ 金山銀山のことは手代にまかせてしばらくは忠輝さまの教育に気を使いそうじゃ
柳生の庄の隠田は松永家時代のものと思われるので目くじらを立てず一言ご忠告までと思って参ったのじゃ
知らぬこととはいえとんでもない失態……ご忠告かたじけのうございます
いやいやそういう事実があるということをご承知ならばよい


大久保長安は今や
家康の寵臣第一位で
ある　その人物が
わざわざ宗矩の前に
現れ　忠輝のことを
におわせた
宗矩は　とっさに
忠輝を殺せば
柳生が大変なことに
なるということだけ
わかった
よいか！
四郎右衛門に
忠輝さまを
襲ってはならぬ
と伝えよ
はっ
こうして中止命令が
伝えられたのである
だが　事情を知らない
鳥居四郎右衛門は
武士の意地として
その命令はのめな
かったのである


誰だ？
柳生だな
忠輝さまの声だ……


忠輝は 二十人
ばかりの集団に
取囲まれていた

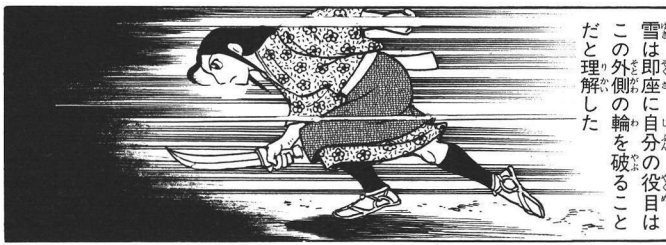

そして 内側の十人は
ぐるぐると忠輝の周りを
走りはじめた 彼等は
片手斬りで忠輝に同時に
襲いかかるつもりらしい

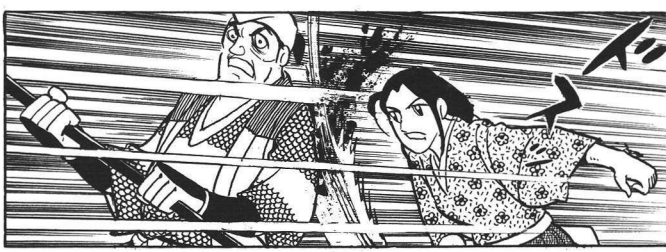

輪の外に逃れるには
一角を切り開くか
跳び越えるか それとも
這って脚の間を抜けるか
三つしかない 忠輝の
跳躍力をもってすれば
充分 跳び越えられる

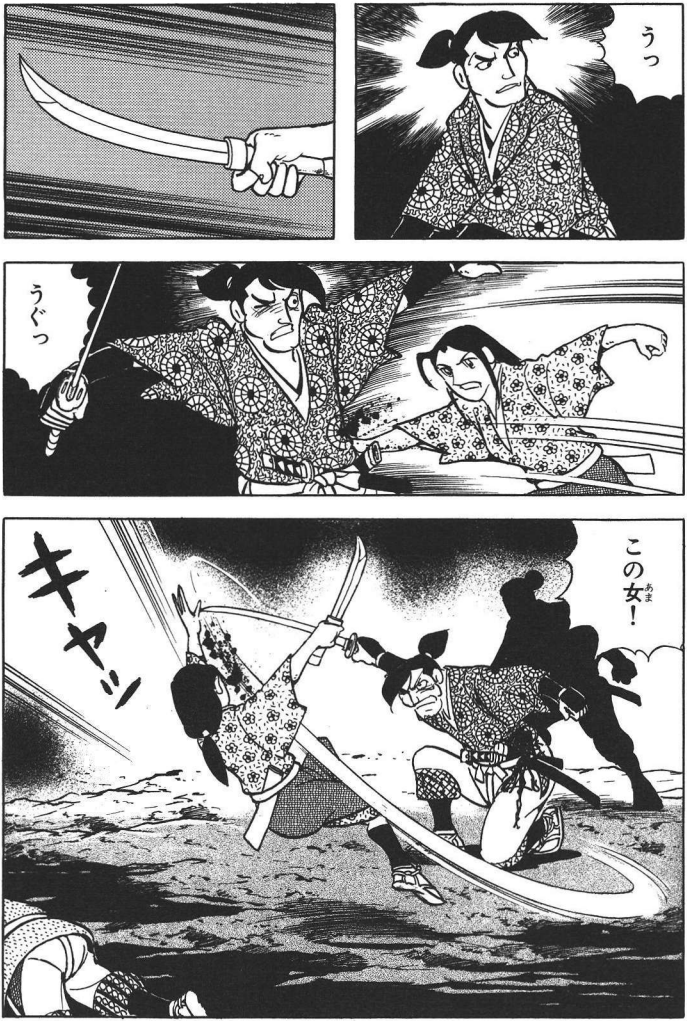

問題は後ろの十人である
この十人は動かずに
忠輝が跳んだら
着地する前に一斉に
襲う気らしい

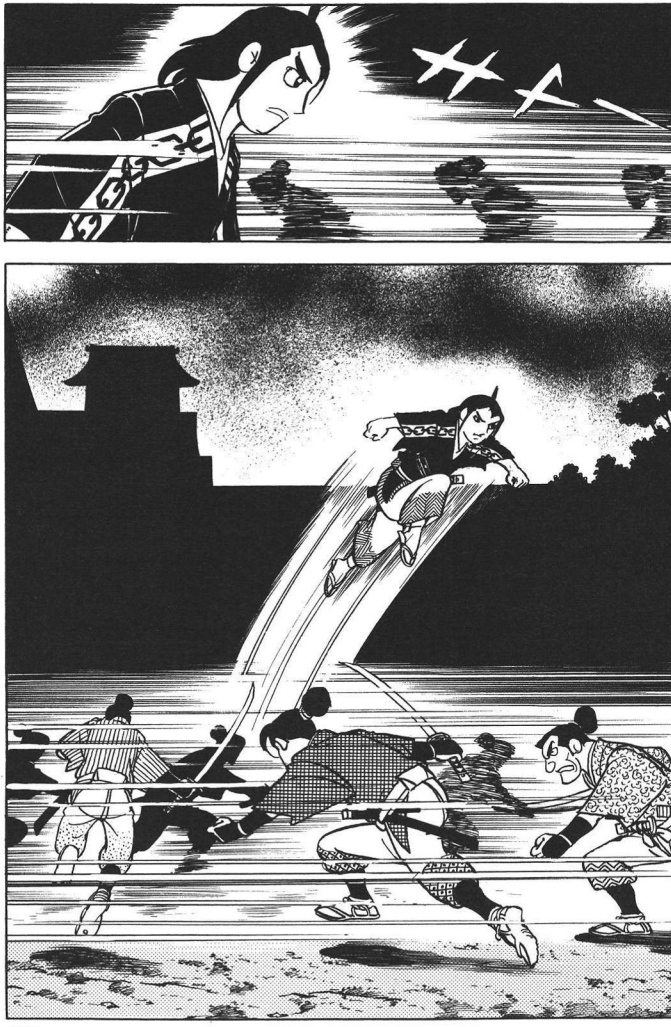

あの人 いくら高く
跳べても 二つの輪
の外までは跳び越せ
ない このままでは
殺されてしまう


あの人が助かる道は
一つ　この堀まで
逃げだすことだわ
あの人は泳ぎが上手
だから堀にとびこめば
逃げられる

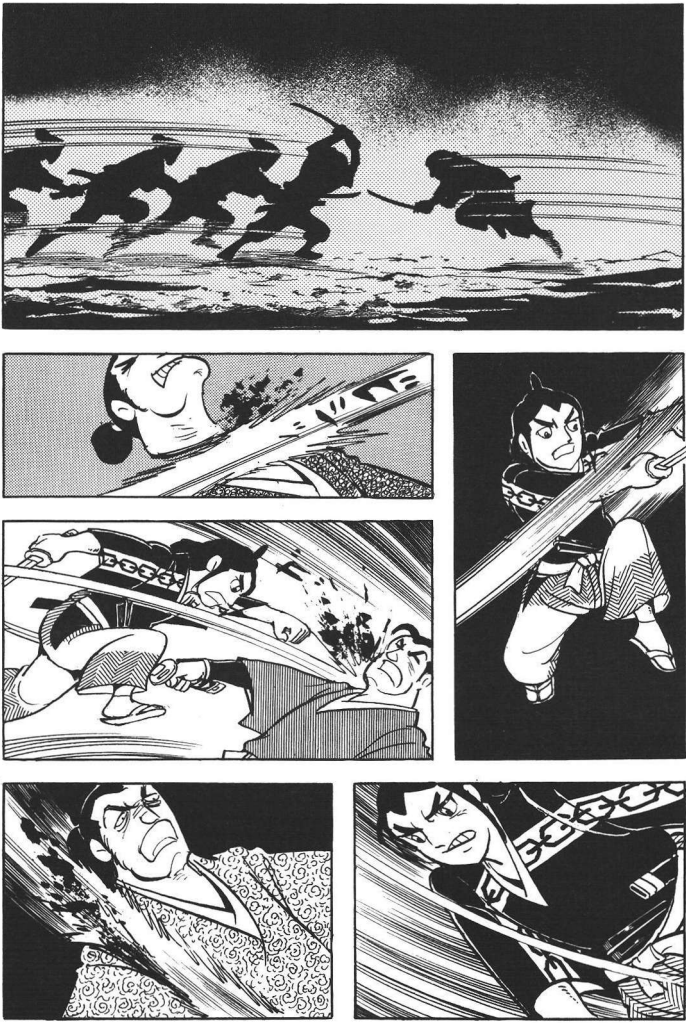

雪は即座に自分の役目は
この外側の輪を破ること
だと理解した




うっ
うぐっ
この女(あま)!
キヤツ



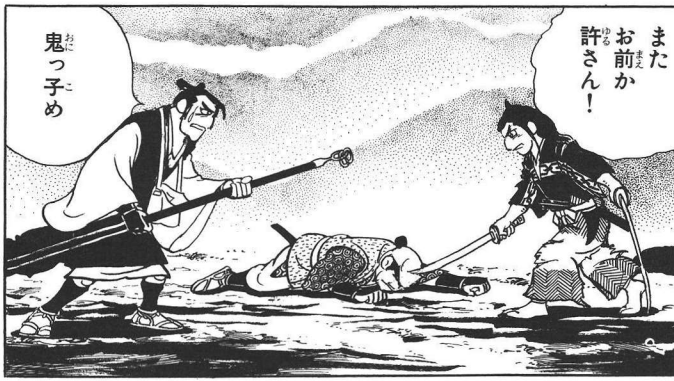

雪！
逃げて！
お堀へ跳ぶ
のよッ！
馬鹿をいえ！
お前を置いて
誰が逃げるか
ぬうう
なぜだ！
みんな殺してやる

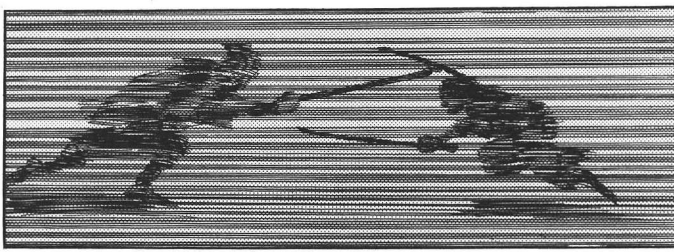



ナイ


それは野獣のみがもつ凄まじい爆発力であった
ビシ
ドカッ


柳生の刺客全員は
あっという間に
ことごとく
斬られた


また
お前か
許さん！
鬼っ子め




雪！
死ぬなよ
頼む
死なんで
くれっ！


おお してやる
だから死ぬな!!

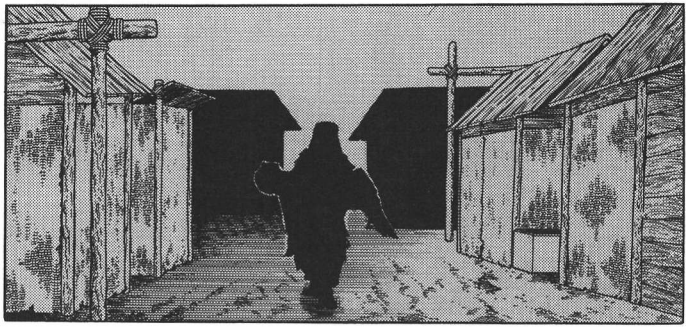

あたいね……
あんたに……女に
して……ほしかった


忠輝は無器用に
雪の脚を開いて
契った


うれしい
……


雪!
雪!!
死ぬな


コオ




おおっ




雪(ゆき)!!




わしは
雪と契った


ううっ
ううっ


さあ
雪をこちらへ


さわるな！
さわると殺すぞ






忠輝は雪の
屍をしっかと
抱きしめ
朝まで誰も
よせつけ
なかった

新将軍（しんしょうぐん）




慶長十年
（一六〇五）
伏見

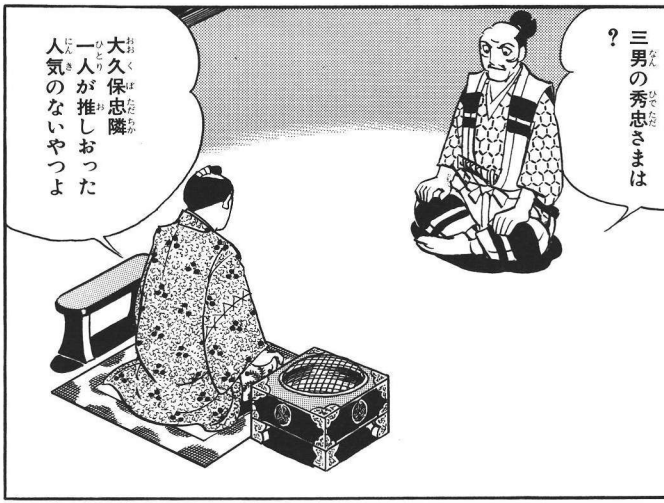

殿
淀君は秀頼公が
成長したら
将軍職を殿から
ゆずり受ける気で
おりまする
らしいのう
殿は将軍職を
おゆずりなされる
おつもりですか
いや……


ならば 淀君の考えを
否定するためにも
次の将軍を決めて
おいたほうが
ようございます
そうよ
それで
諸将にいろいろ
たずねた


諸将は故太閤殿下の
養子となり 今
結城家の世継となって
いる二男の秀康が
覇気もあり 一番
よいのではないか
との答えであった


なるほど
うなずけまする
その次は……

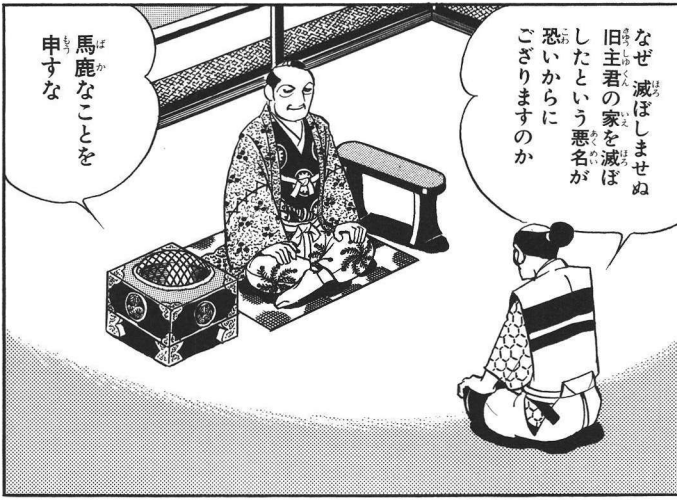

四男の忠吉を
推す者もいる


三男の秀忠さまは？
大久保忠隣一人が推しおった人気のないやつよ


それで殿のお考えは……


だから悩んでおるのじゃ


今徳川と豊臣は微妙な関係にある一つ舵取りを間違えれば合戦になる
それでなくとも血気にはやる徳川の諸将は豊家など滅ぼせと申しておる


なぜ 滅ぼしませぬ
旧主君の家を滅ぼ
したという悪名が
恐いからに
ござりますのか
馬鹿なことを
申すな


では
なぜ……？


世の中の動きが
そうさせるのじゃ


お前にはわからぬのか
応仁の乱以来 百年以上
も乱世がつづいた
世人は ほとほと戦乱に
あきているんじゃ
どんな形でもいい
平和をもたらしてくれ
る人間を受け入れる気
でいる


徳川の治世を
永続きさせるためには
わしらは世人の
期待に応えるしか
ない
なるほど
だがのう
わが息子達は
まだ 歳も
若い
この微妙な関係を
うまく舵取りできる
とは思えぬ
それゆえ 悩むの
じゃ
しかし
決定が遅れれば
遅れるほど
淀君の野望も大きく
なりましょう

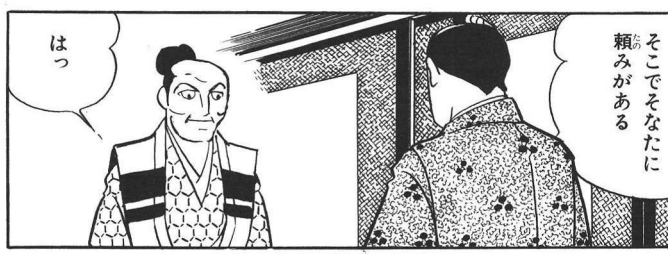

そうじゃ
それゆえ早急に
決定し　秀頼公を
将軍職にという夢は
断たねばならぬ
よく考え
二　三日中に
決定いたそう
一人にしてくれ
はっ
淀君に時流がわかり
主家と家老ということに
こだわりつづけなければ
もうちと　話がうまく
いくのじゃがのう……

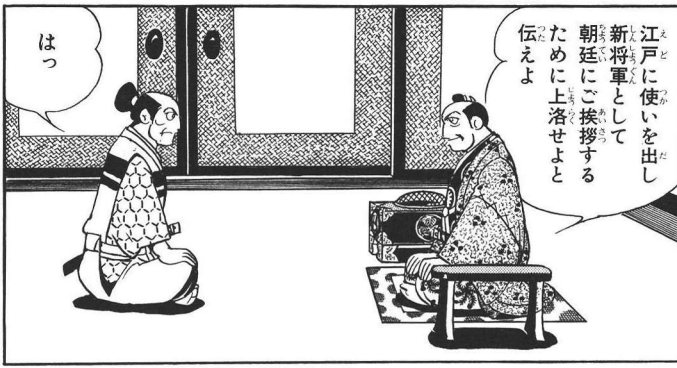

お召しにござりまするか
おう 本多正信やっと後継を決めたぞ


どなたさまを
後継に
なさります
秀忠じゃ
兄の秀康さまは
豊家にご養子に
行かれたお方
それゆえ 次の秀忠
さまにということで
ございますのか
違う
秀忠が凡人だ
からじゃ
それがしには
よくわかりかねます
その意味を
お教えくださり
ませぬか


乱世には聰明で
武勇のすぐれた者が
必要じゃ　だが
天下太平の世になると
そのような者は
逆に災いをまねく
ものなのじゃ
？


自分の才能をもてあまし
何かせずには　おれなく
なる　退屈して必ず
平地に波乱を起す
秀忠ならば無茶は
すまい　わしが
舵取りをすれば
それを守るであろう


そこでそなたに
頼みがある
はっ


江戸に使いを出し
新将軍として
朝廷にご挨拶する
ために上洛せよと
伝えよ
はっ



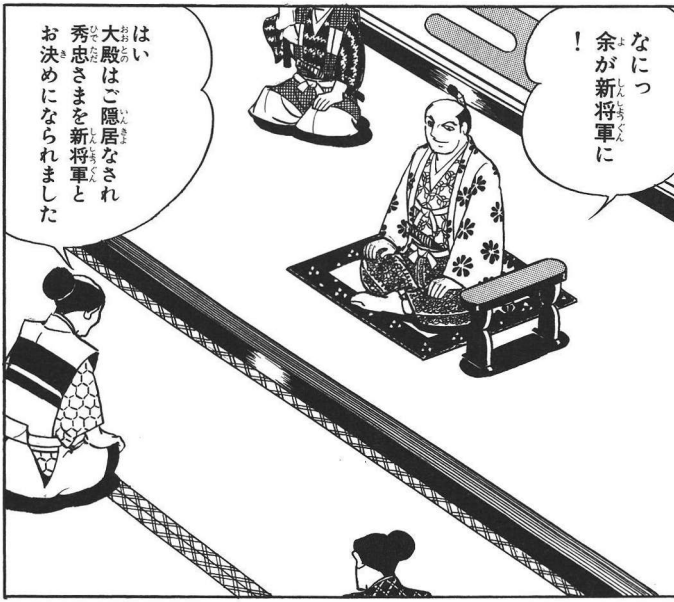

新将軍に挨拶に
来るということは
豊臣家が徳川家の
*下風に立つという
こと　秀頼君は
ともかく　淀君が
認めましょうや


それから　もう一つ
……　これは大変
だろうと思うが
秀忠が新将軍に決ったら　秀頼君に
お祝いの挨拶を
述べに来るように
とりはからうのじゃ

*下風に立つ（下位になる）

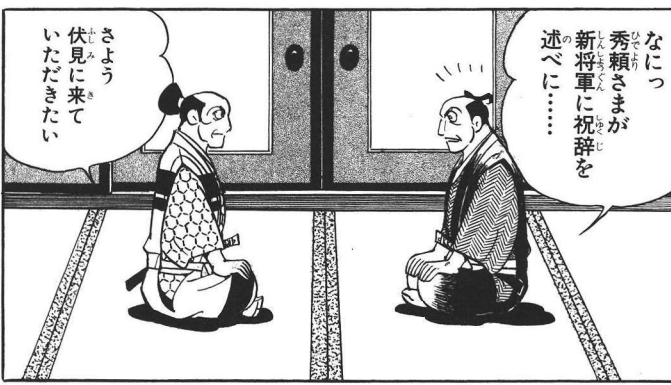

だから 豊臣家の
重臣を説得し
根回しをするのじゃ
豊臣家が 一大名と
しての姿勢をとれば
豊臣家を潰さなくても
すむし 東西の合戦は
さけられる
わかりました
さっそく
ご指示通り
いたします
たのむぞ
もう 戦は
やめじゃ

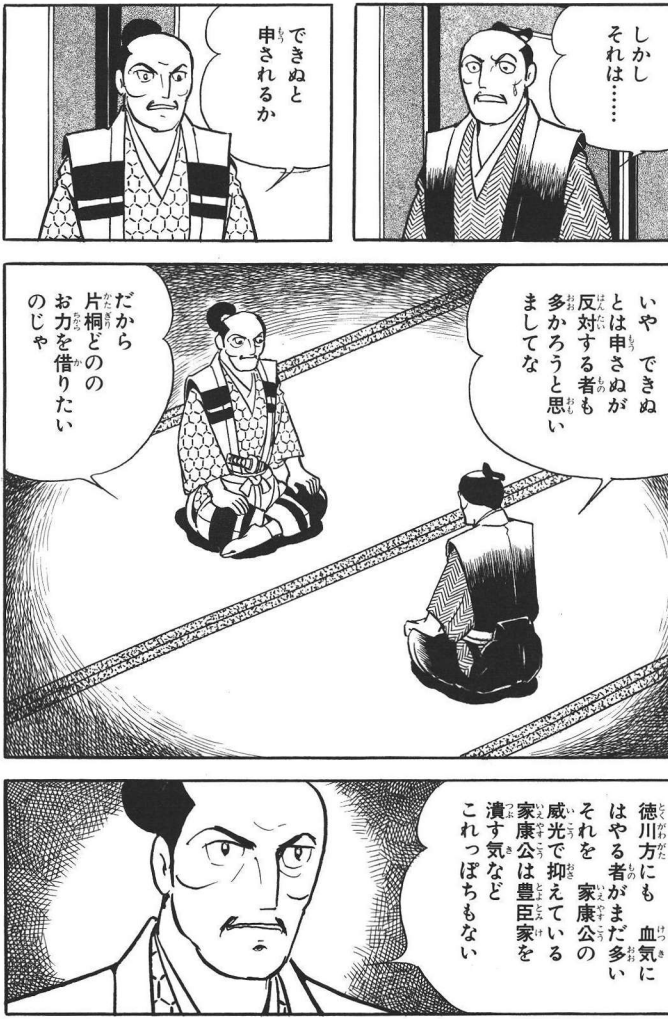

江戸城


なにっ
余が新将軍に！
はい
大殿はご隠居なされ
秀忠さまを新将軍と
お決めになられました


帝へのご挨拶もありますのですぐに上洛するようにとのことでございます
わかったすぐに準備をして上洛いたすとお父上に伝えてくれ
秀忠の喜びは大変なものであった
フフフフ

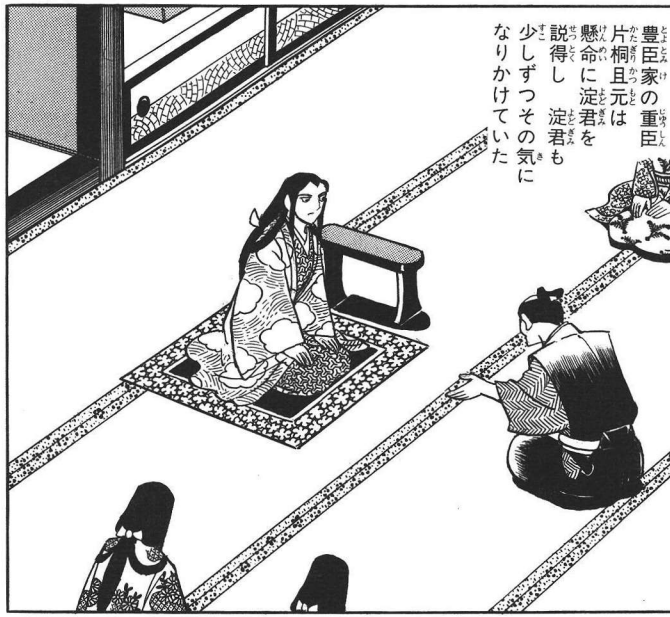

大坂城


なにっ
秀頼さまが
新将軍に祝辞を
述べに……
さよう
伏見に来て
いただきたい


しかし
それは……
できぬと
申されるか
いや　できぬ
とは申さぬが
反対する者も
多かろうと思い
ましてな
だから
片桐どのの
お力を借りたい
のじゃ
徳川方にも　血気に
はやる者がまだ多い
それを　家康公の
威光で抑えている
家康公は豊臣家を
潰す気など
これっぽちもない

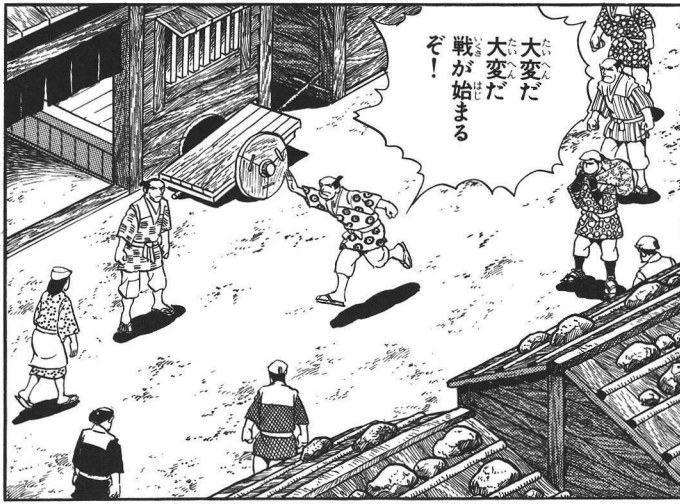

関ヶ原の合戦においても 責任は石田三成一人にし淀君も秀頼君もお咎めなしとしたのは その気持のあらわれじゃ
それはわかってござる
今度も新将軍に臣従の誓いをいたせなどとは申しておらぬ おめでとうと一言いってくれればよいのじゃ それに 秀頼公の正室お千の方は新将軍の姫だし これからも両家がうまくやっていける事を考えられよ
ふむう


わかりました
なんとか淀君を
説得いたしま
しょう
たのみます
それが
天下太平への一番の
近道なのじゃ


豊臣家の重臣
片桐且元は
懸命に淀君を
説得し　淀君も
少しずつその気に
なりかけていた


その頃 秀忠は
十余万の軍勢を
ひきつれて
得意満面で
江戸を出発した

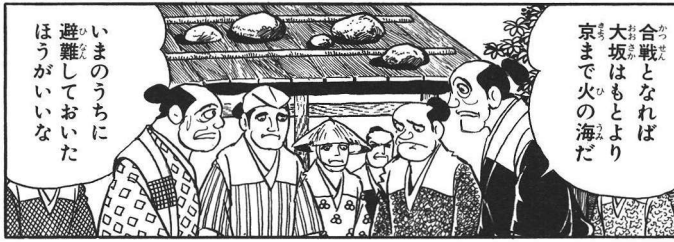


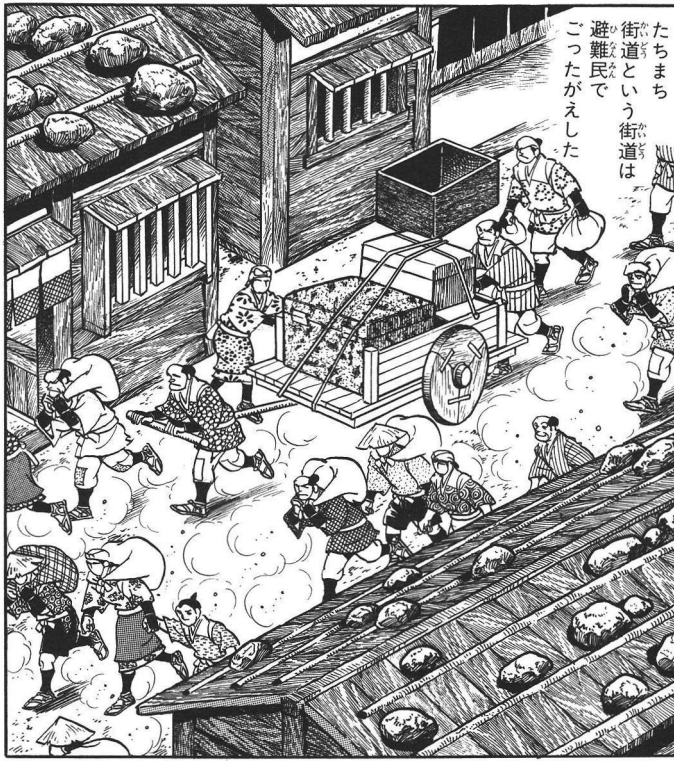

大変だ
大変だ
戦が始まる
ぞ！

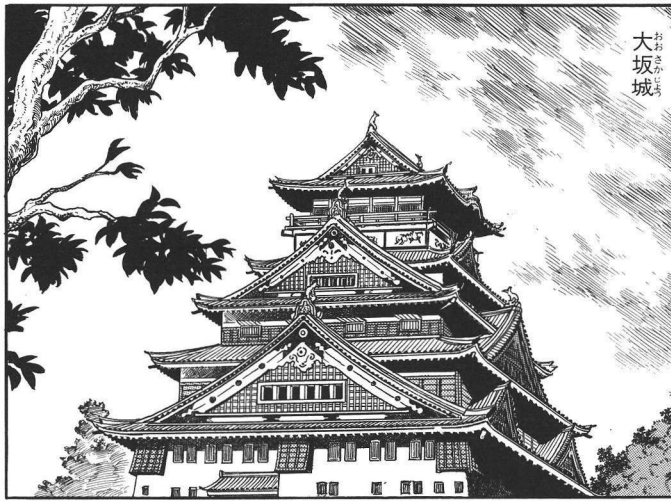

どうした
どこで戦が
始まるのじゃ
新将軍の
秀忠さまが
十余万の軍勢を
ひきつれ
江戸を出られた


あたりまえよ
そうでなくて
なぜ　十余万もの
軍勢をひきつれ
上洛なさる！

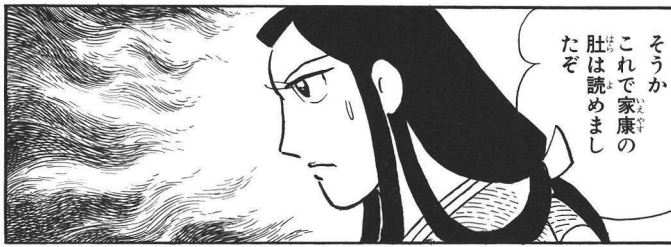

すると
いよいよ　大坂方と
一戦なされる気か


合戦となれば
大坂はもとより
京まで火の海だ
いまのうちに
避難しておいた
ほうがいいな


たちまち
街道という街道は
避難民で
ごったがえした

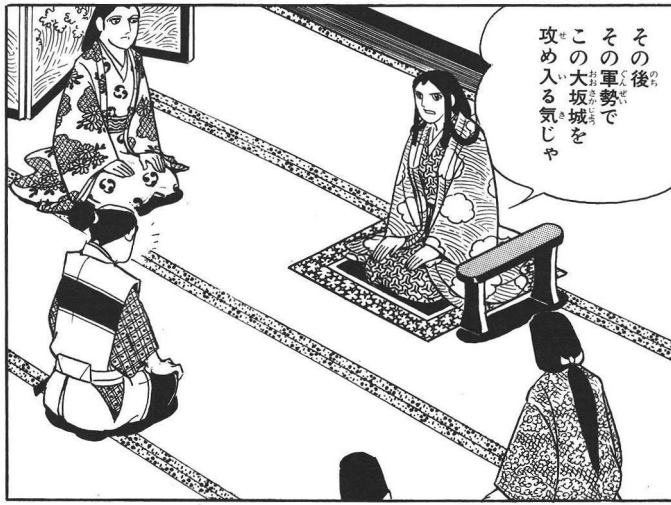

大坂城


なにっ！
秀忠が十余万の
軍勢をひきつれ
江戸を出たと
はい


そうか
これで家康の
肚は読めました
ぞ

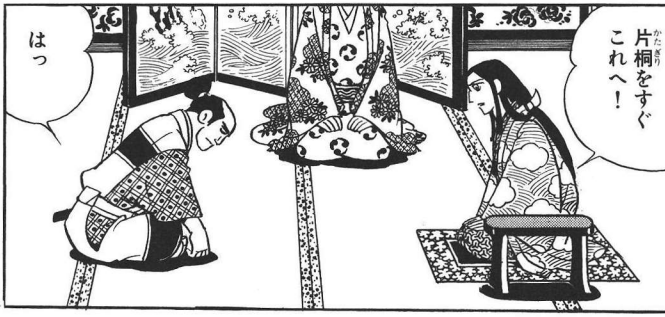

家康は秀頼を
伏見に呼びよせ
暗殺する気じゃ


えっ


その後
その軍勢で
この大坂城を
攻め入る気じゃ


よいかえ
よく考えて
みるのじゃ
豊臣家の後継が
いるからこそ
亡き太閤殿下に恩を
こうむった大名達は
その恩に報いようと
するのじゃ


だが 秀頼がいなくなれば 豊臣家には主はいない その豊臣家にそれらの大名が今までと同じように肩入れするであろうか 家康の狙いはそこにあるのじゃ
秀頼を伏見に行かせてはならぬ

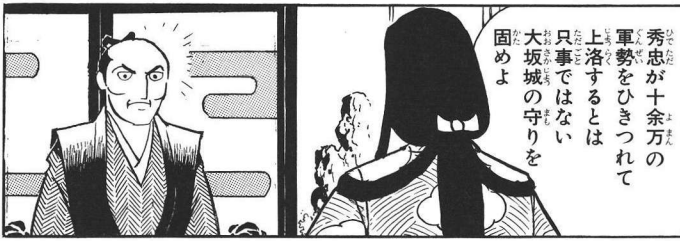

片桐をすぐこれへ！
はっ

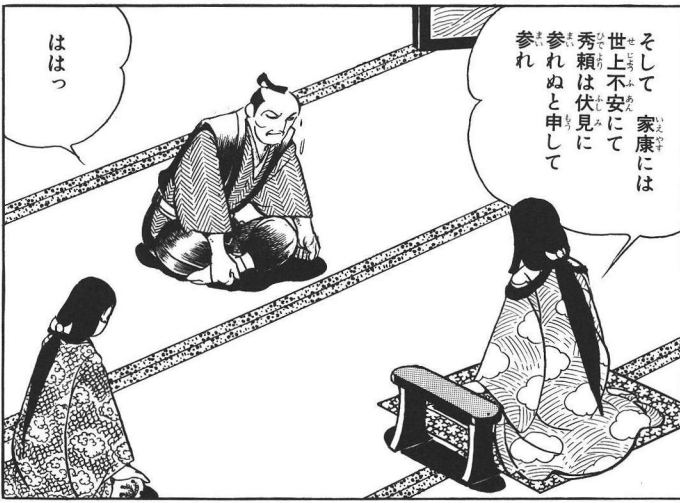



且元にございます


おう　且元これへ


そなたも世上の噂を聞いたであろう
はい

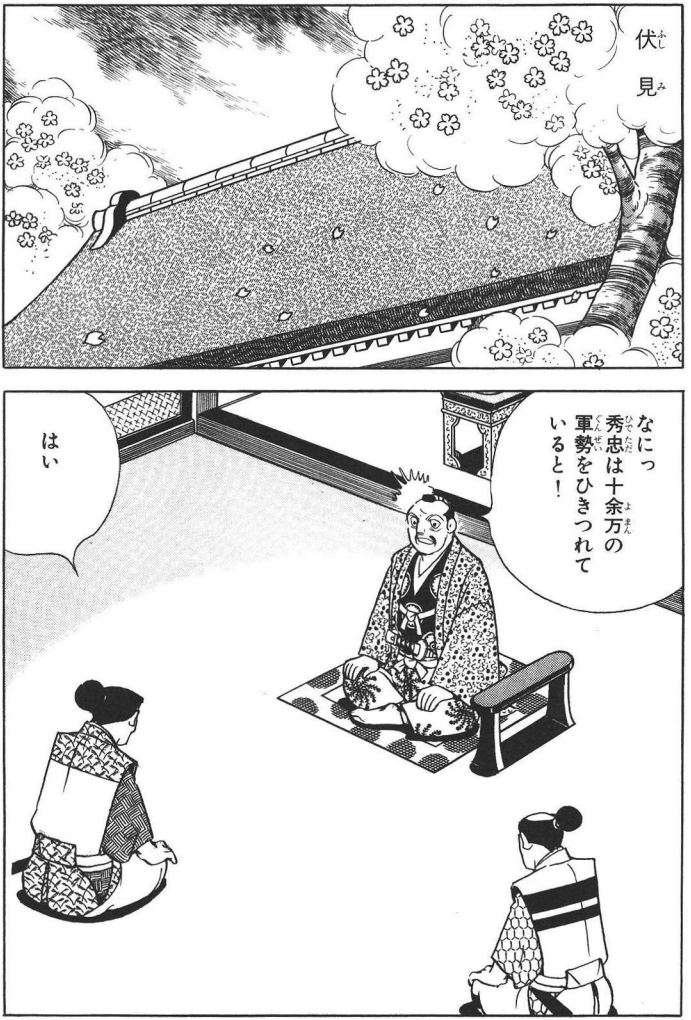

秀忠が十余万の軍勢をひきつれて上洛するとは只事ではない大坂城の守りを固めよ


そして 家康には世上不安にて秀頼は伏見に参れぬと申して参れ
ははっ

＊世上（よのなか。世間）

若き名代




伏見
なにっ
秀忠は十余万の
軍勢をひきつれて
いると！
はい


宮中に参内するのになぜ そのような大軍をひきつれてくる
恐らく新将軍の威光を示したかったのでございましょう


馬鹿な!
世間はそんなふうには受取るまい


はいいよいよ 大坂と一戦が始まると申し街道という街道は避難民でごったがえしておりまする


馬鹿者！
馬鹿者!!

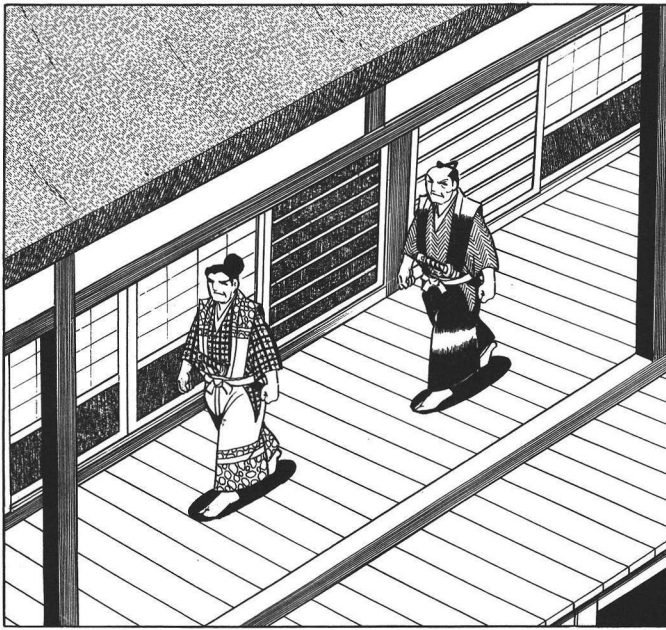



申しあげまする
大坂より
片桐且元さまが
お見えで
ございまする


片桐が……
やはりのう


通せ


はっ




片桐且元にございます


おう 且元
遠慮はいらん
近う


上様にも
お変りなく
うむ


ところで
豊臣家の家老が
直々に　なんの
用じゃ


近頃の世上の
噂をお聞きに
ござりまする
か

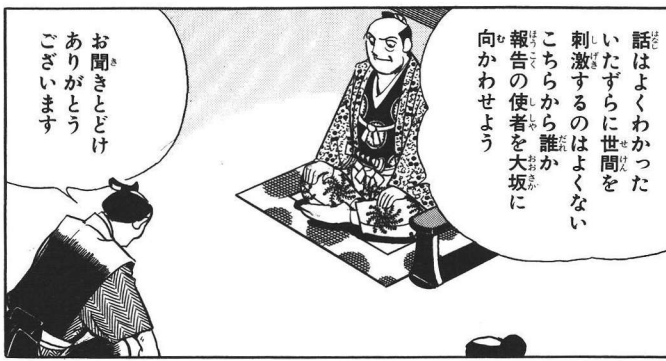

さあのう
何かあるのか
徳川と豊臣が
合戦を始めると
いう噂でござり
まする


ほう なぜそのような噂が出たのじゃ
新将軍秀忠さまが上洛にしては数の多すぎる軍勢をひきつれているからにござります
おう あれかあれは秀忠がお祝い気分で派手にしたかったからであろう
そのため 街道という街道は避難民の群であふれ身動きもならぬありさま


それに関ケ原の合戦以後
浪人が巷にあふれ
空巣や強盗の数もふえ
それがしが ここに
来るのも危険なくらいで
ござりました

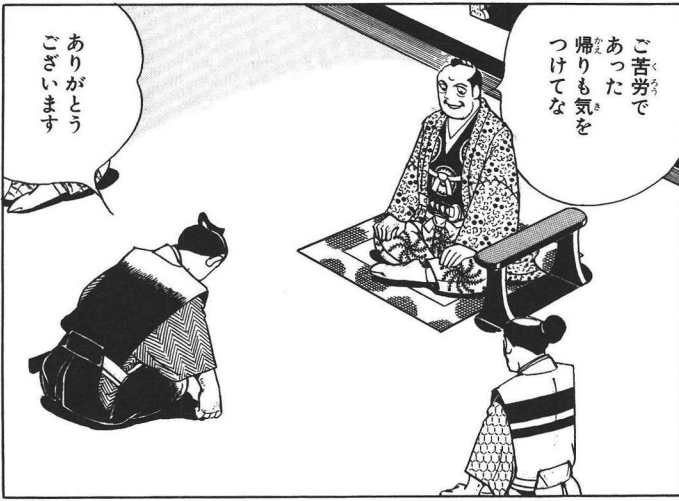

秀頼さまは
新将軍に祝辞を述べに
伏見に参りたいので
ござりまするが
このような混乱の時に
わずかの供では不安で
ございます といって
軍勢をつけまするとまた
合戦の噂が真実味を
増し ますます世の中
混乱いたします

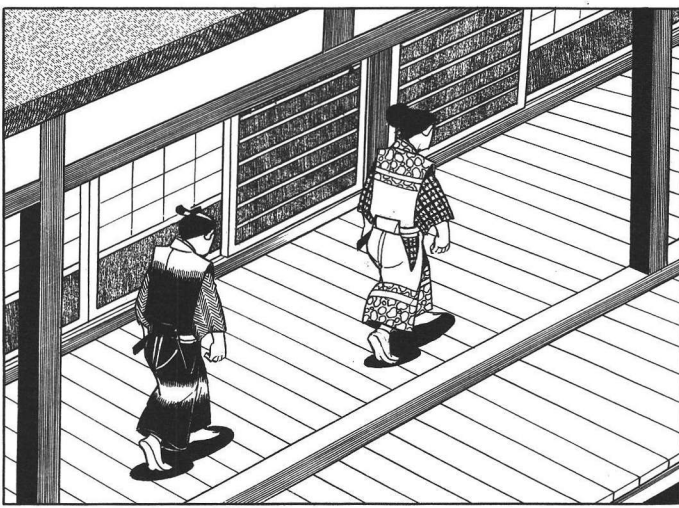

それゆえ
新将軍への祝辞の儀
このたびはお許し
いただきたいので
ございます
うむ
うむ

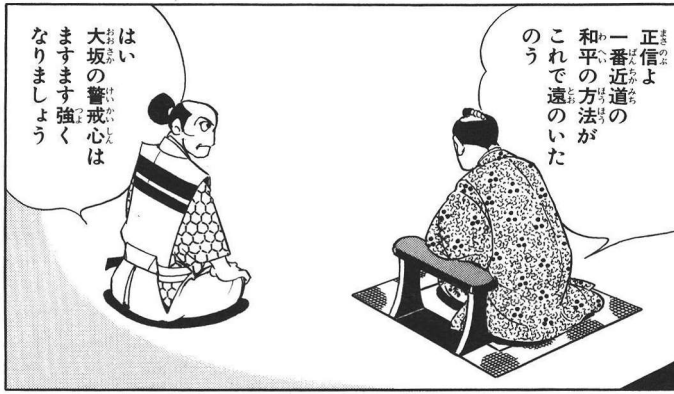

話はよくわかった
いたずらに世間を
刺激するのはよくない
こちらから誰か
報告の使者を大坂に
向かわせよう
お聞きとどけ
ありがとう
ございます


お千は元気に
やっておるか


はい


ご苦労であった
帰りも気をつけてな
ありがとうございます




正信よ
一番近道の
和平の方法が
これで遠のいた
のう
はい
大坂の警戒心は
ますます強く
なりましょう


それにしても
秀忠め
なんという愚かな
ことをしてくれた
関ケ原合戦に
遅れた以上の
愚劣な行為じゃ


新将軍に
お選びに
なったのは
大殿でございます


わかっている
わかっているが
のう……


こうなると
大坂へ報告に向かう
使者は 一人しか
おりませぬな
?
秀頼さまを
おびやかすことなく
淀君にも 合戦など
露ほども思わせぬお方
つまり 秀頼さまと
あまり歳の変らない
……
子供を使者に
立てろと申すか
御意 先日
従四位下右近衛
権少将に叙任された
忠輝さましか
おりませぬ
忠輝を……
だが あれは
鬼っ子だぞ
素行が悪い









*麒麟（ぬきんでてすぐれた人物）



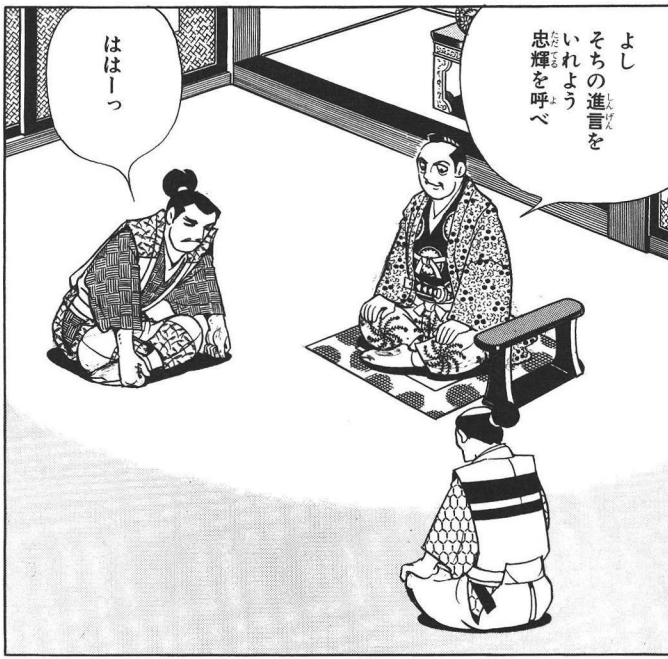






＊腹蔵（心の中につつみかくして、外に現さないこと）


そうか 忠輝は
それほど人気が
あるのか
若い者は
みな 忠輝さまが
好きなようで
ございます


よし
そちの進言を
いれよう
忠輝を呼べ
ははーっ

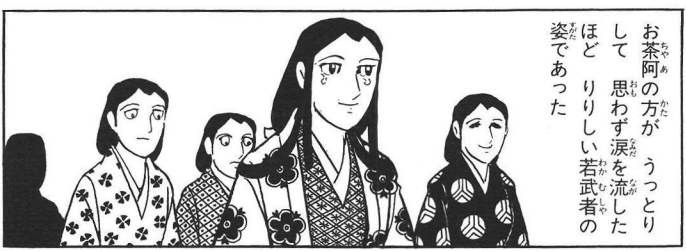

忠輝はこの時
十四歳になっていた
愛するお雪を
失った日に髪を切り
今は立派な若武者に
なっていた

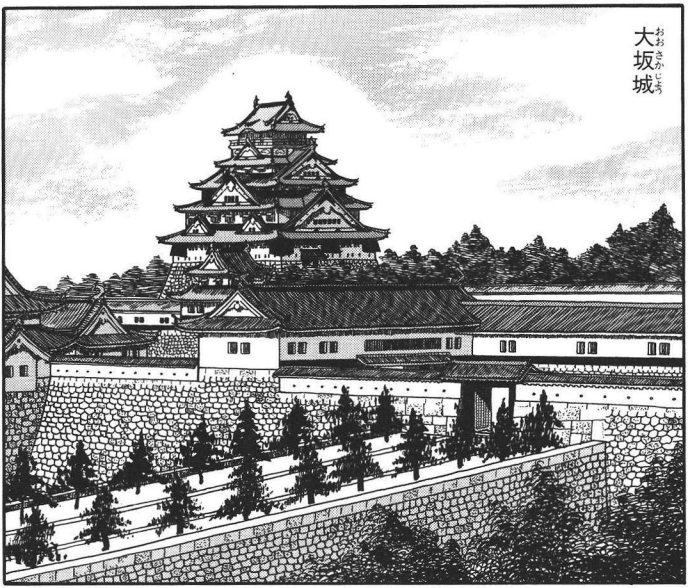

お召しに
ございまするか


おう　忠輝
そなたに大役を
まかせたい


じつは 新将軍 徳川秀忠の名代 として 大坂城へ 行ってもらいたい
知っての通り 秀頼どのは まだ十三歳…… そなたより一つ 歳下じゃ それゆえ 手頃の使者の方が よかろうと思ってな
大坂城へ参り 徳川秀忠が 新将軍を継いだと ご報告申しあげる のじゃ
わかりました


五月十一日
忠輝は新将軍秀忠の
名代として
大坂城へ向かった
忠輝が歴史の
表舞台に名を出し
たのは この時
からである

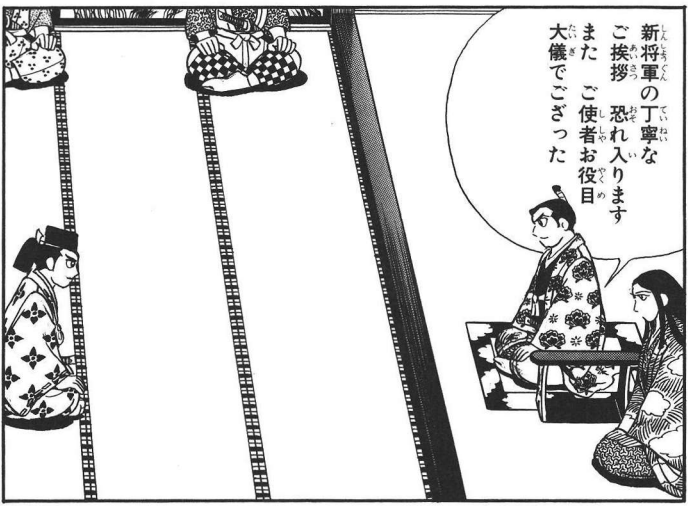

お茶阿の方が うっとり
して 思わず涙を流した
ほど りりしい若武者の
姿であった


大坂城


敵意に満ちた
目が 忠輝に
そそがれた


本日
従四位下右近衛権少将
松平上総介忠輝
新将軍の名代として
参上いたしました

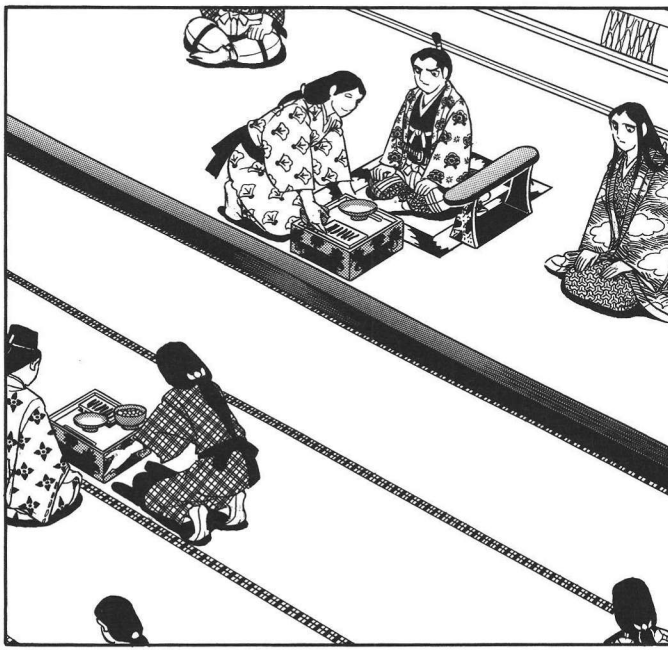

父家康　老齢のため
徳川秀忠が後を継ぎ
新将軍となりました
宮中においても
お認めをたまわり
ここに　ご報告を
申しあげます


新将軍の丁寧な
ご挨拶　恐れ入ります
また　ご使者お役目
大儀でござった


堅苦しい挨拶は
このくらいにして
供応の宴じゃ

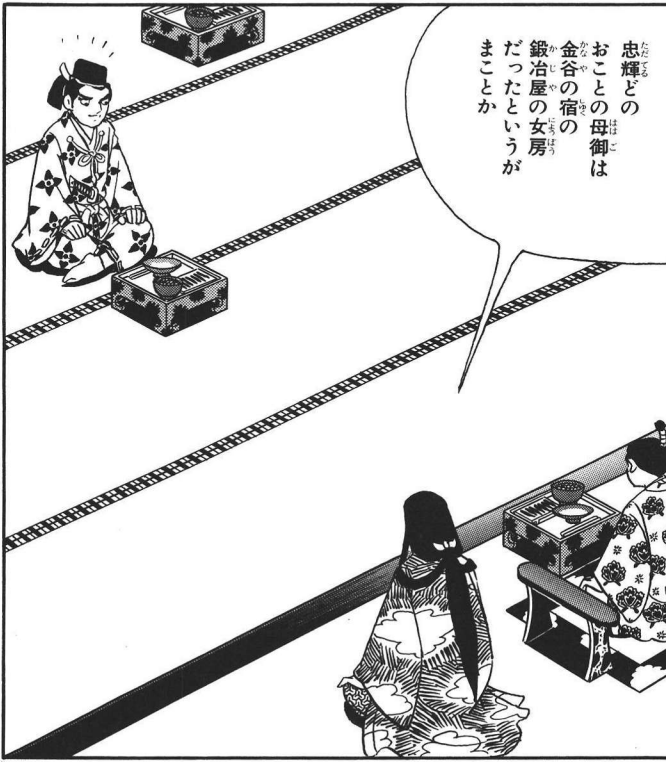

はっ






いただきまする


さあさあ遠慮のう召上れ


忠輝どのおことの母御は金谷の宿の鍛冶屋の女房だったというがまことか


さよう


家康どのも
物好きな殿御よな
どこがそれほど
よいのか……


それはわしにも
わからぬが
少なくとも母者は
於江の方より
ずんといい女だな

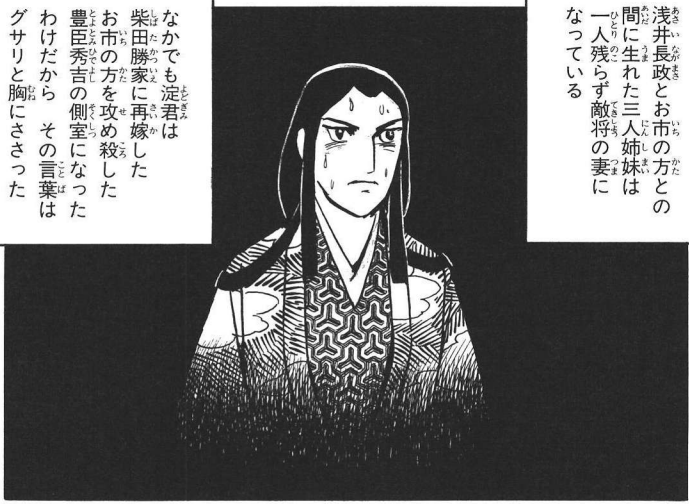

なにっ
わらわの妹
よりも！


そなたの歳で
女子の
よしあしが
わかろうか


そうだな
……
でも 於江の方は
敵の伜の嫁になったが
わしの母者は立派に
亭主の仇をとったぞ

浅井長政とお市の方との
間に生れた三人姉妹は
一人残らず敵将の妻に
なっている

なかでも淀君は
柴田勝家に再嫁した
お市の方を攻め殺した
豊臣秀吉の側室になった
わけだから　その言葉は
グサリと胸にささった









松平上総介忠輝さまは
鬼子じゃと申します
お生れの節
色あくまでも黒く
目はさかしまに裂け
あまりに恐ろしげな
ご様子に　さすがの
家康さまが捨てよと
お命じになったとか
……

またか……
その話は耳に
タコができるほど
聞いている

新将軍の名代として
来ているおれの
悪口をいうことで
新将軍秀忠を
さげすもうと
しているのか……

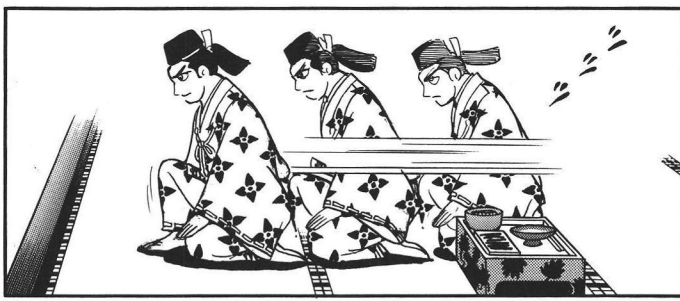
それならば
許すわけには
このまま引下がっては
使者の役目を果たした
ことにならぬ

といって　この
えらぶった女を
斬るわけにも
ゆかぬし……
おどしの一手か



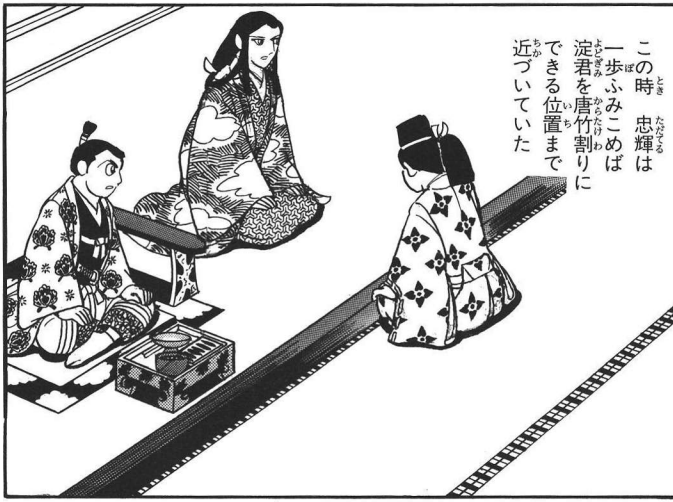

一つ抜けていますぞ
わしは生れた時
腕に魚の鱗が
あったそうな


一つその跡を
お見せいたし
ますか








この時 忠輝は
一歩ふみこめば
淀君を唐竹割りに
できる位置まで
近づいていた


そこで 殺気を
ほとばしらせた

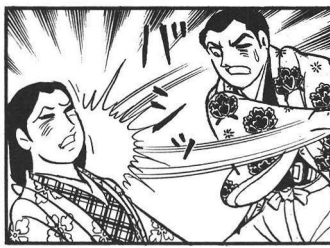



ひーっ
こやっ
わらわを
殺す気じゃ


ひーっ
もう
だめじゃ
ほらね
そういえば
何か 跡が
あるだろう
カクン
無礼者！






バシッ


御使者への
悪口は　わしを
辱めるものだ
許さぬ　手打に
いたす




正之助！
太刀を持て


なにを
ぐずぐず
いたしておる

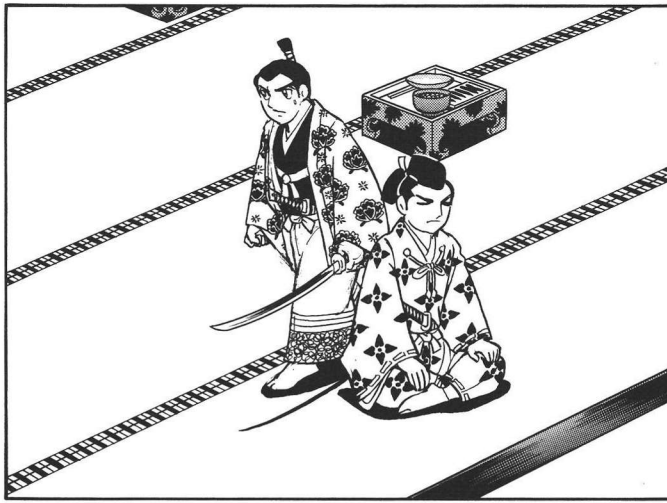

淀君さま


ええい
この城の主は
わしじゃぞ




チャリ


なりませぬ

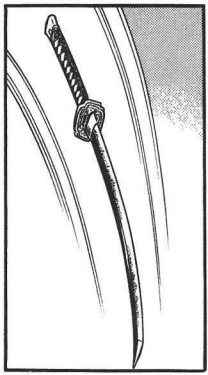


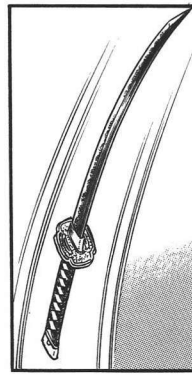

うん？
刀が消えた
刀はここにございます
いつの間に……
女を斬っても仕方ないでしょう


他愛ない軽口ですよ
気にもならぬ


しかし


わしは鬼っ子に生れてきてよかったと思っているんでね






パチン




鬼っ子でなくて
こんなまねが
できますか
ほんとだ


はっははは
千のいう通りだ
鬼っ子って
本当に
すばらしいんだ

◉初出誌

時代小説コミック①～③

（1992年～1993年　講談社刊）

捨て童子松平忠輝 人物相関図



初代将軍 徳川家康

主従

本多正信

信吉　忠吉　秀康　信康

三男



主従

柳生宗矩

於江の方

二代将軍 徳川秀忠

親子

柳生一族



奥山休賀斎

幼馴染



千姫

婚姻

茶々 ―― 豊臣秀吉

友情



豊臣秀頼

キリシタンたち

主従



大久保石見守長安

側室



お茶阿の局

六男

松千代
仙千代
義直
頼宣

陰から支える

主従



雨宮次郎右衛門忠長

利用



調査



才兵衛

松平忠輝
(幼名・辰千代)

伊達政宗

正室

五郎八姫

側室

竹

陰から支える

傀儡子の民

捨て童子
松平忠輝
上

平成22年1月20日　初版発行

著者
横山光輝＋隆慶一郎

発行者
秋田貞美

発行所
株式会社　秋田書店
〒102-8101 東京都千代田区飯田橋2-10-8
編集☎03(3265)7374　販売☎03(3264)7248
振替00130-0-99353

印刷所
大日本印刷株式会社

装画
横山光輝

装幀
Creative・Sano・Japan

造本には十分注意しておりますが、落丁・乱丁(本のページの抜け落ちや順序の間違い)の場合は、購入された書店名を記入の上、「販売部」宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。但し、古書店で購入したものはお取り替えできません。

(禁／無断転載・放送・上映・上演・複写・公衆送信)
©光プロダクション・羽生真名 2010, Printed in Japan

ISBN978-4-253-17918-8

秋田書店



9784253179188

ISBN978-4-253-17918-8
C0179 ¥781E (0)

1920179007817

秋田書店

定価：本体781円＋税



捨て童子
松平忠輝